二次元ドリームマガジン

DREAM MAGAZINE

Volume 110

18 未満

本誌再登場

左藤空気

試し読み版

今号の特集 Special Fetishism Series

悪堕ち

CONTENTS

03 VOLUME 113

表紙イラスト／左藤空気
お外に出たくないです！！

天煌聖姫ヴァーミリオン
悪魔の研究所
[漫画]火愚夜 [原作]有機企画

ふたなりと悪堕ちは相性いいですね。原作の方もよろしくお願いします。(火愚夜)

愛聖天使ラブメアリー
淫悦の堕天使
[小説]狩野景 [原作・挿絵]左藤空気

今更ですがニーア オートマタにハマってます。ロボ好きを鬱に陥れるゲームでした。(狩野景)

●連載&読み切り漫画

きらら★キララNTR
魔法少女は変わっていく… THE COMIC
[漫画]雨宮ミズキ
[原作]さかき傘
[キャラクター原案]希望つばめ

きらら★キララ NTR のゲーム版が出るそうなので個人的にも楽しみにしてます。(雨宮ミズキ)

永遠のメスガキチンポ掃除機かなで
[漫画]じゃがうさ

久々に描かせて頂きました！　悪堕ちとは違う物に…ですが、楽しんで頂ければ幸いです！（じゃがうさ）

超昂神騎エクシール
～双翼、魔悦調教～ THE COMIC
[漫画]SHUKO
[原作]アリスソフト
[原案]峰崎龍之介

タブペンが壊れて使っていない方を持ってきたら、そっちもいつの間にか壊れていました。(SHUKO)

堕天司祭エリエ
～女の性に敗れた信仰～
[漫画]ばふぇ

眼鏡っ娘の眼鏡をはずすと言う暴挙にでました。申し訳ありません！　有罪です。(ばふぇ)

●連載&読み切り小説

特務騎士クリス
～エリート軍人異種交配録～
[小説]089タロー
[挿絵]TANA

またまた書かせていただいております。ご覧いただき光栄です。長文になってしまったのはどうかご容赦を。(089 タロー)

魔法少女フェアリーハート
カラー小説
雑魚戦闘員との交尾事情
[小説]き一子
[挿絵]ZOLA

もしも悪堕ちヒロインになったらごみの日を守らずに出して怒られたいです。皆様、お身体に気をつけておシコりください。(き一子)

退魔風紀委員会
～巫女学園ふたなり姦落～
[小説]あらおし悠
[挿絵]築

観たい映画はたくさんあるのですが、ハシゴする体力がめっきり減った気がします。(あらおし悠)

魔王堕ち聖母マリナ
淫欲に寝取られる勇者たち
[小説]木森山水道
[挿絵]阿呆宮

戦うママのラスボスは愛欲と妊娠本能？　作業BGMはドラ○エ4のサントラでした。(木森山水道)

純聖天使カインドホープ
カラー小説
地に堕ちる正義
[小説]でぃふぃーと
[挿絵]モチマコ

読み切りでのヒロインですが、このヒロインでまた違った展開を書いてみたいですね。(でぃふぃーと)

紅に染まる
～退魔師悪堕ち調教～
[小説]峰崎龍之介
[挿絵]mogO-721

実は悪堕ちヒロインって初めて書いたのですが、エロくて良いですね。掘り下げ甲斐がありそうなので、またなんか書きたいなぁ。(峰崎龍之介)

武装聖女アルトレッタ
～淫らなる浄化～
[小説]黒名ユウ
[挿絵]PINTA

ドリーム文庫向けに『JOKER』みたいなのはどうかと編集部からご提案が。無理です。いちゃラブやぞ>＜(黒名ユウ)

ママは対魔忍
乱れ堕ちる熟くノ一
[小説]新居佑
[挿絵]えれ2エアロ
[原作]BlackLilith

今年こそは！と部屋の模様替えを実施中です。室内布団干しって、めっちゃイイですねっ。(新居佑)

●特選コラム

二次元GスポットXtasy　夢崎
ちゆ12歳のひとりえっち　ちゆ
官能小説執筆汁まみれ ～作家のココロ～　筑摩十幸
美少女コミック雑誌のゲンバ　稀見理都
にゃるらのブログ出張版　にゃるら

●今号の特集

悪堕ち特集

繰り返される交配実験に、
戦士の矜持が甘く蕩かされていく!
前回までのあらすじ
異星人の侵略に対抗すべく、地球防衛軍に所属し"特務騎士"として戦う美しき女隊員クリス。だがとある任務中、クリスは宿敵ジャグハバットの手に落ちてしまう。人質の隊員たちを守るために彼女に課せられたのは、不気味な触手生物との交配実験であり……?
特務騎士
クリス
Special Knight CHRIS
エリート軍人
異種交配録
ミルク・アンド・ロストタイム
(育成、そして……)
小説 NOVEL
089タロー
挿絵 ILLUSTRATION
TANA

「――それで？　今度は何をやらせようというんだ」
再び広間を訪れたクリスは、開口一番、冷淡にそう問うた。
先日と何も変わらない空間。天井の高いドーム型の殺風景な部屋が、薄灰色の無機質な光沢を放っている。
ガードロボットが清掃したのだろう。恥辱の跡はもう見られない。乱れた服装もひとまず整え、汚濁もひと通り拭き取った今、あの出来事は夢だったのではないかとすら思えた。
「要求を呑めば仲間たちに食事を与える、そういう約束だったはずだ」
そのためにここに来たのだからと、クリスは言外に急かす。
「そう慌てるな。今回は以前と少し違う。教育というよりは育成を手掛けたいと思ってね」
伊達眼鏡を指であげそう話すのは、白衣姿の人に化けた異星人だ。名はジャグハバット。マリグーノの中でも特に危険な上位種的存在。
彼が指を鳴らすと壁面の重厚な隔壁（かくへき）が開き、自称最高傑作とやらが宙をゆらゆらと泳ぎ、進み来た。

トリビュート――ジャグハバットが創造したという人類にもマリグーノにも属さぬ新種の異種生命体。

巨大な白いクラゲに似たその異形の姿を見て、クリスは知らず息を呑んだ。

「これはマザー？　しかし……」

「見ろ、お前の蜜を吸ったおかげか前よりひと回り巨大になった。あれから一切捕食していないにもかかわらずだ」

マザーと呼ばれるその個体は蟻や蜂でいう女王に類する存在だそうだ。今現在は繁殖能力を持たずファミリアと呼ばれるクローン体が別で存在する。

そのマザーが、つい先日に比べ明らかに大きくなっていた。クリスが驚いたのはそのためだ。

（たった一日足らずでここまで育つとは。凄まじい自己進化能力を持つという話は事実なのか）

こうして虜囚となる以前にファミリアどもと戦ったが、単純な戦闘能力のみならば確かに高いが無敵でもない。実際にクリスは三体を撃破している。特務騎士があと一人いればあるいは殲滅（せんめつ）できたやもしれない。

（だが今は？　成長し学習し変化も現れた。仮に戦って私は勝てるのか？）
実戦に勝る訓練は無いとはよく言われる台詞だが、この化け物らは実戦を経て格段に強化されたのやもしれなかった。
しかもマザーに至っては、その実戦が、性的行為であったという……。
「牡の遺伝子も以前より活性化が見られる。体組織肥大はその影響と推測された。やはり生殖本能は進化を加速させる」
こちらの緊張が伝わったのか、ジャグハバットはさも愉快とばかりに語る。
「そこでだ。今回はより良い栄養補給のために、母乳を与えようと思ってな」
「……何？　母乳、だと？」
「人間の牝の母乳には良質な栄養素が多く含まれるそうじゃないか。せっかく牝がこうしているのだ、好都合だとは思わんか？」
クリスが最初に覚えた感想は、羞恥などではなく純然たる呆れだった。
「……出るわけがない。私は女だが妊婦ではない。そんな事も知らないのか」
日頃着用するパワードスーツのおかげで男と勘違いされるのは常だが、女と知るや母乳を出せとは心底馬鹿げていると思った。

「ククッ、知らんのはお前の方だ。人体というものを何も理解していない」
ジャグハバットは愚者を見る目で、両掌を上にし肩を縮めてみせた。
「人体とは脳が生み出す欺瞞（ぎまん）で動く。胃が空になれば脳が食事を求めよと言う。体温があがれば不快感を作り冷やせと命じる。膀胱（ぼうこう）が膨らめば尿意を生み出し排泄せよと促す。脳がそう感じそう命じればそれは実現するのだ」
まるで一端の化学者がごとく男は淀みなく語る。
「ならば妊婦は？　胎に子がいると脳が感じれば乳房にミルクを出せと命じる。乳腺を活動させ開きミルクを作りだすよう指示する。脳がそう感じる事こそが何より重要なのだ。真実か否かなど問題では無い」
門外漢のクリスであってもここまで聞けば理解できた。要は脳にそう思いこませれば良いという論理だ。
タイミングを見計らったように床が開き実験用の大椅子が現れ、ガードロボ二体が腕を掴み、椅子に座らせ固定してくる。
両手首両足首を金属輪で固定され、身動きとれなくなる事に焦りつつ、クリスはなおも言い募った。

「無理だ、いくら脳が錯覚しようと一朝一夕で出るわけがない、肉体にはプロセスが必要だ！」
「安心しろ、血中のナノマシンに働きかければ不可能ではない。細胞を活性化させ自然治癒力を高めるのと同じ要領だと思えばいい」
椅子の脇からマシンアームが伸び頭部に電極をつけてくる。頭からコードを伸ばす姿は人体実験の被験体さながらだ。
直感的に危機感を覚えクリスが歯を見せて狼狽する中、ジャグハバットは一切の躊躇なく手にした端末のスイッチを入れた。
――ビリビリビリビリバチバチバチバチッ！
「がっ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あッ!?」
クリスはアイスブルーの目を見開き、脳内に走る強烈なスパークに悲鳴をあげて悶絶した。
「クハハハいいザマだ！　拷問までまとめてできるのはいいアイデアだと思わんか？」
ジャグハバットは嬉々としているがその神経を疑うしかない。脳に信号を送る

だけならば別の手段もあるだろうに、あえてこの方法を選ぶのは苦痛を与える目的に他ならない。

（眩暈（めまい）がする、吐き気もっ、脳に火花が散っているみたいだッ！）

電流が脳内を駆け巡るごとに失神しそうな激痛が走る。脳に痛覚は無い、されどその周辺は別だ。皮膚や神経が感電し脳が苦痛を感じ取る。脳神経が感電する事で関節が勝手に暴れ回り、さながら壊れた玩具のごとき滑稽な有様となった。

（飛ぶ、意識が飛ぶッ、思考すらもう、まともにィ――！）

逃れようにも手足は動かず全身まとめてぶるぶると痙攣（けいれん）、瞳の奥が白く明滅し何度か勝手に目が裏返る。化学反応による反射で四肢が硬直し筋繊維が不自然な動きを始める。大量に発汗し、暴れて首を振り、ガチガチと歯が音を立てても、自らの仕草を顧みる事すらできない。

やがて得心がいったらしくジャグハバットが電流を止めても、クリスはまだ痙攣し続けたままだった。

「ハァハァハァッ、クヒィ……！」

「ククッ、無様だなぁ。まるでアクメ寸前のアヘ顔のようだったぞ」

そう言われても、もちろん何も言い返せない。舌まで痙攣し満足に動かないのだ。

「さて次だ。今度はこのエロいデカ乳を開発してやろう」

ジャグハバットは電極をそのままに、新たなマシンアームを起動させ、レーザーメスに似た器具を複数、胸の膨らみに近づけてきた。

門外漢だがクリスとて知識はある。レーザー式の送電機器だ。医療現場では接触不要の電極パッドと言える代物で、主にピンポイントでの電圧治療に用いられてきた。

その細く尖ったレーザー射出口が、豊満な乳房を取り囲むようにして周囲に構える。

「次は乳腺に信号を送る。脳からの指示に先立って母乳が出やすいよう刺激しておくのだ」

「な……だと、乳せ……ま、で……くひッ、ほおおォ!?」

「これほどのデカさだ、隅々まで刺激し乳腺を緩ませてやらんとなぁ」

――ピーピピッ、ヂヂヂヂバチバチバチバチ……！

射出口から赤く細い光線が伸び、むっちりとしたたわわな膨らみに多方向から電流を送ってきた。

（し、刺激、されているッ――分かる、乳房の奥がじんじんとしてきて――電気が流れる、痺れる、熱いィ――!?）

現在身に纏（まと）う薄手のインナーにも多少の防護機能はあるが、それを避ける絶妙な波数でレーザーは内側のみ焼いてくる。

そう、クリスには焼かれていると感じられた。レーザーメスで中の神経を麻酔無しで縫合されているかに思えた。

だというのに痛みはほとんど無い。じりじりと神経を焼かれる傍ら、脂肪そのものをも適度に燃焼させ解してくるかのようにも感じる。

まるで無数の細かな指が、乳房の内側を直に掴んで揉み解すよう。

クリスには不思議とそう思え、熱感と共に奇妙な高揚をも覚えてしまった。

（乳房の奥を直接っ――ああ、びりびりくる、ますます熱くっ――溶けていく、みたいにぃ……!?）

身体を細かく揺すってみても、その都度レーザーは追いかけてきてスーツの内

側を絶えず焼いてくる。傍から見れば二つの乳房にいくつもの光線が突き刺さっている風にも映るだろう。その光線は時折チカチカと明滅し、豊かな丸みを持つ稜線に沿って撫でるように位置をずらしていく。

（乳房の芯が、と、溶けていく……柔らかく溶けて、か、感度が……！）

これまで経験した事の無い不可解な疼きが胸を侵食していく。なぜかもどかしく芯の辺りが妙にむず痒い、そんな感覚が胸に広がり少しずつ呼吸が乱れてくる。

「はぁ、ハァ、と、溶ける、胸ぇ、あ、熱い、熱いぃ……!?」

「さて、どうだ、そろそろ母乳は出そうか？」

しばしの観察後、ジャグハバットが顔を寄せて胸を両手で掴んでくる。

「どれ、揉んでみるか。そら、そぉら」

「んっ、くぅ……!?　はぁァ……！」

突き刺さるくらいに沈みこむ指が、青い生地に包まれた柔肉をぐねぐねと揉みしだいてくる。

クリスは半ば放心していたが思わず肩を震わせていた。感度の上昇がそうさせるのか、痛いほどの乱暴な指圧が不思議と悪く感じない。本音では罵倒してやり

たいところだが乳房は妙な疼きまで覚え、無骨な手の中で柔らかにたわみ先端を微かに尖らせた。

乳首が痺れる、何かがおかしい――そう感じ小さく唇を噛むも、生憎とそれ以上は特に何も起きる気配が無い。

「妙だな、まだ出んか。脳には確かに信号を送ったはずだがな」

「ハァ……フゥ……っ、所詮は欺瞞、偽の情報だ……人体はそこまで間抜けではない」

万一を思い密かに不安に思ったものだが、何も出なかった事にクリスは軽く安堵した。

「諦めろ、粉ミルクでも与えてやるんだな」

「困ったものだ、ひょっとして刺激が足らんのかぁ？」

（っ、こいつ……!?）

さして意に介さぬ男の態度を見てクリスは悟る。現段階では出ないとハナから知っていたのだと。空とぼけ煽りながら順を追って続ける気なのだ。

男は胸から手を離すと、実にわざとらしい笑みを作った。

「おおそうだ、このレーザーにはマッサージ機能もついていたのだった。幸運だな、俺がやらずとも機械がじっくりと揉んでくれる」
「な、何？　え、ぇえっ……!?」
男が端末を操作するとレーザー光の直径が増して、円形の光が乳房に向けて降り注ぐ。刺激の範囲を広げるために違いない。
次いで新たにスイッチが押されると、送られてくる電流の質が明らかに変化した。
――びくん、びくん、びくん、びくんっ、ぶるるっ、ぶるるっ、ぶるるっ、ぶるるっ！
「くあっ、む、胸が、乳房が、痛いっ、揉まれるっ……!?」
ダイエット器具などに時折見られる電圧によるマッサージ機能だった。それが筋肉を刺激する要領で乳房に刺激を与えてきたのだ。
（電圧が強すぎるっ……痛い、振動が、む、胸をぉ……！）
恐らく最大稼働なのだろう、あまりに電圧が強すぎるためか乳房全体が激しく揺れる。胸筋が振動するのだろうが、それが豊かな二つの膨らみにも強く影響し

オトナになっちゃった魔法少女はご機嫌ななめ…

十萌きらら

9月1日

ズーン…

学校に行きたくないなぁ

うだ

うだ

ムス…

ムッ

若いモンがだらしないアメねぇ

遅刻するアメよ

誰のせいだと思って…！

2週間前にあんなことがあってから…

エマが家に住み着いたり
おばさんから
魔法少女として
戦う説明を受けたり…

また魔法少女として
戦うことがあったりで
忙しかったんだから！

あッ

バサッ

落ち込む時間
くらいほしいよ！

ほら
落ち込んでないで

ぴょん

あっ

いつも見てる
占いでも見て
気分を変えるアメ

チャラ〜♪

ぴ〜

マダム・マリ・カトリーヌの
『夢で逢いましょう』

チャラ〜♪

きらら★キララ NTR THE COMIC

KIRARA★KIRARA

魔法少女は変わっていく…

2話

チャラ〜♪

あなたの運勢

Looking!

しちゃうわよォ

わき

う。

今日もあなたの
願いが叶うことを
祈って

チャラ〜♪

わき

漫画 COMIC／雨宮ミズキ（あまみや）

原作 ORIGINAL／さかき傘（かさ）

キャラクター原案 CHARACTER／希望つばめ（のぞみ）

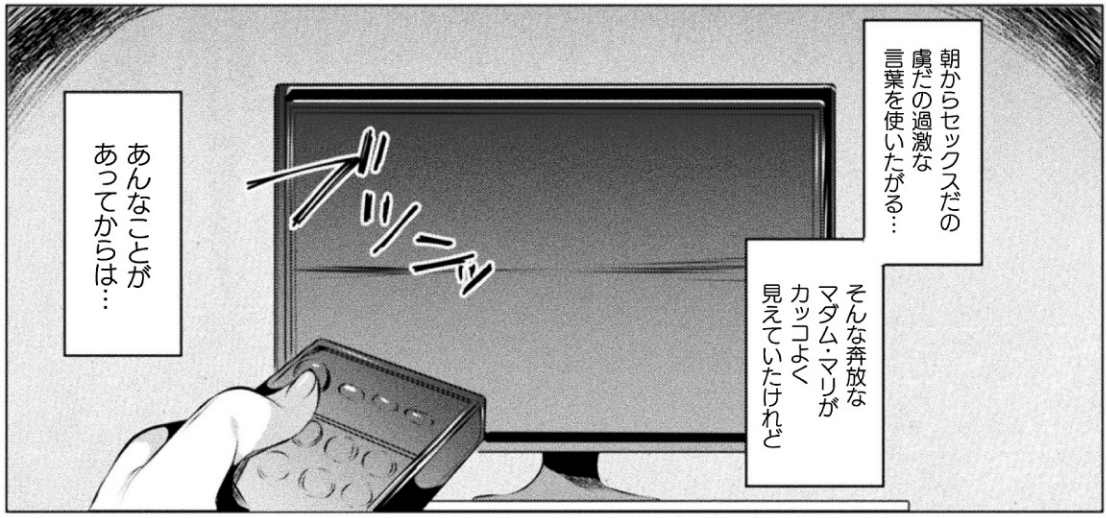
マダム・マリは
心霊系タレントだ

ん〜

ハッ

男を徹底攻撃する
毒舌キャラで
おばさま方から
そこそこの
支持を得ている

獅子座の貴方！
ガオーッ
貴方はとってもLUCKYだわ
解放の運気がバリバぁリあふれてる
自分を解放してFreedomになるといいわね
7/23 ～ 8/22
しし座



あら おはよう ございます

ニコッ

おーっす きらら！

おはよう ミィさん

おはよう ライちゃん

夏休み明け！ テンション 上げてこうぜー！

ビッ

平坂ミサト

小浜ライカ

家庭科室

うう…

チラ…

宮代も おっす！

ッ！ ララん

ビシッ

スッ

おっす…

宮代俊哉

この前のこと 皆覚えて ないんだな…

はーい皆さん 席に着いて〜

キーン

コーン

カーン…

エマ〜…

寝たいんだけど…

もう十時半すぎたんだよ？

アニメ見るのやめよ？

うと…

いくわよ!!

いまイイとこだからちょっと待つアメ！

これもきららをよりよい魔法少女にする研究アメ！

もうその言葉聞き飽きたよ〜…

ドサッ

つづく

終わったね？寝ようよー

だめアメ！いまのキュアプリはEDも全部見ないと！

3Dのこれからが詰まってるアメ！

はいはい…

ああもう！このまま寝ちゃお…

う〜…

えっ!?

ここは
どこ…?

ピーヒョロロロ…

私
寝てたよね…?

というか
なにこれ
夢?

そう!
そうよ!

もっと自分を
解放するの!

今度は
何!?

お任せ

ワタクシは
すべての
女性の味方よ

あらァ?
新人さんかしら

Welcome
マリカのセカイへ

マリカ…!?

ここへ来た
ということは
あなたも悶々とした
Everydayを
送ってるのね

あなたの真の願望
このマリカ様が
Openにして
あげるゥ

モヤ…

ビシッ

マダム・マリ…!?

それに
この反応…!
マカイジュ!?

とにかく変身よ！
エマっ！
エマ…？
エマー？
キョロ
キョロ
…？
なァに？あなたの欲しいモノはこれ？
へ？
ぽーっ
よくわからないけど
ふぬりゃ――――！
うふ Costumeにこだわるのはいいことよ
何する気か分かりませんけどいきなり行かせてもらいます！
でりゃあああーっ
ドンっ

あれ？
ワタクシを攻撃したいの？
Sorryそれは叶えられないわ
よく見たらこれエマじゃない!?
おもちゃだ！
ズゴーン
スッ
はいはい大人しくして
しゅるっ
うあ!?
ぎゅっ
うふふこのセカイではマリカのルールは絶対なの
どうしようエマを呼ぶか逃げるかしなくちゃ
フフフ…
でも大丈夫だよね？この人女の人だし…
くすっ…
しゅる…
ぎゅっ
ぎゅっ
しゅる…

堕淫した少女たちの饗宴により、
街は獣欲に満たされていく……。
小説／狩野景
NOVEL
原作・挿絵／左藤空気
ORIGINAL・ILLUSTRATION
愛聖天使
ラブメアリー
淫悦の堕天使

粘液質の肉壁が全方位を取り囲む、玉座の間。発酵した果実のような、悩ましい香気が立ち込める、淫靡な空間に二人の少女が恭しく跪いていた。

悪性艶雌サキュメアラピス。その妹のサキュメアステラ。

以前は愛聖天使ラブメアラピスとラブメアステラとして邪悪な敵から地上を守るため戦っていたが、堕邪神エルゼアムに屈し、忠実なしもべとなっていた。

「お呼びでしょうか、エルゼアム様」

玉座にそびえる堕邪神の禍々しい巨体に、サキュメアラピスが媚びた声で尋ねる。

エルゼアムの波動を間近で感じて、すでに発情しているらしい。露出度の高い黒のコスチュームは汗にしっとりと湿り、股間部にはさらに色濃い染みが広がっている。

「なんなりとご命令を」

サキュメアステラも盛った牝の視線を堕邪神に注いでいた。当然、愛液の染みを股間に広げて、物欲しげに尻をくねらせている。

指示を待つ二人へと邪神の巨体から、ヌメった汁を滴らせる、肉色の極太触手

が突き付けられた。
「ああ……はい、命令は御触手から、伝えていただけるのですね」
「ありがとうございます、エルゼアム様。御自らご命令をくださるなんて」
迫る触手に二人は興奮に息を乱して、蹲踞（そんきょ）の姿勢で大股開きとなり、欲情にぬかるんだ股間を露わにした。
触手はその股間へと直接向かわず、まずは彼女たちの太腿に巻き付いた。
「ひぁあっ！」
「はわぁあぁっ！」
ヌラっとした感触が生肌に触れた途端、二人とも軽くイッたようにビクンと身体を大きく震わせた。
「あ、あぁ、はぁあぁ～ん、エルゼアム様があたしに触れてくださってる。ありがたき、シアワセぇ～」
微かにひやりとした感触が、肌を這（は）い回るうちに熱を帯びてくる。
さらに触手から分泌されるヌトヌトの粘液は、付着するとむず痒い刺激を与えてきて、サキュメアラピスが切なげに眉根を寄せて小刻みに震える。

「はぁあぁ～、あふ、んんっ、あふぅ～。ありがとうございますぅ、エルゼアム様ぁ。兄さん、気持ちいいね♪」

這い回る触手が次第に胴体の方へ絡み付いてきて、ヘソ周りを愛撫される快感にサキュメアステラがはしゃぐように身悶える。

その彼女が隣で喘ぐ悪性艶雌を姉ではなく、兄さんと呼ぶ。

サキュメアラピスは本来、真尋(まひろ)ゆづきという少年だった。

とあることからラブメアラピスに変身する力を得て、幼馴染みの朝比奈(あさひな)あかりことラブメアリップとともに愛聖天使として活躍していたのだが、エルゼアムに性別を変えられ女体の快感を教え込まれたのだ。

そして闇の聖母サキュメアリップに成り果てたあかりとともに、妹のゆりをサキュメアリーの一員へと堕落させた。

「こうして、エルゼアム様のおチンポ触手に抱かれているだけで、はぁあぁ、あふぅう、臭(くさ)い匂いに満たされて、堕瘴気(だしょうき)ジンジン染みこんできて、頭、弾けちゃいそう」

「まだ命令をいただいてないのに、あぁあ、はあぁあ、エルゼアム様の太い触手

すごすぎて、はあぁあ、イッちゃう～」

先端を亀頭状に尖らせた触手は、すでに乳房や腕にまで絡み付いて、全身を粘液まみれに汚しながら蠕動(ぜんどう)を繰り広げていた。

「あっ、ふぁ、はっ、あふっ、くひっ、んふぉ、は、あ、うふぅ～」

「んっ、はひっ、はぁん、あぁ、はぁあぁ～んっ、ふわっ、はわっ」

魚介臭い陰茎臭と甘ったるい牝の発情臭が入り混じって、ムンムンと立ち込める中で次第に思考を鈍らせて、下賜される甘美に元兄妹の姉妹が小刻みに喘ぎ続ける。

「くふっ、おツユ、ドロドロ出ちゃう。気持ちいいからぁ、はあぁ、おまんこからいっぱいあふれちゃう」

「あふぅ、私も、おっ、おんっ、あぁぁ、おまんこの奥、キュンキュン止まらない。エッチな汁、あふれっぱなしぃ」

眷属(けんぞく)の本能が主の子種で孕(はら)まされるのを欲して、子宮を際限なく疼(うず)かせる。

いつでも種付けを受け入れられるようにと愛液が垂れ流しになり、二人とも開脚蹲踞の股間から、失禁のようにヌメった汁をジョボジョボと漏らしまくってい

る。
「あぁあぁあぁ、はあぁ、おチンポぉ、エルゼアム様ぁ、おチンポぉお〜」
「はぁあん、あは、くふぁあ、太いの、欲しいですぅ。エルゼアム様、お恵みをおぉ〜」
すでに命令を受けるという目的を忘れて、二人は媚びた笑顔でおチンポをねだりまくっていた。
その声に応えたのか、粘液触手が肌を這いながら彼女たちの股間へ向かう。
くぱぁ!!
触手の進路を妨げるのは不敬とばかりに、コスチュームの布地が開いて、彼女たちの女陰(じょいん)を露わにした。
「はぁ♪」
「んはぁ♪」
外気に触れてヒクつくラピスの陰部は濡れて蕩(とろ)けた陰唇を綻(ほころ)ばせて、肉色のワレメを目一杯に開いていた。
その上端で脈打つ陰核(いんかく)は、男子であった頃の陰茎に比べて哀れなほど小粒で、

少しでも大きく膨張しようとするかのように、赤く充血して包皮から頭を覗かせていた。
そしてワレメの下端では、自分が失った雄々しく立派な男根を求めて膣穴がパクパクと開閉を繰り返している。
ステラの方のワレメは陰唇のビラビラも控えめで、色づきも薄桃にほんのり染まっている。それなのに、陰核は小指の先程にまで勃起して包皮をすべて脱ぎ下ろして粒立ち、隣で喘ぐ兄のサイズを軽々と凌駕していた。
その二人の膣口に、カリ高亀頭そのものな触手の先端がずっぽりとハマる。
「ンオオッ、ほぉううっ、ああっ、エルゼアム様の、おちんぽ触手様ぁ」
「おほぉおあ、まんこに、いらっしゃいましたぁ。んくっ、あぁ、はぅっ」
直に触れると二人とも感電したように背中を仰け反らせて、喜びはしゃぐ。
膣口も亀頭みたいな先っぽをついばむように、キュンと窄まるけれど、その狭くなった穴を無理矢理押し開いて、肉蔓が中へ押し入ってゆく。
「あぁあぁ、あふっ、しゅご、んぉおっ、ずぶ、ずぶ、埋まって、あ、あ、はあぁ、おまんこ、満たしてくりゅ」

デモンコア
人類の脅威となる悪しき存在
大人気母娘フタナリ変身ヒロインが颯爽登場!!
だが
!?
その野望を打ち砕く者がいた
それが天煌聖姫ヴァーミリオンと
セルシアンである!!
天煌聖姫
ヴァーミリオン
悪魔の研究所
漫画 COMIC 火愚夜
原作 ORIGINAL 有機企画

デモンコア秘密基地
あ♡あ♡
あ♡あ♡
あ♡ぃッ
ガクガクガク

エ…エリスッ

ヴァーミリオンを解放しなさいっ

はいはい負けちゃったオバサンヒロインは黙っててねー

あ♡あ♡

あ♡あ♡

じゅぐぐ

それにおとなしくしてればもう少しで――

終わるわよ♥

ビチッ

COMPLETE

おほォッ♥

ヴァーミリオン!!

ガクンッ

…？ヴァーミリオン…

ズリ

ズズ…

誰かしらそれ…？

私はエリス様に作っていただいたデモンコア
デモンヴァーミリオンよ

アハハハ♥
エリス様ぁ
この身体最高です

力があふれてぇ…

ぴっ

あぁ♥

ぴっ

ぴっ

ぴっ

ぴっ

ぴゅっ

ぴゅっ

ぴゅ

私はヴァー…いえ
デモンヴァーミリオン様の
フタナリメスブタ奴隷
セルシアンですぅ…っ
この身体でご奉仕しますので
そのたくましいチンポで
いっぱいドピュドピュ
してくださいね…♥
へえー 私専用の
メスブタかあ
それはなかなか
面白そうね♥
……ッ

え…？
元に戻せる？

ええ
そうよ

おねえちゃんの
チンポから10リットル
精液を搾り取れたら
元に戻せるように
しといたの

ただし…
今日中に…ネ♥

急がないと
一生デモンコア
だよー

くっ…

は…早く
チンポお恵みください
デモンヴァーミリオン様…

このメ…メスブタ
ガマンできません

ジコ
ジコ
ジコ
しちゃ
しちゃっ

へえ…そんなに
チンポ欲しいのね
このメスブタは

それじゃ…

ドクン
!?
淫乱なセリフを言うその口で
ギュッ
ギュッ
ふっ…太ぉぉぉッ
いっぱいご奉仕させてあげる♥

あれー？
なに苦しがって
いるのかな

あんたは
私のメスブタ
なんでしょ～？

だったら
豚のように鳴いて
悦びなさいよッ

すっすみませ
…いえ

ブッ…ブヒィ
ブヒイイン

ほらっもっと必死に
しゃぶりなさい

ああ…
娘のチンポ…

ブヒイッ

ほらほら
うれしさも
表現して

ブッ…

ブヒイイン♥

苦くて
臭くて…

そしてたっぷり味わいなさいっ

熱っつぅい♥

カチッ

00.5

射精量カウントが…

どうやらそこはちゃんと量ってくれるみたい…

ずぞぞ

だったら――

も…もっとお…

もっとください♥
デモンヴァーミリオン様ぁ

はー

このメスブタの
おマンコもケツアナも
…全部あふれるくらい

はー

ザーメンいっぱい
くださいませ
ブヒィ♥

ふふ…
もちろん

ここから本番よ

私の
メスブタちゃん♥

ビキ

ビキ

魔法少女
フェアリーハート
Fairy Heart
雑魚戦闘員との交尾事情
歪な願いに穢される高潔な魔法少女
それでも彼女は光を見失わなかった――
小説／NOVEL き一子
挿絵／ILLUSTRATION ZOLA

白昼の交差点に落ちた雷が一台の車両を直撃した。爆音が轟き、後続車両がそれに巻き込まれたことで一帯はたちまち炎の海と化す。

連鎖する車両の衝突音。パニックに陥った人々の悲鳴と叫び声。

爆心地の黒煙が徐々に晴れると、その向こうには一人の男がいた。

「聞け、脆弱（ぜいじゃく）な旧人類ども‼　この一帯は我々ダーク・オブリビヨンが制圧した‼」

男の身長は２５０センチ近かった。黒の全身スーツに死神を模したようなドクロのマスク、額には稲妻の模様という異様な装いの怪人。

「出た、出やがった‼」

「逃げろ！　ダーク・オブリビヨンだ‼」

ダーク・オブリビヨン。それは人類を超えた力を持つ超越者『怪人』を擁し、旧人類の征服を目的とする謎の集団。

男は『怪人』であった。周囲には模様無しの黒い全身スーツを着た男たちが付き従っている。ダーク・オブリビヨンの下級戦闘員だ。

「くくっ、逃げろ、逃げるがいい！　我らが実験の糧として、貴様ら旧人類ども

はダーク・オブリビヨン発展の礎となるのだ‼」
怪人が迫りくると群衆は混乱の極みに達した。誰もがこの場から逃げ出そうとする中、人混みに呑まれかけている少女が一人、怪人へと近付いていく。
「君、早く逃げなさい！　そっちは奴らが来るぞ！」
人混みの中の誰かの声。しかし少女は頭を振る。
「――――私が、行かなきゃ」
少女は手を掲げた。その中指にはめられた指環が薄桃色の光を放ち、光の繭となって少女を包み込んでいく。
変身は一瞬だった。繭が光の帯となってほどけていくと、解き放たれた少女は光の環に包まれながら空を駆け、地上に振りまかれた桃色の光が路面に燃え広がった炎の勢いをたちまち鎮めていく。
「来たか……‼」
怪人が呻く。少女がすぅっと地に降り立つ。人々はしんと静まり返り、少女に無数の視線を浴びせた。
可憐で、華奢ですらある少女だった。

丈の短い薄桃色のワンピース・スカートにすらりとした四肢を覆う指貫の長グローブとロングブーツ状の脚甲（きゃっこう）。身の丈は１６０センチにも満たないが、伸びやかな手脚と均整の取れた身体付きが少女を大人びて見せている。花弁めいたフリルや透き通った羽のような装飾はまさに妖精のよう。愛らしい顔立ちはいまだ初々しくも凛々しく、凛とした明るい紫色の瞳がそれらを引き立たせていた。プラチナ・ブロンドの長くたなびく髪は左右でツーサイドアップに束ねられ、風に吹かれてゆっくりとそよぐ。

「……魔法少女だ」

人々はその少女を知っていた。

「フェアリーハートが来てくれたぞ！」

人々は少女をそう呼んでいた。

魔法少女。それは無辜（むこ）の人々の恐怖を払う希望。恐怖と絶望を振りまくダーク・オブリビヨンの象徴的存在『怪人』の対となるもの。

「私が来たからには、もう好き勝手させないんだから。――観念しなさい、ダーク・オブリビヨン！」

「抜かせ‼　戦闘員どもよ、奴を足止めしろ‼」
怪人の命令に、下級戦闘員たちが魔法少女へと飛びかかる。
「邪魔しないでっ！」
「ギイーッ⁉」
フェアリーハートはそれを文字通り一蹴した。薄桃の光をまとった掌打、肘打ち、膝蹴りと流れるような打撃で戦闘員たちを地に転がしていく。
しかし一人の戦闘員が少女に組み付くと、怪人は不敵な笑い声を上げた。
「隙ありだフェアリーハート‼　エル・バニッシュ‼」
怪人の掌が青白い雷撃を発し、魔法少女目掛けて放たれる。
その攻撃は、少女に組み付いた戦闘員をも貫く軌道で放たれていた。
「くっ……危ないっ‼」
フェアリーハートは咄嗟（とっさ）に戦闘員を投げ飛ばし、両掌をかざして稲妻を相殺する。そしてほっと一息吐くと、怪人を鋭く睨みつけた。
「……あなたの部下でしょう？　どういうつもり……」
「雑魚でも役立てるなら本望だろう。それより貴様こそ、敵を助けて何がした

い？」

「好き勝手させない、って言ったでしょっ!!」

下級戦闘員はダーク・オブリビヨンの捨て駒だ。無辜の市民ですらない彼らは誰からも顧みられることはない。

フェアリーハートにとっての敵である彼らは、しかしダーク・オブリビヨンの犠牲者でもあった。彼らの中には強制的に従わせられている者もいるというのだから。

「下らぬ感傷だな！　エル・フォール!!」

怪人が拳を打ち合わせると、にわかに雷鳴が轟いた。青い光の柱が空から連続して降りそそぎ、超高熱の槍のように地表を貫く。

「くっ……また巻き込むような……っ！」

「知ったことか！　全ての弱者が我々の礎となるのだ!!」

雷の矛先は少女に向いていたが、その狙いは大雑把だ。長引けば周囲にも被害が及ぶかもしれない。

「……そういうつもりなら……速攻で、決めさせてもらうからっ」

「馬鹿め、この距離で何ができる!!」
魔法少女の頭上から雷の槍が降りそそぐ。
瞬間、フェアリーハートの双肩を起点に烈火のごとき翼がほとばしった。
陽炎のように揺らぐ実体のない光の翼は魔法少女の肢体をグンと推進し、雷の槍を掻い潜りながら怪人との距離を零にする。
「なっ……!?　ま、待てッ」
「必殺――――フェアリーハート・スマッシュッ!!」
――――ズドンッ!!
光の推進力と捻りを加えて放たれた拳が怪人の左胸を打つ。
大気を嘶かせるほどの衝撃を撃ち込まれ、錐揉み回転しながら地に叩きつけられた怪人は勢い良く宙に跳ね返った。
「グッ……ガッ!!　ギャアアアアアアアアッ!!」
怪人の胸の奥から光の線が溢れ出す。やがて巨体が一回りも膨れ上がると、怪人は内側から爆ぜるように光の粒子と化して消滅した。
「……や、やったのか……?」

声援とともに戦いを見守っていた人々のざわめき。
「助かったんだ……！」
「勝った！　フェアリーハートが勝ったんだ‼」
ざわめきがやがて歓声に変わる。これで安心だ、助かったという安堵の声。
「……ひとまずは、かな……」
怪人は戦闘不能に陥ると未知の手段でどこかに転移してしまうが、しばらくは活動を停止するのが通例だ。周囲を見渡すと機動隊が到着し始めており、事態は徐々に収拾されるだろう。戦闘員もすでに大半が逃げ出した後のようだ。
「こ、こころちゃん――」
だがその時、逃げ遅れたらしい一人の戦闘員がよろよろと立ち上がってフェアリーハートに呼びかけた。
「……もう、悪いことはしないで。傷つくのはあなたもなんだから」
フェアリーハートは彼の言葉に応えず、捕らえもせず、ただそう告げた。
戦闘員の男は一瞬立ちすくむと、すぐに背を向けて去っていった。
人々はフェアリーハートの選択を非難しない。それどころか、魔法少女の言葉

によって彼が改心することを期待さえしていた。
「……どうして……」
だからその場で浮かない顔なのは、魔法少女フェアリーハートただ一人であった。

◆

――どうして私の名前を知ってたんだろう。
人見（ひとみ）こころはまだあどけない感じの、ジャンパースカート制服を着た女子学生だ。彼女は一日の授業を終え、昼下がりの通学路を歩いていた。
こころはスカートのポケットから小さな紅い宝石の指環を取り出す。彼女がいつも身に着けているその指環は、魔法少女フェアリーハートのそれと同じものだ。
人見こころは魔法少女だった。
こころは指環をポケットに戻し、ツーサイドアップの黒髪をいじりだす。その髪型は少女をますます初々しく、子どもっぽくも見せている。

キキィィ――――

そんな少女のすぐ横に、一台のワンボックスカーが滑り込むように停車した。

「やあ、フェアリーハート。また会ったね」

「……えっ」

運転席の男に突然呼びかけられ、こころは驚きに目を丸くする。

第一の理由に、運転席の男の顔にはまるで見覚えがなかったから。そして第二に、その名前で呼ばれるとは思いもしていなかったからである。

「とぼけても無駄だよ。いや、今はこころちゃんって呼んだ方がいいのかな？僕はどちらでも構わないけどね」

男は三十代前後に見えた。身長は高く、シャツ越しのお腹が大きく出っ張っている。こころを見つめる細い目付きは、どこか蛇のような執念深さを感じさせる。

「……な、なんのことです」

「そう言うならそれでいいんだよ。僕は君のことを組織に報告するだけだ。ダーク・オブリビヨンが直接調査すれば事実はすぐ明らかになるだろうね」

どくんっ、と胸の鼓動が激しくなる。ダーク・オブリビヨンの関係者。

これは、明らかな脅迫だった。
「力尽くで黙らせようなんてことは考えない方がいいよ。僕が無事に帰らなかった時は、自動的に組織に連絡が行くようになってるんだ」
「……そんなこと、しないです」
「へえ。それじゃあ、大人しく僕の言うことを聞いてくれるのかい？」
「取りあえず、お話だけで、良ければ……」
組織に報告してないのが事実なら、まだ思い留まってもらえるかも。そんな淡い希望を胸に秘めて応じると、男は少し鼻白んで助手席に乗るよう言った。
やがて少女を乗せた車が走りだすと、こころは男をじっと見つめる。
「……あなたは、誰？」
「わからないかい？」
男の声のトーンが落ちる。自分より遥かに年上の男に威圧され、いつもなら萎縮してしまうところだが少女はあくまで毅然と頷く。
「……わからないか、そりゃわからないだろうな。僕は何者でもないからな。君に比べたらなんの価値もない……有象無象の一人でしかないだろうよ」

「会ったことが、あるんですね」
「……もう何度もね。ダーク・オブリビヨンの戦闘員、と言えばわかるかい」
あっ――と声を上げてしまう。全身スーツの戦闘員ならば気が付かなくても無理はない。そして、相手がこちらを見知っていることも。
「……待って、じゃあ、こんなこと……誰かに、させられてるの？」
「馬鹿だなぁこころちゃんは。命令でこんなことやってるとしたら、君の情報はとっくに組織に筒抜けってことじゃないか」
「……組織としてやってるわけじゃないのかも、って考えただけ」
小馬鹿にしたような男の物言いに、こころは負けじと言い返す。
「まぁ、当たらずとも遠からずだよ。僕は個人的に君を脅迫してるんだ。誰かに命令されてやってるわけじゃなくてね」
「……どうして？」
少女の明るい紫色の瞳は男をじっと見つめていて、車が徐々に人気の少ない郊外へ向かっていることには気付きもしない。
「こころちゃんがフェアリーハートだって知っているのは僕だけだからさ。きっ

かけはただの偶然みたいなものだけどね……この情報をタダでやるのは癪だったんだよ。今は僕が……僕だけが、君の生殺与奪の権を握ってるわけだ」
執着、あるいは独占欲に満ちた男の目が少女を見つめ返す。
こころはぶるるっと身震いした。彼の言葉は今一つピンと来なかったが、その眼差しは何よりも雄弁に男の動機を物語っているような気がしたのだ。
「私を……殺すの？」
「ははっ、まさかそんなことしないよ。いざとなれば君も抵抗するだろうからね、そんな大それたことできやしない……こころちゃんにはね、僕の性奴隷になってほしいんだ」
人気のない路肩に車を停めて男が宣言する。
こころはきょとん、とした表情で目を丸くした。
「……せい、ど……？」
「こころちゃんにはまだわかりにくかったかな？　性奴隷、メス犬、セフレ……まぁ言い方はなんでもいいか。僕にその身体を捧げろってことだよ」
男の言葉を呑み込むにつれ、きょとんとしていたこころの顔色は赤くなったり

青くなったりと忙しなく表情を変える。
想像だにしなかった。遥か年上の男に性的な関係を求められるなんて。
「うぶだねぇ、こころちゃんは。そのためにこんな場所まで連れてきたってのに、今まで気付かなかったのかい？」
男はあざ笑いながら少女の腕を強引に引く。後部座席のシートは背を倒すとベッドのようで、こころがもう少し色事に聡ければ男の目的も察せられただろう。
「っ――ま、待ってッ」
「往生際が悪いな。ここまで来たら他に選択肢はないってわかるだろう？」
「そんなこと、ないっ……あなたは、まだ選べる、のにっ……！」
「……何？」
放り投げられるように押し倒され、それでもまだこころの表情に怯えはなかった。男は怪訝そうに少女を見下ろす。
「生かすも殺すもあなた次第……なら、私を助けることだってできる……でしょ？」
「ずいぶんお花畑な考えだね。僕がそんなことして何になる？　こころちゃんが

助かりたいだけなんだろ？」
「善いことができる。善い人になれる」
こころは男をまっすぐに見つめる。彼は一片の曇りもない瞳に射すくめられたように唖然として言葉を失う。
「取り返しの付かないことなんて何もないもの。今だってもっと乱暴でもいいはずなのに、人目に付かないところに隠れてこそこそしてる。ほんとは後ろめたいんでしょう？　ほんとは悪い人じゃないんでしょう？　悪いことなんかするより、本当ならもっと――」
「黙れッ‼」
男が声を荒らげる。こころは肩をびくっと跳ねさせるが、明るい紫色の瞳はなおも気丈に男を見つめている。
「おまえに何がわかる‼　戦闘員は悪人ばかりじゃない、なんて戯れ言でも真に受けるか⁉　違うね、戦闘員なんざになるのは大抵が他に行き場のないクズばかりだ！　なのにフェアリーハートッ、おまえは……！」
「うっ……ぁ、やっ……！」

男はこころの両脚を大股に開かせた。白くしなやかな太ももと薄桃色のかわいらしいショーツが丸見えになり、こころはかぁっと赤面してしまう。

「今はなんの力もねぇメスガキのくせによぉ、なんでそんな口が利けるんだよ……！　この期に及んで良い子ぶりやがってッ……！」

「そんなつもりじゃっ……や、あっ、だめっ……！」

男の手が強引にショーツを剥ぎ取ると、一本筋のようなおまんこがあらわになった。こころは下半身だけでじたばたと足掻くが、恰幅の良い男の力にはまるで敵わない。

男は全身でのしかかり、こころの華奢な肢体を押さえつける。ズボンを下着ごと脱ぎ捨てると、勃起しきった怒張がこころの未成熟なマン筋に密着して猛るような熱と硬さを伝えた。

「やっ……！　何、これっ……」

「悪い人じゃない、なんてもう二度と言わせないからなッ……こころちゃんの処女ぶち破ってやるッ……！」

「しょじょ、って――え、あ、やっ……！」

おぼろげながらに理解する。今お腹に押し付けられているモノが何なのか。
処女喪失。初めての性行為の証。本来祝福するべき初体験が、名前も知らない男による陵辱の記憶に塗り潰されようとしている――
その瞬間、こころの表情が初めて怯えと悲しみに染まった。
グン、と血が流れ込んでいきり立つ男の肉竿。亀頭が肉の畝(うね)をぐちゅりと抉(えぐ)り、膣穴に狙いを定める。
「そうだ、その顔だ……！　挿(い)れるぞ、挿れるからなッ、フェアリーハートッ……！」
「ぁッ……や、痛ッ……ううぅッ……！」
前戯無しからの強引な挿入。こころは下半身の圧迫感に身悶えするが、痛みを和らげようと分泌された愛汁はあえなく陵辱者の挿入を助けていた。
先走りと愛汁を絡み合わせても幼膣への挿入は易々(やすやす)とはいかなかったが、しかし、ぷっくりとしたマン肉を嬲(なぶ)るような亀頭摩擦で膣粘膜が徐々にほぐれていくと、先端だけでも窮屈な膣穴への侵入を許してしまう。
「おぉぉ……ッ！　この入り口の引っかかる感覚……！　このまま一気にッ……

……！」

「やっ……だッ、やッ……いだッ……あぁぁぁぁっ……！」

「おっ……おおおぉぉッ……!!」

――ずぷんッ!!

と、薄膜を突き破りでっぷりとした肉棒が幼膣に埋められた。

悲痛な泣き声を漏らすこころに対し、男は歓喜に堪えない声を上げた。処女穴のキツすぎる締め付けに迎えられ、愛汁と破瓜（はか）の血に晒された怒張がビクビクと脈打つように震える。

「ははっ……！　やった、やってやったぞ……！　僕が、フェアリーハートの処女を……！　僕が初めての男だって事実は、もう何があっても一生変えられないんだッ……!!」

「っ……!!　ぅ、くっ……」

男は魔法少女の処女膜を貫いた感動と愉悦に、そしてこころは初体験の衝撃と激痛のために身じろぎもしなかった。まだ浅い膣の最深部と亀頭で密着して繋がると、二人はしばらく声も発せず小刻みに呼吸を繰り返す。

破瓜の痛みが少し治まると、こころは不意に喪失感を覚えた。当たり前の恋愛を経て愛し合う男女で結ばれる、そんなありふれた未来はもはや失われたのだと。

「くくっ、今さら泣いてるのかい？　最初からしおらしくしてたらちょっとは優しくしてあげたってのにさぁ」

「……泣いて、なんかっ……！」

強がりなことがバレバレの涙目と涙声。こころがキッと睨みつけると、男はますます膣内の肉棒を逞しくする。

「僕を侮るからこんな目に遭うんだ……改心なんてあり得ないんだよ」

「……そんなこと、ないっ……！」

「すぐそんな口も叩けなくなるさ、こっからが本番なんだから……ねッ!!」

「うぁっ……！　あ、ぐっ、うぅっ……！」

――パンッ、パンッ、パンッ、パンッ！

強引なピストン運動が始まった。男は少女の身体のことなど気にもかけず、自らの快楽だけを追求する身勝手な腰振りを続ける。

「ふぅっ、こころちゃんの処女マンコの締まり最高だよッ……ナカもちょっとず

つ濡れてきてるし、性奴隷の素質十分だねぇッ！」
「んくぅっ……おね、がい……やめて、こんなことっ……はぁっ、はっ……！」
「お願いなんてされてもね、土下座して許しを乞うなら考えてあげようかなッ！」
こころは処女膣を抉られる痛みを耐えるのに精一杯でろくに抵抗もできない。剛直を抜き差しされるたびに中からはとろりとした愛液が溢れ、男の竿にまとわりついてピストンの滑りを良くしていく。
ちゅぷんっ、じゅぷっ、ぬちゅっ、ぬぢゅっ――
「……ほんとは、怖いんでしょっ……」
「……何がだ？　怖がるのはこころちゃんの方――」
「変わるのが、怖いんでしょ……こんなこと、なんにもならないってわかってて
っ……ぅ、くっ……！　人を傷つけて、自分も傷つけてるだけっ……」
「このッ……!!」
小さな身体を組み敷かれても、処女を奪われてもなおこころは折れなかった。
男が激昂するとともに、膣内の亀頭が一回り以上も膨れ上がる。亀頭の先端が少女の子宮口にキスすると、小振りなおまんこは一際強くチンポを締め付けた。

「……妊娠したら面倒だからね、中は勘弁してあげようかと思ったけど……レイプされて孕(はら)んでみるかい」
「っ……やっ……!!」
こころの背筋がぞくぞくと震える。薄々覚悟はしていても受け入れられるはずのない終着点。男の亀頭は子宮口をしつこく叩いてきて、否が応でも最奥(さいおう)に精子を注ぎ込まれる膣内射精――妊娠を意識してしまう。
こころが口を開きかけると、男は先んじて少女の唇を強引に奪った。
「んむっ……!?　ん、ふっ……ん、ちゅっ……んうぅぅっ……！」
唇をぴったり塞ぎ、舌まで搦め捕られる濃厚な口付け。こころは物も言えず舌を絡められる不快感に耐え、無理やり流し込まれた唾液を嚥下(えんげ)する他はない。
初めての性交だけでなく、初めてのキスまで。唇をようやく離された時、こころは息も絶え絶えに呼吸を繰り返すばかり。
「ははっ、こころちゃんは静かにしてた方がかわいいねぇ……！　おかげで精子込み上げてきたよっ……出すぞっ、中に出すぞっ!!」
「はぁっ、はぁっ、はっ……！　やっ……だ、やあぁぁぁッ!!」

巫女学園の乙女たちは、
悪魔的な快楽に溺れてゆく——
退魔風紀委員会
巫女学園
ふたなり姦落
小説 NOVEL／あらおし悠
挿絵 ILLUSTRATION／築

満月が天頂に輝く夜。学園近くの深い森に、鋭い咆哮が轟いた。
「小賢しい小娘ども！」
二メートル近い長身の女性が、怒りに顔を歪ませる。
羊のように巻いた角。背中にはコウモリの羽。長く鋭い爪と、先端が矢尻型に尖った黒い尻尾。そして白い肌に巻きつくのは、ボロ布のような黒ビキニ。
艶めかしいプロポーションの、肌も露わな魔界の使徒。彼女が叫び、身を震わせるたび、禍々しい波動を周囲に撒き散らす。並の人間が浴びれば、まず正気を保っていられない。まともな思考は破壊され、奇行か淫欲に走るか。
しかし、対峙する十名の少女たちは、少しも表情を崩さなかった。白と朱の、巫女装束を思わせる制服を身に纏い、日本刀や鉄扇など、おのおの得意な武器で暗黒波動を切り裂いていく。悪魔はそれを避けられず、防戦一方。足元を大量の呪符に固められ、まるで地面に糊づけされたように一歩も動けないからだ。
「ぐあぁぁっ！」
絶え間なく繰り返された少女たちの斬撃が、ついに左の羽を斬り落とした。魔界の使徒が肩を押さえて膝を突く。

「おのれ……人間ごときがぁぁあ！」

怒りと苦痛が、彼女のタガを完全に外してしまった。咆哮とともに、今までとは比べ物にならない邪悪波動が放たれた。周囲の木々が立ち枯れる威力に危機を覚えた少女たちは、呪符使いが作った護符防壁の後ろに緊急退避する。

「隠れても無駄よっ」

女悪魔が細い腰を捻った。黒い尻尾が鞭のようにしなる。鋭い先端が障壁を突き破ると、呪符使いを巻き取った。空中に高々と持ち上げられた少女が、肋骨あたりをギリギリと締めつけられて、濁った呻きを上げる。

「ん、ぐ……ぐあっ……！」

「私を愚弄した罪を命で贖え！」

尻尾が呪符使いを引き寄せる。長く伸びた悪魔の爪が、少女の細い身体を貫こうと突き出される。その寸前、刃の一閃が、黒光りする尻尾を両断した。空中に放り出された呪符使いを、飛び上がった白い影が颯爽と受け止める。

「紫苑さま！」

「油断大敵よ、朱香」

紫苑と呼ばれた少女は、呪符使いの朱香を地面に下ろした。そして、右手に持つ両刃の細身剣を、まるで傘でも扱うような気軽さで振り回しながら、痛みに悶絶する女悪魔へと向き直る。

白いリボンと、ポニーテールにまとめられた長い黒髪が風にたなびく。巫女が儀式で羽織る千早（ちはや）のような薄手のコートを纏い、朱色のプリーツスカートから、黒いオーバーニーソックスに包まれた長い脚がすらりと伸びる。水干（すいかん）のような白い服を突き上げる豊かな胸もさる事ながら、切れ長でいて涼やかな眼は、殺気漂う場にいるとは思えない。

悪魔の方が警戒心に顔を強張らせた。即死もありうる邪悪波動を受けて飄々としていられる少女が信じられない様子。紫苑は、その疑問に答えるように瞳を凛と輝かせ、切っ先を悪魔に突きつけながら名乗りを上げた。

「土門（どもん）女子学園、風紀委員長、一条（いちじょう）紫苑。悪鬼を滅します！」

「小娘が――！」

怒りに我を忘れた悪魔は、足元を固めた呪符の束を強引に引きちぎった。片羽とは思えないほど空中高く舞い上がり、一直線に急降下。ポニーテール少女を引

き裂こうと爪を伸ばす。
迫る悪魔に、細身剣が振り下ろされた。縦に両断された悪魔は、少女の左右を通り過ぎ、地面に落下する前に塵となって霧散した。

私立土門女子学園は、地方都市の深い森の中にある。
朝の木漏れ日の中、巫女装束に似た白と朱の制服に身を包んだ少女たちが、小鳥のさえずりのようなお喋りとともに登校してくるのが、日常の風景。
全校生徒は百数十人。制服が変わっている他は普通の全寮制女子校にしか見えないが、それは表向き。この学園は、日本を呪術的に守る五芒結界の一角。要石としての役割を担っていた。
それ故に、生徒も普通の少女ではない。全員が、高い霊力を持つ巫女。神職や高僧、退魔師や祈祷師など、その道の名家名門の娘ばかり。普通の授業も受けつつ、日々、様々な祈祷と儀式をこなす。類まれなる力を結界に注ぎ、国家の平和と安寧を維持する事が、彼女たちの生まれ持ってのお役目だった。
とはいえ、年頃の女の子集団。口にするのは祝詞ばかりとはいかない。

木々の道が開けた先に、校門が現れる。そこに立つ数人の人影を見た生徒たちは、澄まし顔を忘れ、急にソワソワし始めた。

「忘れてた。今日って、風紀委員の服装検査の日だったのね」

慌てて互いの制服をチェックする。もちろん、気高き女生徒に抜かりがあるはずもないが、髪の毛一本の乱れも風紀委員には見られたくない。

怖れているからではなく、その逆。一般生徒にとって、彼女たちは憧れ以上の存在だからだ。霊能者の中から、さらに飛び抜けた力を持つ者だけを選んで構成された、超エリート集団。実際に魔性と戦う実動部隊。学園内にとどまらず、人の世の秩序を守護する女神たち。故に、風紀委員と呼ばれていた。

もちろん生徒会も存在するが、そちらは学園内の諸事雑務が担当で、要するに机仕事。風紀委員に与えられた権限は、教師よりも遥かに大きい。

「風紀のみなさん、昨夜も邪悪な悪魔を退(しりぞ)けたそうよ」

「はぁ……さすがよねぇ。わたしには、とても真似できないわ」

いくら高レベルの霊能巫女でも、魔族との戦闘となれば話は別だ。身体能力に呪具を扱う技術、加えて、どんな危険な相手にも怯(ひる)まない胆力。風紀委員の腰に

巻かれた武器携行用ベルトは、それらを備えていると認められた証なのだ。
「そこの無駄話で立ち止まっている生徒！　遅刻するつもりですか⁉」
校門を前にして井戸端会議のようにお喋りに興じる女生徒たちを、鋭い声が一喝した。腰には呪符の束を収めた、縦長の革製の箱。風紀委員の中でも特に厳しい、鬼副長と呼ばれる角守（かどもり）朱香だ。
「あっ、副委員長！　お……おはようございます！」
女生徒たちは、早歩きで校舎へと向かった。慌ててバタバタ走ろうものなら、清廉な巫女にあるまじき行為として、お仕置き部屋に連行されてしまう。
「でも、紫苑さまのお仕置きなら受けたいかも……」
「ンもう。はしたないわよ……きゃんっ！」
取り締まりから逃れて油断した女生徒たちは、昇降口の手前で、長身の少女の胸に突っ込んでしまった。
「あら、ごめんなさい」
衝突された方が先に謝る。その声の主に、女生徒たちは卒倒しそうになった。
「し……紫苑さま⁉」

女生徒たちは竦(すく)み上がった。腰に下げた細身剣。纏う千早コートは、選ばれし風紀委員長の証。一条紫苑に無礼を働いたなんて知れ渡ったら、他の生徒に殺されかねない。

「ももも、申し訳ありません！　お許しください!!」

深々と頭を下げて平謝りする女生徒たちに、紫苑は優しく微笑みかけた。

「平気よ。あなたたちこそ、ケガはない？」

「そんな、紫苑さまにお気遣いいただくなんて、罰が当たりますっ」

女生徒たちは何度も謝罪し、慎みも忘れて校舎に駆け込んだ。けれど姿が見えなくなった途端に「紫苑さまに触っちゃたー！」と歓喜する声が聞こえて、紫苑は思わず苦笑いした。

「あの娘たち、私をなんだと思っているのかしら」

「それはこちらのセリフです、紫苑さま！」

振り返ると、怒り顔の朱香が、腰に手を当て仁王立ちしていた。

「風紀委員長としての自覚をお持ちください！　あなたが甘い顔をすると生徒たちの規律が乱れます！」

「朱香こそ、そんなに恐い顔をしていたら、みんなが萎縮してしまうわ。風紀委員は厳しければいいというものではないの。余計な緊張をほぐし、呪力を最大限に発揮させてあげるのも、大切なお仕事よ」

「そ、それはそうかもしれませんが……！」

まだ何か言いたそうな朱香の髪に、紫苑は手を伸ばした。軽く撫でると、肩より長い栗色が、繊細そうに小さく揺れる。

「それより、あなたの方が心配だわ。今日は休んでもよかったのに」

髪を撫でていた手を、朱香の脇腹に添える。昨夜、悪魔の尻尾に締めつけられて相当に痛めたはず。しかし彼女は、真っ赤な顔で飛びのいた。

「だ、大丈夫です！　薬師に治療してもらいましたし……」

本当だろうかと思ったけれど、今の動きを見る限り異常はなさそうだ。

「そんな事より、わたくしは術を破られた方が悔しいです」

朱香は、下唇を噛み締め、腰の呪符箱をぐっと掴(つか)んだ。彼女が風紀委員に入った頃は無敵を誇り、仲間の窮地を何度も救った鉄壁の呪符障壁。それが、最近は魔物に通用しない事も多い。

「気にする必要はないわ。朱香の呪力が落ちているわけではないから」
「で、でも……それならどうして！」
食ってかかる副委員長を、紫苑はやんわりと手で制する。
「あなたも気づいてはいるのでしょう？　私たちの技や武器は、日本古来の鬼や悪霊に対応したもの。西洋悪魔には相性が悪いのよ」
「でも、奴らの出現なんて、今に始まった話ではないのに……」
「なんとか撃退できているのが、逆に対処を遅らせているのかもしれないわ。いい加減、本腰を入れて対応策を考えなければいけないはずなのにね」
長老連中は保守的すぎて、新しい術や武器の開発に消極的。現場が苦労している事に気づいていない。けれど、学生の発言力なんて高が知れている。そう紫苑が首を振ると、まるで激怒するかのように、朱香が眉を吊り上げた。
「最前線に立つ風紀委員の意見こそ重視されるべきなのに！　紫苑さまのお言葉なら、長老たちもお聞き届けくださるはずです！」
真剣に見詰める朱香の目には、紫苑に対する絶対の信頼がある。彼女だけではない。間近で聞いていた他の風紀委員たちも、同じ瞳の色をしていた。

「どの道、術の開発は一朝一夕にできるものではないわ。私たちは、今の戦力で最善を尽くしましょう。守護者の敗北は、即ち、人類の敗北になるのだから」

「はいっ！」

朱香以下、風紀委員たちが声を揃える。彼女たちは、紫苑が命じれば、どんな危険な任務にも赴くだろう。それを可能にするだけの能力を持った精鋭なのだから。しかし同時に、数少ない貴重な戦力でもある。無駄に消耗させるわけにはいかない。運用を任されている風紀委員長の責任は、極めて大きい。

だからこそ、リーダーは弱気を顔に出すわけにはいかなかった。

「そういえば……」

校門での服装検査を終え、靴を上履きに履き替えていると、朱香が思い出したように首を傾げた。

「紫苑さまは、西洋悪魔を一刀のもとに斬り捨てましたよね。他の子は、何度も何度も斬りつけて、片羽を落とすのがやっとだったのに」

「もっと早くやっつけろって言いたいの？　昨夜は朱香たちが任せろって言った

から、私は後ろで見ていたのよ？」
「いえ、そうではなく。どうして紫苑さまの剣だけが通用したのかと……」
朱香が慌てて首を振る。昨夜の苦戦を相当気にしているようだ。
「んー。それはやっぱり、呪力の差じゃないかしら。だってほら。私って、学園史上、最も優秀な退魔巫女なんでしょ？」
「それ自分で言います？　まあ、確かに事実ですけど……」
あっけらかんと言い放つと、朱香は呆れたように溜息を吐いた。
「剣術と呪術を極めた稀代の天才。それが大袈裟でも誇張でもないのは、近くで見ているわたくしたちが一番よく分かっています」
朱香の口調が重くなる。紫苑のパートナーとして、プレッシャーを感じているのだ。他人に厳しい彼女だけど、自分に対してはもっと厳しい。だから昨夜のような敵に捕まる「失態」など、他者が許しても彼女自身が許さない。
「持って生まれた才能に、凡人の努力が及ぶ事などないのでしょうね」
ついには拗ねて自虐し始めた。本当に冗談が通じない娘だなと苦笑して、紫苑は、腰の剣に手を添えた。

「私が戦えるのは、先祖から受け継いだ歴戦の剣のおかげ。戦いの記憶と呪力が蓄積されて、力を貸してくれているの。自分で作ったお札で戦っている朱香の方が、何倍も優れていると思うわ」

「そんな事……。紫苑さまが特別なんです……」

嬉しさ半分、戸惑い半分の複雑な表情で、朱香が視線を逸らす。才能を評価された事より、紫苑より優れているという言葉が受け入れられないようだ。信頼も信仰になると始末が悪い。もう少し柔軟になれればいいのにと心配になる。

柔軟に――とは言っても、巫女には譲れない一線がある。

それは、処女性。強い霊力を保つには、純潔が必要なのだ。学園が深い森に囲まれているのも、外部との無用な接触を避けるため。実際、現役を退いて子を成した元巫女たちは、例外なく著しく霊力を失っている。逆に、力を失ったために淫行が発覚し、学園を追放になった少女もいるという。

故に、不純異性交遊は最大の禁忌（きんき）。身体の変化が呪力に与える影響は現状では不明。だが事実を曲げられない以上、それを取り締まるのも風紀委員の仕事。

しかし俗世から隔絶された学園では、少し性格の異なる違反が横行していた。
「あ、あ……」
「んふ、可愛い。もっと、いい声を聞かせて……」
夕闇迫る時刻、風に揺れる葉の音に紛れ、少女たちの喘ぎがそよぐ。
学園の森に、身を隠す場所は無数にある。人目につかない大木の陰で、二年生と一年生の女子が抱き合っていた。大木に寄りかかった後輩の脚に先輩の太腿が割り込み、下着越しに秘部を刺激する。
「あ、先輩……せんぱ……んむっ」
不純異性交遊ならぬ、同性交遊。徐々に音量が増す後輩の喘ぎを、先輩の唇が遮る。二人の唇から覗く二枚の舌が、踊るように激しく絡み合う。
「ダメじゃない。大きな声を出しちゃ……」
「ごめんなさい……。でも、先輩のが気持ちよくて……」
後輩は恥ずかしさに顔を染め、しかし快感には抗えず、唇に残った唾液を舐め取る。先輩はそんな淫らな恋人を抱き寄せて、からかうように囁いた。
「風紀委員に見つかっても知らないわよ。特に副委員長の朱香には要注意。あの

子、すっごい地獄耳なんだから」

鬼の副委員長の名前を出されて、後輩は恐怖で肩を竦めた。慌てて首を巡らすけれど、先輩はその顔を両手で強引に戻して口づけた。

「大丈夫……んっ。ここは、わたしが見つけた……ちゅ。絶対に安全な場所、なんだから……ちゅ、ちゅる、じゅぱちゅぱ、ちゅるんっ」

「ふぁ！　先輩……ん、あ、あ……あふぁ！」

舌と唾液を搦め捕られ、後輩の警戒心は快感の渦に飲み込まれた。先輩の指が下着の内側へと侵攻する。おずおずと開かれる太腿が、その侵略者を歓迎する。後輩の指も先輩の秘部に伸びて、二人は、森に嬌声（きょうせい）を響かせた。

☆

抜けるような晴天に、少女たちの鋭い気合が響く。

土門女子学園恒例、武術大会。年に二回、武術の心得がある巫女が技を競う、風紀委員主催の人気行事だ。使用武器は許可されたものならなんでも有りだが、体操着には防護用の呪符が貼られ、直接ダメージが与えられる心配はない。

風紀委員は進行と審判役で、試合には参加しない。主催だからという以上に、圧倒的に上位を独占してしまうのが目に見えているからだ。グラウンド脇には応援席も設けられ、雰囲気は普通の体育祭と変わらない。しかし、成績優秀者が風紀委員にスカウトされるケースもあり、参加者の入れ込みようは半端ではない。

しかし、今大会で注目を集めたのは、意外な少女だった。

「なに、あの娘？」「どうして勝てるの⁉」

観客は、どこに驚けばいいのか戸惑い気味。まず、その少女が一年生であるという事。そして参加者中で最も小柄なのも、理由のひとつだった。身長は百五十センチ弱。全体的に華奢（きゃしゃ）で、とても武術に秀でているようには見えない。

使用している武器も変わっていた。刃渡り二十センチほどの、短剣の二刀流。間合いの狭い得物で相手の懐に飛び込み、首筋や脇腹などへ的確に当てていく。それだけでも急所へのヒットとみなされ、勝ちと判定されるのだ。

ショートボブの、幼さを残した顔立ちなのに、踊るような足捌（さば）きで一撃必殺の連続。力で打ちのめすのではないスマートな戦い方に、一般生徒ばかりか朱香までが目を奪われていた。

「紫苑さま、あの子……」
「ええ、とっても可愛いわよね」
紫苑の見当違いの返答に、言葉を詰まらせる。しかし彼女は朱香の困惑に気づきもせず、主催者席のテントの下、長机に頬杖を突いて、あどけない少女の躍進を満面の笑みで眺めていた。
初参加の危なげもないままに、少女は決勝戦に進んでいた。相手は前回優勝者の二年生。百八十センチの長身で長槍を駆使する、学園屈指の実力者だ。
「今回もわたしが優勝させていただくわ。そして今度こそ風紀委員に加わるの」
対戦相手の一年生を無視し、主催者席の紫苑に向かって槍使いが猛アピール。それを聞いた朱香は、不快な気分で眉間を寄せた。
彼女は、前回大会で優勝した後、風紀委員入りを懸けて紫苑に挑んだ。もちろん結果は返り討ち。武術の腕はさておき、不遜な態度がふさわしくないと判断されて、スカウトは見送られたのだった。
「あの様子では、傲慢が改まった様子はありませんね」
対して、一年生の少女は、短剣を持った両手を重ね、四十五度の角度で丁寧に

頭を下げた。先輩を侮ったり、増長したりといった様子は微塵(みじん)もない。
「とはいえ……一年生の子もここまででしょうね。あの槍の連撃に勝てたのは、結局、紫苑さまだけ……」
残念な結果が目に見えるようで、溜め息を吐きながら首を振る。だがその時、会場が異様な沸き方をした。慌てて試合場に目を戻す。目を疑った。尻もちをついた槍使いの喉元に、一年生の短剣が突きつけられている。
「そんな、まだ始まって十秒も……」
「戦いの最中に気を逸らすなんて、朱香もまだまだね」
未熟さをからかわれて動揺する朱香に、紫苑は苦笑いで解説してくれた。
「あの槍使いさん、相手を侮っているから攻撃が単調なのよ。動きを見切って接近すれば簡単だわ」
「全然簡単じゃありません！　だとしても一年生にそんな芸当ができるとは……」
まだ納得いかない朱香の言葉を、愛らしい声が遮った。
「紫苑ねえさま！」
優勝を決めた小柄な少女が、主催者席に走ってくる。紫苑は長机をひらりと飛

び越え、彼女をぎゅっと抱きとめた。
「よくやったわ可憐！」
「だって、紫苑ねえさまが見ている前で絶対に負けられないもの！」
少女の頬が上気している。それが優勝のせいでないのは誰の目にも明らか。紫苑に髪を撫でられて、甘えた仔猫のように目が細くなる。
「ところで、紫苑ねえさま。あの約束……」
「分かっているわ。でも、それは表彰式を済ませてからね」
顔を近づけコソコソと話す二人に、朱香は厳格な声で割って入った。
「なんですかあなたは！　風紀委員長に対して馴れ馴れしい！　紫苑さまも、そのように甘い態度をされては他の者に示しがつきません！」
朱香の剣幕に反省したのか、紫苑はやんわりと少女から身体を離した。
「で、紫苑さま。その子は一体……。ずいぶんと親し気な様子ですが」
朱香の不躾な視線が、小柄な一年生を値踏みするように、上から下まで行き来する。鬼の副委員長に睨まれて、少女の顔も身体も緊張で強張る。
「そんなに怖い顔しないで。後輩が怯えているじゃない」

紫苑は苦笑いで朱香をなだめながら、少女の腰を抱き寄せた。
「この子は、天木可憐。私の従妹なの。名前の通り、可憐でしょ？」
「まぁ……。それは否定しませんが……」
導入から話が脇道に逸れ、朱香の目が点になる。隣では、当の可憐が恥ずかしそうに身を竦めているけれど、まずそこは自慢しておきたかった様子。満足を得た紫苑は一転して真面目な顔になり、朱香も釣られて姿勢を正す。
「この子、今大会の優勝を条件に風紀委員入りを希望していたの。もちろん後でみんなの承認は得るけど、実力は朱香も見ての通り。品格も私が保証するわ」
「ま、待ってくださいっ。そんな急に……」
一気にまくし立てられて、反論する暇も与えられない。
放課後、定例会で同様の報告がされたが、もとより、紫苑に異議を唱えるメンバーなどいない。全員一致で、可憐の風紀委員加入が承認された。
「独断なんて、紫苑さまらしくもないっ」
放課後の学園を巡回中、朱香はつい感情を表に漏らしてしまった。

「どうしたの？　一番の紫苑さま信奉者が」
日頃、紫苑を神のように崇めている朱香の委員長批判。同行する仲間が驚いて目を真ん丸にするけれど、出した言葉は引っ込められない。
「別に……。ただちょっと、紫苑さまらしくないと思っただけで……」
「ああ、あの一年生の件ね。武闘大会優勝者の。いいじゃない、可愛いし」
何も問題視していない彼女に、朱香は小さく苛立(いらだ)った。
可憐という少女は、風紀委員に加入するや、メンバーたちに可愛がられる存在となっていた。マスコット的というか、つい甘やかしたくなる素質の持ち主。幼げで愛嬌のある顔立ちが、礼儀正しい態度を健気に見せているに違いない。
「ああいうのが愛され体質っていうのかしらね」
新参者と表現しては言葉が悪いかもしれないが、そのような子が紫苑に馴れ馴れしくしていたら、普通なら非難の的になる。
しかし、可憐が紫苑と腕を組んで並んで歩いていても、誰も文句を言わない。風紀委員は言うに及ばず、紫苑ファンクラブのような一般生徒さえ、微笑ましい光景として受け止めているようだ。気にしているのは、おそらく朱香だけ。

「可憐ちゃんて、紫苑さまの妹同然に育ってきたっていうし、あれが自然な距離なんでしょうね。それ以外は品行方正だし、資格は十分だと思うわよ」
それ以外と彼女は言うが、その「それ」こそが、朱香にとっては問題だった。
「いくら腕が立つからといって、秩序を乱していい理由にはならないわ。風紀の乱れは些細な緩みから生じる。わたくしは、それを心配しているのっ」
締めるところは締める必要があって、自分はその役割を任されていると認識しているだけ。しかし向きになった言い方が、仲間にいらぬ想像を働かせた。
「あら、鬼の副委員長が一年生に嫉妬？」
「嫉妬？　わたくしが？」
紫苑のパートナーとして盤石（ばんじゃく）の地位を築いているのに、嫉妬なんてあろうはずがない。なのに、からかうような仲間の笑みが、なぜか胸に深く突き刺さった。
「わたくしが、あの一年生に取って代わられると？　副委員長の仕事は、才能だけで務まるほど簡単なものでは……！」
エキサイトしかけた朱香の口が、急に止まった。仲間も、鋭い視線で辺りを窺（うかが）う。鍛えられた耳でなければ聞き逃していた微かな音。森の奥から、女の子の妖

しい声が風に乗って流れてくる。二人は下草を踏む音すら立てずに移動し、そして、大木に隠れるようにして抱き合う少女たちを発見した。

互いの下半身を愛撫しながら口づけに耽(ふけ)っている。顔を傾け、舌と唾液の絡み合う濃厚キスと、スカートと下着を脱ぎ捨てて、お尻丸出しで秘部を撫で合う卑猥(ひわい)な行為に、さすがの風紀委員も息を呑んで凝視してしまう。

「……ごらんなさい。甘い顔だけでは規律が乱れるの」

それ見た事かと偉ぶると、仲間の風紀委員は肩を竦めて降参の意を示す。朱香たちは音もなく接近し、夢中で抱き合う二人を見下ろした。

「風紀委員よ。あなたたちを拘束します！」

校舎から徒歩五分以上離れた場所に、風紀委員の集会所はあった。建物はふたつあり、第二体育館は専用の修練場。もうひとつの平屋の木造小屋は、基本的には連絡や休憩に使うだけ。お茶を飲むためのテーブルや食器棚がある程度。

そんな簡素な造りの部屋に、滅多に使われる事のないドアがあった。プレートには「校紀粛清室(こうきしゅくせいしつ)」とある。だが、誰もその名で呼ぶ者はいない。

地下へ通じるコンクリート製の階段を降りる。突き当りの鉄扉の向こうから聞こえるのは、破裂するような音と、少女の泣き叫ぶ悲鳴。

――パン、パぁン！

「ひぃぃぃ！」

コンクリート打ちっぱなしの、五メートル四方の狭い空間。朱香に連行された淫行生徒の二人組は、前屈みの格好で、専用木馬に両手首を縛られている。そして剥き出しになったお尻に、鹿革の手袋をした紫苑の平手が容赦なく打ちつけられた。ふたつ並んだお尻に、左右の手でまったく均等に制裁を加えられるのは、現風紀委員長だけの得意技。

「どうかしら、初めてのお仕置き部屋の感想は」

「許して……もう許し……きひィッ！」「だめ……だめぇ！」

これが、校紀粛清室――通称お仕置き部屋の主な刑罰、お尻百叩きだった。

最初は、そんなに軽い罰なのかと誰もが侮る。でも、最後まで耐えきった生徒は一人もいなかった。現に二人のお尻は真っ赤に腫れ、大粒の涙をボロボロと流す目は、激痛のあまり開く事すらできない有様。

その光景を、数人の風紀委員が囲んで見守る。叩く方も負担なので、交代要員が召集されているのだが、たいがい紫苑ひとりで済ませてしまう。

それよりも、彼女たちには別の役割があった。

淫行生徒を苦しめるのは、直接的な痛みだけではない。お尻や秘部を晒し、幼子のように泣くところを同世代の少女に見物させる事で、耐えがたい羞恥と屈辱を与え、二度と過ちは犯せないのだと身体に叩き込むのだ。

「痛い！　もう許して……お願いします！」

「最後まで耐えなさい。そして、己が犯した罪をその身に刻みなさいっ！」

懇願を却下し、制裁を継続する紫苑が浮かべるのは、魔物を狩る時さえ見せない上気した薄笑い。まるで、罰を与える事を楽しんでいるかのように。

「紫苑ねえさま……」

召集メンバーの中には可憐もいた。胸に手を当て、身体を小刻みに震わせ固唾を飲む。幼馴染みとはいえ、こんな紫苑を初めて見たに違いない。入ったばかりの彼女には刺激が強いのではと思ったけれど、いずれは知る必要のある事。

とはいえ、朱香にも余裕があるわけではなかった。紫苑の殴打が部屋の空気を

震わせるたび、まるで自分が打たれているかのように、熱い衝撃がお尻に走る。それは前の方にも伝播し、脚の間の秘めた器官まで甘く響かせる。

純潔を旨とする巫女にとって、性器は忌避すべき場所。こんな感覚を覚える事自体が罪。朱香は罪悪感に冷や汗を掻きながら、仲間の様子を盗み見た。みんな一様に、熱に浮かされた顔でリーダーの制裁を見詰めている。

「お願い……もう限界、だから……ふぁんっ！」

不意に、二年生が甘い声を上げた。一年生の方が困惑の表情で恋人を見る。紫苑の指先がお尻の谷間を滑り落ち、中心の小さな窄（すぼ）まりを撫で回したのだ。

「あ……んぁ！」

一年生も同じ穴を撫でられ、背中が波打つ。排泄の穴に触れられているのに、嫌がるというより戸惑っている感じで、吐息も熱くなっていく。それが朱香には不思議でならない。そんな彼女たちの耳元に、紫苑の意地悪な声が囁きかける。

「仕方ないわね……。どうしてもと言うのなら、やめてあげてもいいわ」

その言葉にすがるように、二人の目が大きく見開く。しかしそれは、さらなる厳罰への序章にすぎなかった。

「その代わり、あなたの処女をいただくわ」
新たな刑を宣告され、受刑者たちが蒼褪めた。処女でなくなれば霊力も失う。それが何を意味するか、知らない者はこの学園にいない。
「私たちだって、貴重な巫女を失いたくはないのよ？　でも、禁を犯しておきながら罰の中断を望むなら、それくらいの覚悟は持っているはずよね」
お尻にあった指が移動して、秘裂の窪みに食い込んだ。淫行生徒たちの膝が、ガクガクと震え出す。普通の学園だって、不祥事で退学処分になれば、その後の人生に大きく影響する。ましてや、ここは結界学園。力を失くした巫女に用はない。一族には恥晒しと罵られ、他家からも侮蔑される一生が待っている。
「やめてください！　それだけは……それだけは……」
「なら、あと五十回追加ね」
本人の承諾を得る前に、派手な音が部屋に響いた。もっとも、彼女たちに選択の余地はない。理不尽な追加制裁を甘んじて受け入れる。
「百四十八、百四十九……百五十！」
最後の一発が叩き込まれる。それと同時に、異変が生じた。

「あ、だめ……いやぁぁぁぁ……！」
二人の股間から水流が勢いよく迸る。極度の緊張から解放された安堵が一気に押し寄せ、揃って失禁してしまったのだ。
「あらあら、二人でおしっこなんて、仲のいいこと」
口元に手を当てた紫苑が、嘲るようにクスクス笑った。風紀のみんなが息を飲んで見守る中、彼女たちの足元で飛沫が派手に跳ね上がる。
「だめぇっ、見ないでぇぇぇ！」
その懇願も、全員の眼にしっかり焼きつけられた後ではもう遅い。二人の気力は完全に尽きたが、強制前屈みの縛めのせいで、膝を突く事さえできない。
紫苑はメンバーに命じ、彼女たちを運び出すように命じた。しかし、誰も動けずにいる。居心地悪そうに太腿をモジモジと擦り合わせるばかり。
「紫苑さまのご命令よ！　早くなさい！」
朱香は、自分も震えているのを棚に上げ、声を荒らげた。名指しされた委員が慌てて二人を外に連れ出す。それを見送ると、可憐が床にぺったり座り込んでいるのに気がついた。やはり、お仕置き部屋を見せるのは尚早だったのでは。そん

はっ
はぁっ
はぁっ
…くそっ
どうして…！
ガッ
メスガキ魔法少女vs巨チンおじさん!!
ふぁい♥
ぎゃっ
ズザザ
ぴっ
ぷっ
もしかしてぇ
それ逃げてる
つもりだったん
ですかぁ？
おちんちん
お・じ・さ・んっ♡
どうして
こんな事に…！
永遠のメスガキ
チンポ掃除機
かなで
漫画COMIC
じゃがうさ

俺はどこにでもいる
普通の引き籠もり
おじさん――だった

てく
てく

今は魔法で造りだした
この「○○世界」で
おちんちんおじさんを
やっている

童貞のまま●歳を
迎えると魔法使いに
なれるとかいうアレ

ふよ
ふよ

気がつくと
本当になってたわけだ

最初は戸惑ったが
突然のメールで

OON

OON
（おちんちんおじさんネットワーク）
に誘われ 色々と教えてもらった

『○年間
自慰だけを重ねた
チンポに穢れが溜まり
怪異化して
魔法使いへと至る』

ポコロン

だから
おちんちん
おじさんだ

運が良ければ世界の穢れと闘う魔法少女とやらに浄化してもらえるそうだが…

——またか

○○世界がまた一つ消滅したらしい

原因は件の魔法少女の一人

俺達は穢れが限界になると魔力が暴走し○○世界ごと消滅してしまうのだが

消

浄化どころかおじさんを弄び消滅においやるとんでもないのがいるらしい

確か名前は魔法少女…かなで

はいっ♡

!!?

今ぁ…かなでのコト呼びましたよねっ♡

ふーん
ここがおじさんが引き籠もってるお部屋ですかぁ
でなんで俺の部屋に案内なんか…！
…というか…俺の部屋には初めて女の子が…!?
思ってたより綺麗ですね♡
おおおっ！そそそう？
あれはぁ何かなぁ？
!!
オオオ オマンコ！オマンコのスジッ
ふーん♥
ああ あそこにあるんだ…！本物のオマンコが…！
女の子なら誰でも持ってるチンポを搾るための穴…！
はあっ はあっ…!!

あれぇ？息が荒いですよおじさぁん♡どうかしたんですかぁ？

くねくねくねくね

えぁ…ッそ それよりお前っ何しに来たんだよっ

えー？〝お前〟じゃないですよぉ

ぴとっ

かなでって呼んでくださいね♡

何ってぇ決まってるじゃないですかぁ

魔法少女はおじさんの『コレ』を浄化するんですよぉ♡

びくんっ

でも…かかなでが〇〇（おちんちんおじさん）世界を壊して回ってるって情報が…！

ひっどーい！

おじさんはぁかなでがそんな事する子に見えるんですかぁ？

ツ～

ぴくっ

う…あ…！

ぴくっ

あれぇ？もしかしてぇ勃起してるんですかぁ？

そうですよね～大変ですよね～オ・ナ・禁♡

おちんちんおじさん達は射精する度に穢れを溜めちゃうからぁこんな世界に引き籠もってずーっとオナ禁ですもんね～？

…そうだから俺達は勃起する事すら恐れている…！

でも…こんな状況で我慢なんて…ッ

ところでぇ…おちんちんの浄化ってどんな事すると思いますぅ？

う…あ…！

ここれはそういう事だよなっ…！

お俺もついに…!!

かかかっ かなでとエッ…

…えっ？

ぽすんっ

あはっ♡ バッカじゃないですかぁ？

ガキッ

かなでとエッチできるかも…なんて本気で思っちゃいました？

え…あ…

プルッ♡

ほんっっとキモッ!! 無理無理ムリです!!

ぐちっ

ぎゃっ

こんなシコシコ熟成されたおちんちん受け入れる女の子いませんからぁ！

そんな風にキモいから○○(おちんちんおじさん)なんかになっちゃうんですよぉ！

ようは汚いから消えてねって世界自体から拒絶されてるワケでぇ！

ぐっ

ぐに ぐに ぐに ぐに

わかってますぅ？ 魔法で○○(おちんちんおじさん)世界とか言ってますけどぉ！

ビクッ

魔法少女になったからってなんでそんな世界のゴミを助けないといけないんですかぁ!?

あっ

ビクンビクン

ゴミならせめて遊び道具になってから消えてくださいよぉ！
ややめっ
うあっ
ぐにぐにぐにぐに
本当にやめちゃっていいんですかぁ？
ほらほらぁ素直になってぇだしちゃえっ♡
おっおおっおおおおおっ
ビッグッ
きゃははっ♡ちょっろw穢れたら消えちゃうのに踏まれただけですぐびゅーって♡
ビッグッ
うわぁ…こんなに溜めても赤ちゃん作る相手なんていないのにぃ…
ドロォ
ホント笑えますねっ♡
クルッ
くそ…！期待して騙された俺がバカだったのにッ
ビクッ
久々の射精ッ…！それも女の子の足に扱かれてなんて気持ち良すぎる…ッ
ビクッ

でもぉ おじさん喜んでましたよね♡

大丈夫ですよぉ♡ 消えた人達も皆同じだったしぃ

ぶるんっ

…えっ？

かなでが優しく消してあげるからぁ…

おちんちんぴゅっぴゅしましょうね～♡

ぬちゃぁ

な…なんですかぁ このおちんちんはぁ♡

かなでとエッチしようとしてたってぇ

もし挿れたらこんな所まで入っちゃうじゃないですかぁ♡

そっ♡

ぅぅぅうるさいっ

ピクッ

ピクッ

ピクッ

童貞のくせにってコンプレックスだった長チンポ…

女の子の…かかなでのぷにぷにのお腹に当たって…！

このまま消えひゃうなんれせっひゃくのおひんひんら可哀想らしぃ
レロォ
特別にかなれのお口れぇ
プリンッ
消ひてあげまひゅね♡
はぁ
ちゅるんッ
ふあああっ!?
なんだこれっ…!!柔らかい粘膜と包み込むような熱が…っ
ズクズクッ
んぐぐ
それが蠢いて…!
んぐぐ
まるでチンポを搾る生き物に捕食されてるみたいな…ッ
ここの…!
フェラなんて初めてだけど伝わってくる…!
このフェラは射精させるためだけの攻撃的なもの…!
にゅっっっ
にゅっっっ
さっさと射精して消えてしまえという見下した目…!
レロォ〜
ど童貞を…な舐めるな——

強大に膨らんだ
母親の愛は歪み乱れる!
魔王堕ち
聖母マリア
淫欲に寝取られる勇者たち
小説 NOVEL／木森山水道（きもりやますいどう）
挿絵 ILLUSTRATION／阿呆宮（あおぐう）

正王暦三十二年、とある日の夕刻。
K王国は魔王軍の侵攻を受けていた。
王都の北、徒歩で十日ほどのところに広がるノース平原に、複数の【魔物の扉】が開いたのは数日前のこと。
その、距離と時間を無視して場所を繋げる魔法のワープゲートをくぐり、続々と集結する魔王軍――魔物の群れに対し、王国軍は攻撃を仕掛けたのだが……。
「司令官殿、完全に囲まれてしまいました！」
「くっ……魔王軍の集結が完了する前に【魔物の扉】を破壊する作戦だったが、多勢に無勢……平原近くの国境を警備する我々だけでは、力不足だったか……」
「なんだ、魔王軍が……魔物が攻撃をやめたぞ？　おれらを逃がす気なのか？」
「バカ、嬲り殺しにするつもりなんだよ！　逃げ場を潰してゴブリンを痛めつけ、悶え苦しむ様を悦ぶクズ冒険者みたいにな！」
一箇所に追い詰められた数十人の騎士と兵士の怒号と悲鳴が飛び交っている。

彼らは泥にまみれ、自分や魔物の血に染まり、手足を力なく垂らす者もいる。
王国軍の誇りである武器や防具も、おのおの多少の差はあれ欠け、ひび割れ、ひしゃげて吹き飛んでいた。
対して、スライム一匹逃げられない完全な包囲網を完成させた魔王軍は、ざっと数えただけでも、千体を優に超えている。
傷を負った者はとっくに後方に退避、あるいは運ばれており、包囲している魔物どもは、無傷で元気な者ばかりだった。
「ギャハハハ！　終わりだな、人間！」
「【魔物の扉】の半数も壊しやがった礼を、たっぷりさせてもらうぜぇ！」
人間と違い、姿形が著しく異なる魔物どもの集団は、粗雑さを隠しもせず、野卑な哄笑（こうしょう）を響かせる。そのときだった。
「戦母撃滅斬（マザーズ・リヴォーク）！」
落ち着いた美声だが、義憤に燃える妙齢の女性の声が響き渡り、
ドザァンッ！
血のように赤い空から、目映（まばゆ）く輝くピンク色の極太光線が降り注ぎ、魔物の囲

みの四分の一を纏(まと)めて吹き飛ばしたのだ。
地面が抉(えぐ)れ、土砂や草花が飛び散り、大きな大きなクレーターができあがったのを見て、生き残った魔物が目を剥いた。
「な、なにごとだァ！」
「ひぃぃぃ、すぐ隣に大勢いたのに……誰もいなくなってる！」
そこへ、ひとりの人間が降り立った。
「そこまでです、魔王軍。あなたたちの暴虐を、わたしは決して赦しません！」
ふた振りのバスターソードを軽々と携え、フワッとボリュームのある長い金髪を胸元の横でリボンで束ね、豊満かつ絶妙なプロポーションの熟れたカラダを、青くピッチリしたワンピースで包み込んだ、美女だった。
ワンピースはノースリーブで、身頃は大きく開いて乳房がこぼれそう。編み上げた革紐で引き締められているが、たわわな双乳は紐に食い込み、隙間からはみ出していた。ムチッと張り詰めた二の腕と両足は鎧で守られている。
悲嘆と絶望に沈んでいた王国軍が、わっと歓声を上げた。
「まさかこの女性は、噂に名高い、《新米勇者のママ》のマリナ！」

「惜しくも魔王に敗れた先代勇者の妻であり、自身も一騎当千の魔法剣士！」
「アラサーという話だが、どう見ても十代のこの美貌！」
「助けてくださりありがとうございます！　結婚してください！」
一番軽薄そうな若い騎士が彼女に叫んで膝をつく。すると、
「ごめんなさい。愛する夫以外とは、男女の仲になる気はないんです」
マリナは申し訳なさそうに、若い娘のようにくびれたウエストを折り、たわわなヒップを突き出す。そうして深く頭を下げた拍子に、男の顔など谷間に簡単に埋め込める爆乳が、粘っこくブルンッと揺れた。
「こんなに美人で強いのに、どんな男にもなびかず、未亡人のままだという噂は本当らしい！　亡き夫を忘れられないマリナ殿も魅力的だ！」
救世主を前に騒ぐ王国軍に、生き残りの魔王軍が怒声をぶつける。
「なんでぇ、大群が押し寄せてきたかと思えば、助っ人はたった一人かよ！」
「えらく美人じゃねーか、捕まえて犯し抜いてやろうぜ、なぁ！」
「まずはボロぞうきんの騎士どもを人質にし、抵抗を封じようぜ！」
魔物どもは、「おう！」と気勢を上げた。ところが、

「勇者烈風斬（ブレイブ・スラッシュ）！」
思春期の男子らしい低めの声とともに、どこからともなく飛来した白く極太の光線が、生き残りの魔物どもの三分の一を蒸発させた。
マリナ同様、王国軍を追い詰めていた魔物の群れを一蹴したのは、十代の若者で、彼は彼女の横に降り立つなり、吐き捨てる。
「誰の母さんを犯し抜くだと？　舐めたこと言うんじゃねーぞクソ魔物がッ」
魔物どもが消えた代わりに、マリナが作ったのと同じ位大きなクレーターができた地面に向かってツバを吐く。
彼は剣呑に地面を睨んでいるが素地は端正で、甘いマスクと言っていい。
長身で均整が取れた肉体は、丈夫で動きやすく、しゃれっ気のある衣服を纏っている。両手両足には鎧を着け、マリナよりも一回り大きい大剣を構えていた。
彼を見て、王国軍がまた歓声を上げる。
「この子は……《新米勇者》のサムくんだな！」
「マリナ殿のご子息にして、先代勇者の忘れ形見！」
「若者ながら実力は高く、母と幼馴染みの三人で、修行の旅の最中だとか！」

するとまたもや、今回は若く気の強そうな美声が周囲に響き渡った。
「ロキツエモ・テエモナンミ・ロエモ・ロエモ……極炎！」
ズガァンッ！　ボォワァッ！　ブボォォォォ！
今度は太く真っ赤な閃光が、立て続けに降り注ぐ。
その魔法攻撃は、残っていた魔物も【魔物の扉】も焼き尽くし、巨大な赤い炎の中に消してしまう。
「聞こえていたわよ、王国軍のオジサマ方。自己紹介は不要のようね！」
最後に降り立ったのは、サムと同年代の女の子だった。
「そう！　このあたしこそ、サイキョーの幼馴染み、《新米大魔導士》アンナメール！　飛べないマリナさんとサムを抱えて制空権を奪い、上空からの攻撃で魔物を殲滅するという作戦の最大の功労者であり、いっちばん敵に被害を与えたナンバーワンガール！　ア～ハッハッハ！」
高笑いする女の子を、王国軍は口を開けて見つめる。
見るからに勝ち気な面差しで、燃えるような髪を高い位置でクルンとツインテールにしている彼女は、言葉だけでなく格好もだいぶ派手だった。

デニム生地のトップからは、マリナに迫る巨乳の下半分がはみ出している。揃いのホットパンツはいわゆるローライズで、面積が極端に小さい。

マリナに勝るとも劣らない、若いナイスバディをこれ見よがしにひけらかす彼女は他に、左腕に腕輪と、両手にガントレットを着けている。どちらも魔力増幅装備である。

彼女はさらに、右腕の二の腕と左足の太ももに炎の、おへその右側にフェニックスのタトゥーを入れていた。それらにも魔力増幅効果はあるが、若い魔導士の間で流行しているファッションでもある。年頃の彼女はオシャレが大好きなのだ。

「うんうん。アンナメールちゃんは、いつもすごい子ねぇ」

マリナは、まるで自分のことのようにニコニコしている。

「サムくんもよくやったわぁ。はい、ママのお疲れ様のチュッ」

息子の側に来た母親は、上背のある彼に背伸びし、頬に唇を優しく当てる。

その瞬間、「おおお、マリナ殿のキス！」、「我もして欲しいぞ！」などと、王国軍がどよめいた。だが当の息子は真っ赤な顔をし、金切り声で怒鳴り散らす。

「か、母さん、人前でなんだよ、俺には疲れもケガもないって！」

「人前だろうが関係ないわ。本当に大丈夫？　サムくん」
「うわわ、ボディタッチをやめろ、見ればわかるだろ、俺はマジで大丈夫だから！　俺よりも王国軍の皆の回復が先だろうが！」
「そう？　じゃぁ、ちょっと待ってね。パパッと王国軍の人たちを」
そこへ、アンナメールが割って入って呪文を唱える。
「キンゲラホ・クフイカ・ルミ・ルミ……皆快復（オール・オッケー）！」
突き出された彼女の手のひらから巨大な魔法陣が飛び出し、満身創痍の王国軍を包む。するとなんと、傷だらけの彼らが全快した。四肢を失った者も、どこからともなく失われた部位が飛来し、ピタリと合わさり、元通りになるではないか。
王国軍から、今までで一番大きな歓声が上がった。
「すごい、おれの身体が元に戻った！」
「奇跡だ！　奇跡が起きた！」
「うおおお！　アンナメール！　アンナメール！」
人々は口々にアンナメールの名前を連呼する。彼女は得意顔でマリナに言った。
「マリナさんの手を煩（わずら）わせるまでもないわ。サムがケガしても、あたしがキッチ

リ治してみせるわよ」
「そ、それは困るわ……サムくんのお世話をするのは、ママの役目ですもの」
するとサムが実の母に詰め寄った。
「いつまでも子供扱いするなよ母さん！　俺はもう大人だ。修行のとき以外も、他人がいても、こんな風にべたべたされたら敵わないんだよ！」
「ひぃっ！　そんな大声出さないでよぉ……イライラするのは身体に毒なのよ？……そうだ、今度は唇にキスしましょう。ママのオッパイを揉ませてあげるわ。落ち着くわよ？　父さんもよく……」
「実の母親にマジキスするのも、オッパイを揉むのもできるわけないだろ！」
「ひぃぃっ……うぁ……サムくんが、息子が反抗期に入っちゃったよぉ～～～」
とうとう子供みたいに泣き出したマリナは、走り去ってしまった。

2

「はぁ……ようやく落ち着いたわ」

森の泉のほとりで大岩に腰掛け、水面に映る夕焼け空を眺めていたマリナが、ゆっくり立ち上がった。

彼女が息子や王国軍らの前から飛び出して、一、二時間が経過している。

深く息子を愛するが故に、反抗的な態度をとられると弱い彼女の、いざこざによるショックは完全に癒えたわけではないが、

「いつまでも落ち込んでいたらママ失格よ。サムくんもアンナメールちゃんもきっと心配してるわ。早く安心させて、美味しいご飯を食べさせてあげなくちゃ♪」

息子らへの愛情と母親の自覚からくるカラ元気で無理に明るくひとりごちる。

すると、どうだろう。彼女の脳裏には、サムとアンナメールの三人で楽しく食卓を囲んでいる様子が浮かんだではないか。

鼻歌交じりにスキップまで始めた彼女は、ほどなく家へ帰り着いた。

家と言っても、片田舎の実家ではない。修行場にしている樹海に建てた魔法の携帯コテージだ。手のひらサイズが魔法で本物サイズへ早変わりしたり、内外の気配を遮断する魔法的機能もあるので、安心して休息が取れる施設の窓から、マリナは中の様子をそっと覗う。

「安心させたいけど、ちょっとだけ……サムくんは最近なんだか冷たいから、この機会に心配してる姿を……サムくんのママ愛を補充させてもらおうっと♪」
ニシシと笑う彼女に、中からかすかに、こんなやりとりが聞こえてきた。
「あン、いいわサム、あふ、サムのチンポはぁ、今日もオマンコにエモいわっ」
「へへ、アンナのマンコも、俺のチンポに超キモチいいぜ？」
「一月（ひとつき）ぶりだから、余計気持ちいいんでしょ」
「母さんがいないときでないとセックスできないもんな。母さんは本気出せば俺やアンナより強いから心配はいらない。ヤレるときにヤリ溜めしとこうぜ」
愛する息子のサムと、息子の幼馴染みであり、マリナにとっては生まれたときから実の娘同然に世話してきたアンナメールが、なんと裸で抱き合っている。
抱き合うといってもハグしているのではない。セックスしているのだ。
マリナがいない間、ずっとヤリ続けていたことは、会話を聞くまでもなく、汗だくの裸体や、汗のシミが乱舞する乱れたベッドを見ればわかる。
「……ふたりがあんな関係だったなんて……ちっとも知らなかった」
マリナはしばし呆然（ぼうぜん）と眺めたが、我に返ると窓から離れ、壁によりかかった。

彼女は足下が崩れていく錯覚に襲われた。幻惑魔法をかけられたときよりも頭の中がぐるぐる回り、戦っているときよりも動悸が激しい。

おむつを替えたり、お風呂に入れたり、手料理を食べさせたり、寝かしつけたり……生まれたときからふたりを可愛がってきた記憶と、見たばかりの情景……実の親、あるいは実の親同然の女性をほったらかしにして、汚く肉悦を貪っている成長したふたりの姿が、脳裏に代わる代わる浮かんでくる。

ふたりは正常位でまぐわっていた。

サムはマリナの夫、つまり、彼の父親みたいに、マリナ好みのゴリマッチョに将来なりそうな筋肉質な肉体で、自分より少し小柄なアンナメールの瑞々しいナイスバディに覆い被さり、彼女の汗と愛液を飛び散らしながら突き回す。

アンナメールの方は、ゆくゆくは、マリナ並みの爆乳に育ちそうな若い巨乳をブルンブルン弾ませるだけでなく、ピンク色の乳首をロッドみたいにそそり立たせながら、彼と仲睦まじく腰を振っている。

結界魔法の効果で、マリナの気配がわからず、だから見られているのに気付かないでいるふたりは、やがてフィニッシュを迎えた。正常位でのキスハメ膣内射

精だ。しかもサムは、射精中も彼女の巨乳を離さず、揉みくちゃにしていた。
「わたしには唇へのキスも、オッパイを揉むこともしないのに……」
マリナは恨めしく呟くが、大きく溜息を吐き、今度はこう言う。
「そうよね……ふたりとも、いつまでも子供じゃないか……」
マリナのショックは、心に大きな穴が空いた心地に収束していた。
彼女には、今の感覚に覚えがある。愛する夫を亡くしたときだ。
「でも、サムくんもアンナメールちゃんも生きている……あの人を亡くしたときとは違うわ……それにこれは、悲しいことじゃない。喜ばしいことなのよ」
異性と愛を育むのは、祝福すべきことだとマリナは考える。
それがどれだけ幸せで尊いことなのかを、身をもって経験しているからだ。
アンナメールならば、息子の伴侶として申し分ない。生まれたときから愛している娘だからこそ、認められる。
「おめでとう、ふたりとも……鈍感でお邪魔なママでごめんなさい……」
呟くマリナだが、胸の痛みは消えなかった。そのときだ。
「えっ……この気配……ノース平原に、また【魔物の扉】が出現したわ！」

マリナは察知したが、コテージの中からかすかに聞こえる声は、情交……正確には連戦のそれだった。結界の効果で、ふたりとも気付いていないのだ。

「……魔王軍は、わたしがなんとかしないと。ふたりには、今までの分も愛し合ってもらわないといけないわ。鈍感でお邪魔なママは罪滅ぼししないとね♪」

カラ元気でニッコリ笑うが、胸の痛みは消えない。

しかし、マリナはめげずに駆けだした。

3

「なんてこと……平和を脅かす元凶が……夫のカタキの魔王が目の前にいるというのに、戦えなくなるだなんて……」

マリナは鍛え抜いた肉体と魔法を使い、日がとっぷり暮れた頃に戦場に駆けつけたが、遅かった。

王国軍は既に壊滅。アンナメールの魔法で全快したのがウソのように傷だらけで、鎧までボロボロの彼らは魔物に拘束され、周囲を埋め尽くす魔法の光球に、

惨めな姿を照らされていた。今や彼らは救いに来たマリナに対する人質である。
「マリナ殿、大剣とフードとローブの黒ずくめは魔王です、お逃げくださいっ」
「魔王は強すぎるッ、いくらマリナ殿でも……我らはいい、どうか退散を！」
気息奄々（きそくえんえん）の王国軍の言葉に、マリナはハッキリ言う。
「魔王がいて、王国軍の皆さんが捕まっているのに、わたしだけ逃げるなんてできません！　皆さんを助け、魔王を滅ぼす手は必ずあるはずですっ」
しかし、彼女に妙案はない。人質の王国軍は数十人。対して魔物……魔王軍は、ざっと数えただけでも千体を超える。マリナの視界いっぱいにひしめいているのだ。
慈愛の聖母マリナには、全員助けるという理想以外考えられない。しかし、彼女の一騎当千の能力を駆使しても、魔王軍を一瞬で全滅させるなど到底無理。中途半端に仕掛けた途端、人質にしているのだから皆殺しはないだろうが、それでも見せしめとして、魔王軍は王国軍にむごい仕打ちをするに違いない。
「ギャハハ、来たな《新米勇者のママ》マリナ！　魔王様の予想どおりだ！」
「先手を打ってお前を封じた超ヤリ手の魔王様を滅ぼす？　本気かよ！」

「あの生意気なマリナを、ヤッちゃってください魔王様！」
魔物の歓声を背に魔王は、マリナの前に来た。彼女は首を傾げる。なるほど敵は、軍勢を従えるだけの強烈な威圧感があり、向き合うだけで息が詰まる。
だが、ぜんぜん殺気を感じないのはなぜだろう。それどころか、まるで、長い間離ればなれになっていた妻と再会したみたいな強い好意が伝わってくる。
警戒しつつ困惑するマリナの前で魔王は、王国軍を無残に傷つけたであろう大剣を放り捨てた。さらには、フードもローブも脱ぎ捨ててしまい……。
「ぇ……ぇぇっ！」
予想外の行動に面食らったマリナが、正体を現した魔王の姿に息を呑んだ。
「よ、母さん。俺だよ。マリナ母さんが愛する息子のサムだよ」
魔王はなんと、遠くの携帯コテージで、恋仲のアンナメールとセックスを楽しんでいるはずの愛息子にして《新米勇者》のサムだった。しかも彼は全裸だ。
「う、うそよ……確かに、声も姿もそっくりだけれど……あなたは魔王よ……だって、本物の……わたしが愛するサムくんは今、アンナメールちゃんと……」
「ひっでぇなぁ。俺はこんなに母さんを愛してるのに、偽物扱いだなんて」

心底傷ついたという顔の魔王にマリナはたじろぐ。仕草まで本物そっくりだ。
「ま、惑わされないわ……幻惑魔法の類いで揺さぶっても無駄なんだから！」
「俺は本物なのになぁ……でも、いっか。折角、俺より強いマリナ母さんが、抗(あらが)えなくなってるんだ。議論するより、長年秘めていた俺の愛を受け止めてもらうまたとないチャンスを、活用しないとな」
魔王はにじり寄ってくる。マリナは動けなかった。偽物だと頭で理解していても感情が割り切れない。筋肉を揺らして近づいてくる魔王の身体は、少し前、偶然にも覗き見した立派なカラダと瓜二つで、どうしても見入ってしまう。
しかも、あのときは見えなかったが今は丸見えの彼のペニスが、逞(たくま)しすぎる。
威風堂々と皮が完全に剥(む)けていて、バナナ以上に太くふしくれだっており、しかも、迫力満点に黒ずんでいるではないか。もちろん巨根は、若い性欲を放ちながらヘソまで反り返っている。
魔王の……サムの男根は、今は亡き夫がマリナの子宮へ将来息子となる精子を植え付けた逸物(いちもつ)に、勝るとも劣らない名器と言えた。
愛し合うが故に時間を作って頻繁にまぐわっていたマリナにしてみれば、夫と

同等以上に愛している男性が、夫を超越したペニスで迫ってくる状況に、平静ではいられなかった。自然に目が吸い寄せられ、口中に性欲のツバが溜まる。

「ふふ、母さん……俺のチンポをガン見してるね。一目で気に入ってくれたのかい？　自分がお腹を痛めて産んで、今まで大事に育てた息子のチンポをさ」

「愛する夫を奪っただけじゃなく、わたしもサムくんも愚弄する魔王め……！」

「おーこわ。このチンポと遊んだら、素直になってくれるかな？　よっ、と」

魔王はマリナの目と鼻の先で、無防備に仰向けに寝転び、手招きした。

「おいで、母さん。俺に覆い被さるんだ。母さんのオマンコを俺の顔に、母さんの顔を俺のチンポに当てる体勢だよ」

「そ、それって……！」

「うん、シックスナインしようって、言ってるんだ」

「ッ！　そんなこと、できるわけないでしょ！」

「なんでだよ。父さんとやりまくってたんだ。やり方は忘れようがないよな」

「ど、どうしてそれを……ッ！　やだ……わたしったらなにを……ともかく、やり方がわかっていても、サムくんと同じ姿形をしていても、あなたは魔王よ……

敵と、しかも、夫のカタキと性行為するなんてありえないわっ！」
「ちぇ。息子のとはいえ、夫のでない他人棒をガン見してたクセに、よく言うよ。なら、仕方ない。母さんがその気になるまで、ひとりひとり人間を消そう。母さんは優しいから、ひとり消しただけで、その気になってくれるだろうけど」
すると、魔物の一体が野卑に快哉を叫ぶ。
「ヒーハー、生意気な女マリナが遂に、魔王様とシックスナインするんだな！」
その刹那、魔王が魔物を睨みつけた。マリナに見せる友好的な表情からは想像できない上に、本物のサムもしないドス黒い殺意に満ちた形相だった。次の瞬間、騒いだ魔物が「ギャッ」と恐ろしい悲鳴を上げ、消し炭になって消えてしまう。
「ムードを壊すことをするんじゃない。お前らは、事前に命じていたとおり、人間どもを拘束し、こちらに連れてくればいい。それ以外のことはするな」
憎々しげに釘を刺した魔王の様子に、マリナは思い知らされた。
「いけない……やっぱり相手は魔王なのよ……下手に逆らったら、王国軍の皆さんが消されてしまう……従うのは屈辱だけれど、今は耐えるしかないわ……」
意を決したマリナは、反抗の気持ちが滲む緩慢な動作で、魔王に覆い被さった。

うつぶせに寝そべり、余計な力を抜く。日々の修行で鋼のように鍛えられた愛息子と同じカラダに、内心で舌を巻いてドキドキしつつ、熟れた未亡人のカラダを預ける。在りし日に夫と、幸せにシックスナインに耽(ふけ)っていたときのように。

「流石(さすが)は母さん。ひとりも犠牲を出さないで、俺とシックスナインしてくれるなんて、嬉しいよ。それでこそ、俺の自慢の母さん……いや、愛する女性だ」

「息子の姿形で……あの子の声で、おかしなことを言うのはやめて……」

マリナの声はかすかに震えていた。

好ましい筋肉質のカラダは生々しく、幻惑魔法や異種族のそれとは思えない。

まるで本物の息子と密着しているようで、酩酊(めいてい)感めいたクラクラに襲われる。

「薄手の服越しに、母さんの柔らかくてあったかいカラダの感触が、俺の裸の全身に染み込んでくるよ。はぁぁ、これが夢にまで見た母さんのカラダなんだ。最高に気持ちいいじゃないか。太ももにのしかかってる爆乳はひとしおだ」

魔王は女に飢えた思春期の童貞みたいに、鼻息を荒らげる。

部下をひと睨みで消したのがウソみたいに、無邪気に興奮しているのだ。

「早速、母さんを味わうとするか。それ、スカートをまくりあげてやる」

若く逞しい魔王の手が触れたのに、マリナは思わず「あっ」と声を上げた。
構わない彼は慣れた手つきで、その前後非対称のスカートをめくりあげる。
戦う聖母のシルク質のスカートは、太ももとお尻をくすぐりながら、ウエストでまとまった。くびれまでたくしあげられてしまったのだ。
スカートで守られていた下半身に、ひんやりした夜の空気が押し寄せてきた。
屈辱と羞恥で火照る肌は夜気に刺激され、未亡人の豊満尻がブルリと震える。
「へぇ！　母さんってば清楚な顔して、こんな派手な下着を身につけてたんだ」
愛する夫以外に暴かれたことのない中身に、魔王が感心と興奮混じりに叫ぶ。
「バラ模様の黒いレースのTバックか、母さんのきめ細かい美白肌と熟れたカラダによく似合ってるよ」
マリナは顔から火が出る思いだった。
余計なことはするなと釘を刺された魔物も、気がついた王国軍……男盛りの男たちも、夜の闇の中で白い光球にボゥッと照らされている自分の、年甲斐のないパンティ姿に、情欲の視線を突き刺してるのが気配でわかる。
周囲から注がれる強烈な視線が、無防備なアソコを突いていた。

しかし一番激烈なのは、誰よりも間近……それこそ、顔がくっつくかくっつかないかの至近距離から見ている魔王の視線だ。彼に見られているのを意識すればするほど、膣も子宮も淫らな熱を帯び、嬉しそうに秘唇が震えてしまう。

「魔物や王国軍……なにより俺に色っぽいオマンコを見られて、感じてるみたいだね。オマンコがくねってるよ」

「いつまで嬲るつもりなの？　犯すならひと思いに犯したらどうなのよ……っ」

「父さんが亡くなり十年余り。義理立てしてもカラダは女盛りを迎え、その頂点である四十路（よそじ）に向かって熟れる一方。淫らになっていい理由……超久しぶりに性欲を解放していい口実ができて嬉しそうだ。犯して欲しいと言うなんてね」

「そ、そんな意味じゃ……あぁッ！」

魔王はマリナの、爆乳オッパイに勝るとも劣らない熟れ尻に両手を回して十指を突き立て、反論を潰す。そうして、自分のオンナを抱き寄せるオトコじみた性欲と独占欲を込め、己の顔面へぐいっと引き寄せた。

「そんな……はああ……魔王の舌が……息子のサムくんと同じ舌が……わたしのアソコに入り込んでるぅッ」

顔面を密着させた魔王は、黒バラ柄のレースのショーツのフロントを指で横にずらし、露わになったふくよかな陰唇の境目に、舌をヌルリと滑り込ませた。
カラダはすっかり大人になっている、思春期の息子の分厚い舌は、いやらしい粘液を纏った触手めいた肌触りだ。ちょっと黒いのが大人っぽくもある熱い舌は、まだまだピンク色で狭い戦う聖母の粘膜を割っていった。隙間を強引にこじ開け、味蕾（みらい）の凸凹との蜜の擦過感を染み込ませながら、ジリジリ押し入る。
「いやっ……離れて……！　夫以外に、しかも仇敵（きゅうてき）にこんなことされたくないッ」
流石の聖母も必死に腰を振り、振りほどこうと躍起になる。
抵抗感も露わに、ブルンブルンとお尻のお肉を揺らすが、魔王も強硬だった。
暴れ馬をしつける風情で、蕩（とろ）けるように柔らかい未亡人の尻タブを、強く握り直す。反逆は徒労とわからせる風に、自分の顔へ秘部を押しつける力も強烈だ。
地力の差を見せつけられながら、マリナは押さえ込まれてしまう。
「恥ずかしがるなよ。愛する母さんの溜まった性欲は、俺が処理してやるさ」
抵抗するマリナを軽々とねじ伏せる魔王は、顔とアソコが密着し、舌をすっかり膣に入れているというのに、いやに明瞭にそう言った。しかも……。

純聖天使
カインドホープ
地に堕ちる正義
耐え難い快楽の中で
暗黒に染まる光の戦士!
堕ちたその先に待ち受けるものは……?
小説/NOVEL でぃふぃーと
挿絵/ILLUSTRATION モチマコ

「このッ……いつまでもアタシ達の邪魔をしてぇッ!!」
黄金色(おうごんいろ)の長髪にGカップ以上の爆乳を持つ豊満ボディ。露出の多い黒いアーマーを身に纏(まと)った、見た目は成人女性を思わせる存在が、怒りに満ちた声を放つ。
「何もしなければ邪魔なんてしないんだけど……マラス。あなた達がやろうとしていることを見過ごすことはできないわ」
受けるのは、薄い桃色の髪を天使の羽を模した髪留めでサイドポニーとしている一人の少女。
白と桃色の配色のレオタード状のコスチューム。Fカップはあるであろうたわわに実った乳房がその存在を主張し、薄く短いスカートでは隠しきれない大きなヒップもまた目立つ。
二の腕辺りからのロンググローブと、白い太ももからのロングブーツ。肩口と腰部には小型のアーマーが装着されていた。
存在感の強い、マラスと呼ばれた女を前に凛々しい声を発する少女の顔には、正体を隠す為のアイマスク。
「この純聖天使カインドホープがいる限り、あなた達の悪事を許しはしないわ

ッ!!」

ビシっと、右手の人差し指をマラスへと伸ばして宣言する、正義のヒロインである純聖天使カインドホープ。

天使としての光のエナジーを与えられた彼女は、世界を闇に包まんとする悪の組織に対抗できる存在。

幹部の一人であるマラスの卑劣な作戦を下し、今まさに一対一の状況となっているのだ。

「何を偉そうにこの小娘がぁッ!!」

マラスが手をかざすと、彼女の持つ闇のエナジーが集中し始めた。黒く大きな球状の闇のエナジーが連続で放たれ、様々な角度から純聖天使へと襲い掛かる。

「オーロラ・リボンッ!!」

着弾するよりも早く、希望の名を持つヒロインが手をかざすと光のエナジーが集約して柄のような形状となった。

それを掴(つか)んで振り下ろすと、先端から新体操のリボンのように光が伸び、闇の弾を次々に弾いてかき消していく。

「こ、このっ……!!」
「ここで終わりよ!!　マラスッ!!」
威力をあげても変わらずに弾き前へと進んでくる正義のヒロインを相手に後ずさる女幹部。
純聖天使はここがチャンスとリボンを鞭のようにしならせて、マラスを狙い振り下ろす。
いくつもの聖なる光が迫るのを、マラスは闇のエナジーをバリア状にして受け止めようとするが、それも数発受けただけで砕かれて消えた。
「あぁぁぁぁッ!!」
無防備なまま聖なるリボンに打ち据えられるマラスが苦痛の悲鳴をあげる。けれども、これではトドメには至らない。
「聖なる光を受けなさいッ!!　オーロラ・シャイン!!」
リボンとは反対側の手をかざし、光のエナジーをより強く込めて巨大な光線状に放つという、単純だけれど、だからこそ強力な一撃。
相手の動きを制限しているからこそのチャンスを活かすべく、カインドホープ

は文字通りの必殺技を放った。
「う、あああぁぁぁぁッ!!」
眼前に迫る命を絶つ為の攻撃を前に、恐怖に染まったまま叫ぶ女幹部。
しかし、人を簡単に呑み込まんとする光の奔流(ほんりゅう)は突如として眼前に現れた存在によってかき消された。
「危ないところでしたなぁ。さぁ、今のうちにお逃げなさい」
ピエロの仮面によって素顔を隠した肥満体の道化師。マラスの前に立った彼によって、オーロラ・シャインは消え去ったのだ。
「……た、助かったわ。ドゥーケ」
何も聞かず、現状を把握したマラスはドゥーケと呼ばれた男の影に隠れるようにして消える。
「ドゥーケ。今、何をしたの」
マラスを追わなければならないが、眼前に存在するもう一人の幹部を無視することはできないと、カインドホープは光のリボンを持ったまま構える。
マラスと同様に自ら戦うようなことはしない。よく言えば頭脳戦が得意なドゥ

ーケが現れたことに対する疑問が浮かぶが、何よりも気になるのは。
「オーロラ・シャインが当たったはずなのに……!!」
そう、当たれば無事ではいられない強力な一撃。少なくとも今までのドゥーケであればひとたまりもなかったはずだ。
だというのに怪我ひとつないというのはおかしいと、ギュッと拳を握り締める純聖天使。
「ほほほっ。簡単なことです。何度も戦い、攻撃を受け、さらには他の戦いのデータを解析し続けた結果……吾輩はとうとう光のエナジーを攻略したのですぞ」
「こ、攻略ですって……そんなことできるわけがないわっ!!」
「先ほどは必殺技を吸収したから吾輩は無傷であったわけで……アレが証拠に他ならないと思いますが？」
余裕の態度。今までは裏方でコソコソとしていた怪人が、こうして現れたというのもひとつの証拠になる。
しかし、だからどうしたというのか。光のエナジーは悪と戦う為に授けられた力。それが攻略されたと言われて戦うことを諦めるなど、純聖天使カインドホー

プにはできない。

「……いいわ、これで確かめてあげる。オーロラ・リボンッ!!」

マラスに放った時と同様に光のリボンを鞭状にし、さらにはドゥーケを逃がすまいと幾つにも分裂させる。一斉に襲い掛かる光のエナジー。

「う、嘘……そんなことって……」

けれども、カインドホープのアイマスクの下の双眸が捉えたのは、当たるのと同時に光が消え去っていく様だった。

触れた部分が完全に消失し短くなってしまっている。そしてドゥーケ自身は平然としていることで、今の攻撃に効果がないのだと教えられた。

その様子に呆然とする純聖天使。それでは何をしても相手にダメージが与えられないのではないかという、あってはならない現実に、不安の二文字が大きくなる。

「これでご理解いただけましたかな？　最早貴女では吾輩に勝つことは不可能だと」

相手を小馬鹿にしたような口調ではあるが、今の道化師怪人の状態であればそ

れも納得といえた。
「いいえ。私は皆を、平和を守る正義の天使。純聖天使カインドホープ。あなたのような相手に負けを認めるだなんてありえない」
己を鼓舞するように毅然と言い放ち、カインドホープの右手が輝きを増していく。
（光のエナジーが吸収されるのは間違いない……なら勝つ為には直接打撃を与えるしか……!!）
ただぶつけるだけでは吸収されるのであれば、これ以上は同じ攻撃をするわけにはいかない。下手をすれば相手をパワーアップさせることになる。
長期戦はよくないと、次なる一手。拳による直接攻撃の一撃で決着をつけるべく光のエナジーを集中させる。
「ほほほっ。いいでしょう、撃ってきなさい。受け止めてあげましょう」
余裕の表れか逃げる素振りを見せないドゥーケ。むしろかかってこいと、指をクイクイっと曲げて挑発までしていた。
「その余裕ごと撃ち砕いてあげるわッ!!　いくわよ。オーロラ・フィストぉ

ッ!!」

大きな標的へと向かい真っすぐ駆けだすカインドホープ。仮面の中で笑っているであろうその顔面へとめがけ、全力で拳を突き出した。

ズドォオォッ!!

「んぶぅっうぅぅうぅッ!?」

押し出された潰れた悲鳴。その主は必殺の一撃を放ったはずのカインドホープ。光のエナジーに満ちた拳はドゥーケの片手で受け止められ、そのお返しとばかりに腹部へと深々と拳が突き刺さっていた。

とめられたことに対する驚きが反応を遅くし、結果避けることもできずに闇のエナジーに満ちた打撃を受けてしまう純聖天使。

「吸収したということは吾輩の力になっているというわけで。少ない力で大きな効果……うぅ～ん、光のエナジーは素晴らしいですなぁ。ほほほほほッ!!」

僅(わず)かな光のエナジーも大きな闇のエナジーに変換され、本来ドゥーケが持ちえない強大な力となってカインドホープの光の防御を打ち破る。

アイマスクの下のではグルンっと白目を剥(む)き、意識を断たれた純聖天使は間違

いなく戦いで敗北したのだった。

※

「わ、私をどうするつもり……!?」

敗北するはずのない相手の圧倒的な力により意識を断ち切られたカインドホープが目を覚ました時には、大の字で仰向けに寝かされていた。

コスチュームはボロボロにされ、瑞々しい若く白い肌が露出する煽情的な姿は、先の戦いでの敗北が事実であると視覚的にも認識させられ、悔しさにギュッと唇を噛む。

光のエナジーを込めて脱出をしようとしても四肢が闇のエナジーによって拘束されていてビクともせず、ただただ無駄にエナジーを消費しているだけ。

寝かされる足の先に立つ道化師怪人へと、できる限り毅然に振る舞おうとするが、不安で声が震えてしまうのをとめられなかった。

「ホホホッ。貴女の光のエナジーは完全に解析済み。散々にこちらの戦力を削ってくれたお礼として……我らが組織の一員として迎え入れてさし上げましょう」

「……馬鹿なこと言わないで。あなた達みたいな最低最悪な奴らの仲間になんて

なるわけないじゃない」

そう、いかに光のエナジーを吸収され敗北してしまったとしても諦めたわけではない。

この正義の心が、命がある限りは、この悪達の思うようになってたまるかという強い意志が純聖天使には存在している。

先の震えは消え、今の言葉には正義のヒロインである純聖天使カインドホープの強さが表れていた。

「なぁに、貴女の答えなど関係ないのです。無理やり、強制的に我らの仲間になって貰うのですからなぁッ!!」

ビリリィッ!!

「きゃあああぁあぁぁッ!?　な、何をするの……この変態ッ!!」

ドゥーケの両手が無造作に伸びたかと思えば、破損するコスチュームの乳房部分が掴まれ、勢いよく左右に破かれてしまった。

コスチュームの下でも十分すぎるほどに存在感を主張していたFカップの巨乳が、光のエナジーによって作られた布地の破片の中でたぷんっと、まるで弾むよ

うにして姿を現す。
正義のヒロインとしてではなく、一人の少女としての悲鳴。カァっと羞恥に頬が紅潮しているのを鏡を見ずとも理解しながら、カインドホープは道化師怪人への声を荒げた。
「これも光のエナジーを研究し邪魔な正義のヒロイン様を倒した吾輩の特権という奴でして。生意気ボディの天使様の身体を味わいながら堕ちていく様を見せていただきませんとなぁ!!」
ぎゅむぅッ!!　むにゅ、むぎゅぅ!!
「いあぁぁッ!?　い、痛いぃ……そ、そんな、乱暴に……は、放して……あ、くぅぅ……放しなさい……ッ!!」
桜色の乳突起をも諸共(もろとも)潰さんとする大きな掌によって、天使ヒロインの乳肉が卑猥(ひわい)に歪み、そのまま乱暴に揉み捏(こ)ねられ始める。
二つのメロン大の乳を中心に全身に響くのは痛烈な刺激で、カインドホープは堪らずに声をあげた。
「放すわけがないでしょう。今まで散々に苦しめてきた天使様のオッパイなんで

すからなぁ。こうしてしっかりと楽しませていただきませんと……ほほほっ、これは柔らかい。最高の感触ですなぁ」

「うぅぅ……ば、馬鹿みたいに力をいれないで……!!　も、もっと大事に扱いなさいよ……!!　あ、くぅぅ……ひうううぅぅッ!?」

まるで壊れても構わないとばかりの力の込め方に当然、普段から揉まれるような経験のない純聖天使は未知とも呼べる刺激に困惑しながらも、必死に抵抗の意志を示す。

しかし、途中で太い親指と人差し指の腹で桜色の突起を二つ同時に押し潰されると、脳天にまで響くような激感に高い声をあげてしまった。

「流石（さすが）の正義のヒロインのカインドホープといえど、こういった刺激は苦手みたいですなぁ。ですが、本番はここからですぞ」

「んあぁっ……ひあぅ、くふぅッ!!　こ、こんなの、大したこと……は、恥ずかしい、だけ……くふぅぅッ……はひっ、くあぁぁッ!?」

クリクリと乳首を押し潰され、引っ張られると、自分自身ですらこうして乱暴に扱ったことなどないというのに刻まれる淫らな刺激。

ただの痛みであれば耐えてみせるというのは、戦い始めた時から決めていたが、こういった感覚は初めてであった純聖天使は、艶(あで)やかな悲鳴を抑えられない。

だからこそ、ドゥーケの口にした本番が何を意味するのかというところまで思考が進まなかった。

「では……美味しくいただくとしましょうか」

「――ッ!? ひあああああぁぁぁぁッ!?」

仮面の道化師怪人の声が低くなったことに対しての思考よりも先に、身体が異常を訴え始める。

Fカップの巨乳を揉み捏ねながら乳突起を弄(もてあそ)ぶ大きな手が鈍い光に包まれたかと思えば、与えられその身に宿した、悪を倒す為の光のエナジーが体外に消えていく感覚に襲われたのだ。

「な、な、なにをぉ……あぁぁぁぁ……ひ、光のエナジーが、消え……す、吸われ、てぇ……はひぃぃぃっ……!?」

何が起こっているのか。それは確かに結論として頭に浮かんでいるのだが、認めたくはなかった。

紅に染まる
くれない
退魔師悪堕ち調教
正義の退魔ヒロインに迫る
過激な悪堕ち触手調教！
小説 NOVEL／峰崎龍之介
みねさきりゅうのすけ
挿絵 ILLUSTRATION／mogO-721

人気（ひとけ）のない夜の公園を、ひとりの女が歩いていた。
長い黒髪を持つ、美しい女だった。歳は二十代前半といったところだろう。ダークグレイのビジネススーツをぴしりと着こなし、その上に春の夜の肌寒さを遮る薄手のコートを羽織っている。足元は上等そうな革靴で、舗装された道とぶつかるたびに、小気味好い足音があたりにこだました。
こつこつ、こつこつ……
女の足音は規則正しかった。街灯もまばらな夜の公園はひどく暗く、不気味なことこの上ないが、逸ることも乱れることもない。
（……そろそろかしらね）
女――黒鉄（クロガネ）イブキは内心でひとりごちると、不意に足を止めた。
遊具もない寂れた公園の真ん中に、スーツ姿の美女がひとり立ち尽くす。不自然といえば不自然な光景だった。と――
「いるんでしょう？　隠れてないで出てきなさい」
まっすぐ前を見つめたまま、彼女は鋭く囁（ささや）いた。するとその声に応じたかのように、彼女の背後にひとつの人影が現れる。

いや、人影というのは正確ではない。ソレは『人の形をした影』ではあるが、『人の影』では決してないのだから。

（やっぱりいたわね）

イブキは自身の感覚に狂いがなかったことを確認しつつ、振り返って『敵』の姿を視界に収めた。

そいつは人に似た異形だった。といっても似ているところは四肢と胴と頭を持つという点だけであり、他の特徴は怪物そのものだったが。

二メートルを優に超える全長。歪に膨れ上がった筋肉。肌は全身深い緑色で、頭は禿げ上がっている。岩のようにゴツゴツとした顔は恐ろしい面相で、かつ醜い。ナイフで裂かれた傷のように大きな口からは鋭い牙が覗いている。そして落ち窪んだ眼窩（がんか）にはまり込んでいる瞳は、血のように赤い。

――妖魔。それがこの異形の呼び名だ。闇に身を潜め、夜に乗じて人を襲う怪物。ただし――

（そんなこと、一般人は知らない。滅多に遭遇するものじゃないし、仮に遭ってしまったのなら……まず間違いなく、死ぬのだから）

イブキは冷静に思考しながら、コートの内側に手を入れた。そこには『武器』がある。一般人では決して抗(あらが)えない怪物を討ち滅ぼせる、稀有な武器が。

「ニゲナイ、ノカ？」

と、怪物が呟く。片言だが、きちんと聞き取れる日本語だ。

「口が利けるのね。野良の妖魔にしては珍しい」

「フン。ナマイキナ……オンナダ」

怪物は気分でも害したかのように呻(うめ)いた。が、すぐに口の端を持ち上げる。真紅の目がイブキの身体を舐め回すように見つめていた。コートは薄手なので、身体のラインは完全には隠れていない。イブキの肢体が豊満であり、コートの下に極上の媚肉を秘めていると悟ったのだろう。雄の妖魔は獰猛(どうもう)で好色だ。知性は低くとも、獲物を見定める目だけは確か、ということか。

「キメタ。オマエハ……クイナガラ、オカス」

「そう。好きにすればいいわ。できるなら、だけどね」

「ヌカセ――！」

妖魔は激昂して叫びながら、激しく地を蹴った。そのまま丸太のように太い両

腕を伸ばし、掴(つか)みかかってくる。
イブキは無言でステップを踏み、妖魔の突撃をかわした。と同時にコートの内側に仕込んだ武器を取り出し、眼前に掲げる。
それは全長70センチほどの短い刀で、いわゆる小太刀と呼ばれる類のものだった。だがただの小太刀ではない。妖魔滅殺の使命を帯びた人間――退魔師のために作られた、特別な兵器だ。
「抜刀」
イブキが静かに囁き、小太刀を鞘から引き抜いた……その刹那(せつな)。
彼女の身体(からだ)が、眩(まばゆ)い光を放った。
強い光だった。再び両腕を掲げ、彼女に襲いかかろうとしていた妖魔がたじろぐほどに。そしてその光の奥に佇(たたず)むイブキには、ある変化が起きていた。
ビジネススーツとコートは何処(いずこ)かへと消え、隠れていた蠱惑的(こわくてき)な肉体が露わになる。鍛え抜かれたしなやかな筋肉と、それを覆う女性的で柔らかな媚肉のバランスは絶妙という他ない。堂々たる仁王立ちによって誇示された胸には90センチに迫る豊満淫肉がそびえ立ち、ぐっと突き出た双臀(そうでん)は美しく大きな半円を描いて

いる。力強く大地を踏みしめる足は美しい脚線を持ちながらも、むちむちしていて艶(なま)めかしい。

「装身」

再びの囁き。そして再びの変化。

若々しくも熟れた女の身体に、黒い影が纏(まと)わりついていく。影の出元は小太刀の鞘だ。刃を収めていた漆黒の鞘が解けるようにして影に変化し、今度はイブキの肢体を包み込んでいく。

影はイブキの美巨乳を包み隠し、薄く伸びて股間までを覆った。そこで影は影ではなくなり、レオタード状の特殊スーツへと姿を変えた。また影は手足にも絡みつき、頑強な手甲と具足を顕現させる。

『零式障壁礼装・神衣(カムイ)』。何百年と続く妖魔との戦いの中で進化し続けてきた、『魔』を滅することに特化した決戦兵器である。

レオタード状の『鎧』は極薄でありながら耐刃性と衝撃吸収性を兼ね備えた至高の防具で、手甲と具足は強大な膂力(りょりょく)を持つ妖魔と打撃戦を行うこともできる、攻防一体の逸品だ。

「ナ、ニ……！　オマエ、ナニモノダ!?」
全ての変化を見届けた妖魔が、驚愕も露わに絶叫する。イブキはそれに、凛とした声で応じた。
「退魔師、黒鉄イブキ。――妖魔を殺す者よ」
変身を終えたイブキは、言うが早いか駆け出した。退魔師としての異能――霊力を丹田で練り上げながら、妖魔の懐に潜り込む。
「ヌ……！　サセルカ！」
妖魔は焦った様子で、太い腕をこちらに向けた。が、その腕が伸び切ることはなかった。なぜなら――
「グアアアアアア!?　オ、オレノウデ、ウデガァァァァ！」
右腕の肘から先を失った妖魔が、顔色を変えて喚き散らす。いや、実際には妖魔の顔色は緑でしかないのだが、とにかく慌てていることだけは伝わってきた。
「探し物はこれ？」
喚く妖魔の背後、数メートル先。
イブキは斬り落とした妖魔の右腕を足元に捨てながら、淡々と告げた。練り上

げた霊力は術者を超人にする。隙だらけの妖魔の腕を斬り落とし、掠め取って距離を取るくらいは、そう難しいことでもなかった。

「ウゥ、グゥゥゥゥッ！　コロス……コロシテヤル、オンナァァァァァァァァァ！」

妖魔は振り返り、元より凶悪な面相をさらに恐ろしいものへと変貌させてイブキを睨んだ。大の男も腰を抜かして小便をちびるような怒気。しかしイブキは眉ひとつ動かさず、小太刀の切っ先を妖魔に突き付けた。

「いいえ。今夜死ぬのはお前よ。……何人犯した？　何人食い殺した？　贖いなさい。その命で」

「――――ウオオオオオオッ！」

巨躯の怪物が残った左手で拳を作り、躍りかかってくるのを見ていた。

怒り狂った妖魔の突撃は、そう悪いものではなかった。フェイントのひとつもない単調な攻撃ではあるが、速度と勢いだけはある。並の退魔師であれば、怒りの気配も合わさって怯んでいたかもしれない。

イブキはわずかに引いた右足に体重を乗せ、妖魔が振り下ろしてくる拳に向け

て左手を伸ばした。そして指先が岩のような拳に触れた瞬間、練り上げていた霊力を解放する。

ぱんっ！

圧縮して放った霊力が風船のように弾け、衝撃が妖魔の拳を跳ね返した。

「グッ、オノレ、オンナァァァァァァッ――！」

目を見開き、体勢を崩す妖魔を見つめながら、イブキは小太刀を構えた。普通に構えるのとは少し違う。刀身を水平に保ちながら担ぐようにして肩の上に持ち上げる。そしてそこから上半身のバネを総動員し、さらに霊力によるブーストを加えた最大の膂力で、小太刀の切っ先を妖魔の顔面へと叩き込む！

グシャアッ！

小太刀の重量で出せるとは到底思えないような、重厚な破砕音が夜気を震わせた。続いてどさりと、深緑の巨体が地面に激突する。

絶命の瞬間、妖魔は声を上げなかった。頭部のみならず、胸から上を完全に吹き飛ばされたのだから当然だが。

崩撃閃。退魔一家黒鉄家に伝わる対妖魔剣術、その奥義のひとつである。型と

しては斬撃だがイブキの霊力が高過ぎるため、直撃を受けた者は『斬られる』ではなく『消し飛ぶ』ことになる。

「……任務完了」

頭と右腕のない死体を醒めた目で一瞥して、イブキは呟いた。

◇

「ふぅ……」

戦いの高揚が過ぎ去るのを待って、イブキは細く吐息を漏らした。それからコートを拾い上げ、スマートフォンを取り出して電話をかけた。ワンコールで通話状態になる。

『田崎だ。なにかトラブルか？』

スピーカーから聞こえてきたのは男の声だった。田崎。イブキが所属する退魔師の互助組織、通称『止水』の連絡エージェントだ。

「人型の妖魔を一体討伐したわ。幸いなことに被害者はなし。後片付けをお願い」

端的に報告する。イブキは強力な退魔師だが、逆にいえばそれだけの女だ。妖魔の死体や戦闘の痕跡を隠蔽する能力はない。なのでそういった事後処理に関しては、『止水』の裏方に任せるしかなかった。

「了解した。場所はＧＰＳで把握している。すぐに事後処理部隊を向かわせよう」

田崎は事務的な口調で応じた。いつものことだが無愛想なことこの上ない。もっとも、無愛想ということならイブキも似たようなものだ。なぜなら彼女の指は既に、通話を切るべく画面をタップしかけているのだから。

「……ところで」

と、不意にスピーカーから聞こえてきた言葉に、イブキはぱちくりと瞬きした。ところで。話を続けるための接続詞。なんでもない言葉ではあるが、この男から飛び出るのはひどく珍しい。

「……なに？」

「この件について、君の耳に入れておきたい情報がある」

「……聞きたくない、と言っても仕方ないんでしょうね。いいわ。言って」

嫌な予感を覚えつつ先を促す。田崎は即答した。

「白金（シロカネ）シオンが姿を消した。『堕姫（だつき）』になった可能性がある」
「……は？」
言葉の意味を理解するのに、しばしの間があった。白金シオン。姿を消した。『堕姫』になった。たったそれだけのことが、いまいち脳に染み渡ってこない。
だが数秒もすると、どうにか情報が飲み込めるようになった。
白金シオン。イブキと同い年、22歳の退魔師だ。実力はイブキとほぼ互角。つまりは『止水』の中でも最強クラスということだ。
そして『堕姫』とは、退魔師業界における裏切り者を意味する言葉だった。なんらかのかたちで妖魔に取り込まれ、悪性を植え付けられた『堕ちたる者』……。
（彼女ほどの退魔師が『堕姫』になった。それがもし事実なら……）
と、イブキは目を伏せ、深い黙考に入りかけた。だがその直後。
（――なにか、くる？）
見えたわけではなかった。聞こえたわけでも。ただ感じた。感じて、イブキはその場から跳（と）び退いた。刹那――
ドゴォ！

なにかが。なにかとてつもないエネルギーを持ったものが、一瞬前までイブキがいた場所に落下し、地面に激突して轟音を立てた。公園脇のアスファルトで舗装された道が砕け、土煙がもうもうとあたりに立ち込める。

（ッ、なにが……!?）

夢中で跳び退いたため着地をしくじり、ごろごろと地面を転がっていたイブキは、どうにか体勢を立て直して土煙を睨んだ。だが見えない。曇天で月明かりが望めず、また街灯すらろくにない郊外の公園は暗過ぎて、落ちてきたもののシルエットすら掴めなかった。

（……一度離れるべき？　それとも……）

小太刀を握り直す。と、その時――

さあああああああ……。

一陣の風が吹き、土煙を吹き散らした。と同時に雲が切れ、月明かりが闖入者（ちんにゅうしゃ）の姿を照らし出す。

――抉（えぐ）れた地面の真ん中に、美しい女が立っていた。

月明かりを受けてきらきらと煌めく髪は金色（こんじき）で、月光そのものを織ったかのよ

うに美しい。肌は褐色だが不思議と健康的な印象はなく、むしろ淫靡で艶めかしい雰囲気を滲ませている。漆黒のライダースーツに覆われた身体はほっそりとしていたが、か弱いとは微塵も思わなかった。あれは戦士の身体だ。鍛え抜かれ、余分を削ぎ落とされていることは一目でわかった。

「……」

イブキは押し黙り、立ち上がった――地面を転がったときについた砂を払うことも忘れて、目の前の『敵』をじっと睨む。

「――どうした。トラブルか？」

奇跡的に手放さなかったスマートフォンから、田崎の声が聞こえてくる。こんなときでもまだ冷静だった。非常事態だということは、音だけ聞いてもわかりそうなものだが。

「……ええ、トラブルよ。特大のね」

それだけ答え、通話を切ってスマートフォンを脇に放る。壊れるかもしれないが、命の危機に瀕しているいま、気にしている余裕はなかった。

「――はぁい。久しぶりね、黒鉄イブキ」

と、女が声をかけてきた。地面を一メートル近く抉った直後とは思えない、気安い態度だった。

「そうね。確かに久しぶりだわ。……白金シオン」

イブキはその名を、確かめるようにはっきりと呼んだ。すると彼女――白金シオンはくすりと微笑んでみせる。

「さすがね。それなりに使える個体をぶつけたつもりだったんだけど。……ま、あんたが相手じゃ誰でも一緒か」

言いながら、シオンは視線を脇に逸らした。見ているのは先ほどイブキが討った、妖魔の死体だろう。

「……その言い草だと、やっぱりあなたは……」

「なんだ、知ってたの。……そ。『堕姫』になったの、あたし」

シオンはあっさりと首肯(しゅこう)してみせた。それから自ら作ったクレーターを抜け出し、イブキの真正面に立つ。

「色々あってね。妖魔に堕とされたわ。でもまあ、なってみると案外気楽なものよ？」

実際気楽そうに肩などすくめて、シオンは笑みを浮かべた。イブキは小太刀を構えながら、改めてシオンの姿に目を凝らした。そしてふと気づく。

彼女が着ているのは漆黒のライダースーツなどではなかった。あれは神衣だ。また手には短剣が握られている。斬るよりも突くことに向いていそうな、細身のスティレットだった。

「……さてと。それじゃあ、始めよっか」

——と。シオンは唐突にそんなことを言って、静かに構えを取った。異様に低い姿勢の——まるで狩りを行おうとしている獣のような、しなやかで獰猛な構えだった。

（あれは……）

シオンの構えを見て、イブキは目を細めた。

——知っている。自分はあの構えを知っている。あれは奥義の構えだ。

そう察した瞬間、イブキもまた構えた。

事情はわからない。なぜシオンほどの退魔師が『堕姫』になったのか。そしてなぜ自分を襲うのか。わからないが、いますべきことだけは、身体が知ってくれ

ていた。

左足を前に、右足を後ろに。小太刀は刀身を水平に保ったまま肩に担ぎ、左手は相手を牽制するように掲げる。

そして――イブキの構えが完成するその瞬間を、待っていたかのように。

「殺ァァァッ！」

堕ちた退魔師が裂帛の気合いを吐き、地を蹴った。とてつもない初速で飛び出してくる。

まっすぐ――と見せかけているが、軌道がわずかに右に逸れている。フェイントの下準備の可能性があった。無意識に右を警戒させておいて、最後に左へ切り返すつもりなのか。イブキは右利きだ。小太刀も右手で握っている。死角を狙うならそれが妥当だろう。が――

（違う――フェイントは匂いだけ。一瞬でも速く切っ先を届かせた方が勝つ。これはそういう勝負。なら、シオンは必ず正面からくる！）

イブキは己の読みに、勝負の行方と命を預けた。シオンはもう目の前だ。地を這うような低い姿勢を維持したまま右にも左にも飛ばず、いっそ美しいほどにま

っすぐ突っ込んでくる。
「白金流絶招――鋼嚆矢（はがねこうし）！」
シオンが腕を鞭のようにしならせ、掬い上げるようにしてスティレットを突き出す。突進の勢いを全て乗せた、先の先を取る神速の刺突（つき）技。
「黒鉄流奥義――崩撃閃！」
対するイブキは上半身のバネを解放し、身体をねじりながら横薙ぎに小太刀を振るった。伸ばした左手までをデッドラインとし、その線に触れた者を即座に抹殺する、後の先を取る必殺剣。
技を放ってから、時間が引き延ばされたような感覚があった。いつまでも手応えが返ってこず、身体がダメージを感じることもない。勝ったのか負けたのか。答えがわからないもどかしい一瞬。ひたすらに積み重なって、やがて弾けた。
ごうっ！　重苦しい打撃音が、ほとんど同時にふたつ連なった。そしてさらに同時。最強最速の奥義を撃ち合ったふたりは、凄まじい勢いで後方へと吹き飛ばされた。
「かはっ……はあっ！」

数メートルか、あるいはもっとか。地面を派手に転がったイブキは、全身を襲う痛みと熱さに悶絶した。衝撃が体内で暴れ狂っている。息ができない。指先が痺(しび)れて、視界が白く明滅する。

意識が消し飛びそうだった。いや、実際に数秒は気絶していたかもしれない。そのまま寝ていられたら楽だったろうが、残念ながらそうはならなかった。

神衣の機能のひとつに、装着者の意識を強制的に回復させるというものがある。死亡のリスクを極力排除するための機能だが、こんなに苦しいならもう少し寝かせておいて欲しかった――そんなふうに毒づきながら、イブキは苦労して深呼吸をした。

それでようやく、自分の状態が把握できた。夜空が見える。つまり自分は仰向けで倒れている。

（起き上がらないと――）

それだけを念じる。だが身体は応えてくれなかった。できたのは頭を上げることだけ。そして――

「……さすが、ね。危うく……死ぬところだったわ……」

イブキは見た。見てしまった。口の端に血を滲ませながらも、イブキより先に立ち上がっている、白金シオンの姿を。

「……あ、ぐ……」

どうして――息が苦しくて、そう問いかけることもできなかった。だが意図そのものは伝わったらしく、シオンは呻くように答えた。

「技は……極まってたわ。『堕姫』になっていなければ、妖魔の力を得ていなければ死んでいた。……悔しいけど、人間として、退魔師としての性能はあんたの方が上だった」

喋りながら、シオンはどんどん回復しているようだった。既に歩けるようにすらなっている。これが『堕姫』の力なのか。

「でも……勝ちは勝ちよ」

シオンは言うと、手をこちらに向けてきた。と同時に突き出された掌の真ん中から、黒い影が伸びてくる。影はイブキの身体に絡みつき、やがて完全に覆い隠した。

（これは……妖気の塊？　だめ、視界が……それに手足も）

黒い妖気の繭に閉じ込められたイブキは、視界を塞がれた上に手足の自由も奪われてしまった。ダメージがなければ霊力を放出して脱出することもできただろうが、それはいまのイブキには望むべくもない無茶だ。

「行くわよ」

シオンはそんなイブキの身体を担ぎ上げ、歩き出した。足取りは安定している。もう人ひとりを軽々運べるほど回復したのかと、イブキは焦りを募らせた。

「待ち、なさい……私を、どこへ……」

問うが、シオンはもう答えようとはしなかった。無言で歩き続け、やがて身軽に走り始める。数分後には長い跳躍までしてみせた。

（まずいわ……かなり遠くに運ばれてる……！）

狭く暗い繭の中。不自由さと無力感に打ちひしがれながら、イブキは奥歯を噛みしめた――

◇

シオンの肩に担がれてから、三時間が経過した頃。ようやく高速で移動している感覚が止み、イブキは地面に下ろされた。

「着いたわ」

シオンがそう言うのと同時、イブキを包み込んでいた妖気の繭が解ける。真っ暗だった視界が晴れ、手足に対する強い拘束もなくなった。

「……っ」

最初に見えたのは、シオンの足だった――少し離れたところに立っている。その背後には壁があった。ただし壁といってもコンクリートや木材ではない。

それはいうなれば、『生きた壁』だった。鶏肉のような薄いピンク色で、常にうねうねと蠢いている。表面には謎の粘液が浮き出ていて、気色悪いことこの上ない。またそういった特徴は天井や床にも存在していた。というかこの場所の全てが、この『生きた壁』で構成されているようだ。

「ここ、は……」

「ここは肉牢。あたしのアジトのひとつで……あんたが『堕姫』に生まれ変わる場所よ」

シオンは言うと、ぱちんと指を鳴らした。すると周囲の肉壁（にくへき）がぬちゃあ……と気味の悪い音を立てて裂け、その隙間からなにか細長いものが伸びてくる。

植物の蔓にも似たその物体はずるべたと床を這って進むと、イブキの腕と足に絡みついてきた。

（なに、これ……!?　振り解けない……！）

イブキの手足に絡みついたのは、いわゆる触手だった。壁や天井と同じく粘液を纏っていて、非常に気味が悪い。ただ見た目と違ってかなりのパワーがあるようで、イブキは後ろ手に縛りあげられ、身動きが取れなくなった。

「無駄よ。普段のあんたならともかく、ダメージの残るその身体じゃ、その触手は振り解けない。……経験者だからね。そのくらいはわかる」

虜囚（りょしゅう）めいた体勢を強要されているイブキに、シオンが皮肉気な顔で告げた。

「先月の頭。あたしはとある任務の最中、罠にかかって妖魔に調教され、『堕姫』になったの。そのときは死んだ方がマシだと思ってたけど、なってみたら案外快適でね。せっかくだからあんたも仲間にしてあげるわ。『止水』で唯一あたしと互角だったあんたなら、いい『堕姫』になるでしょうし……」

言いながら、シオンはイブキの正面に立った。そのまま、どこか艶っぽい声で囁いてくる。

「――犯してあげる。侵してあげる。あたしが受けた屈辱を、あんたにも味わわせてあげるわ」

「……無駄よ。神衣がある限り、私の身体に妖気を注ぐことはできない」

身体は言うことを聞かない。だがせめて心と言葉には刃を秘めていようと、イブキは鋭く言い返した。だがシオンは気にした様子もなく、余裕の笑みを浮かべた。

「確かに神衣は強力な防具。でもしょせんはシステムにすぎない。だから穴がある。『攻撃と見なされない程度の刺激』なら、簡単に素通りする」

シオンはそっとイブキの身体を抱擁すると、豊満な尻肉を鷲掴みにした。そのままいやらしい手つきでゆっくりと揉みしだいてくる。シオンの手はかぎ爪のような手甲に覆われているが、神衣に守られているお陰で痛みはなかった。ただし性的な場所に触れられている、屈辱的な感覚だけは克明に感じた。

「神衣にはもうひとつ弱点がある。出力が装着者の精神状態に依存している。心

を強く持っている間は無敵の鎧だけれど、心が折れてしまえば、ちょっと頑丈なだけの布切れに成り下がる。ろくに抵抗できないこの状況で、あんたはいつまで耐えられるかしら？」

つぅ……。シオンの手がイブキの股間に向かった。弄ぶ（もてあそ）ようにじっくりと腹を撫でながら、じわじわと下腹部に近づいてくる。

「ん、んぅ……」

もどかしい刺激が少しずつ恥ずかしい場所に迫ってくる感覚は、いたくイブキを辱めた。だがイブキは顔を背け、冷たく囁いた。

「……勝手にすればいいわ。でも、私は堕ちない。なにをされてもね……」

「あら、そう？　ならお言葉に甘えて、好きにさせてもらうわ」

シオンは面白がるように言って、こちらの首筋に舌を這わせてきた。

ぬるっ……ちゅる、つつぅ……

熱く柔らかい舌の感触と、温かな吐息が首筋を這い回る。すると肌が粟立ち、背筋にぞくぞくと甘い痺れが走った。

「やめ……なさい。こんな、女同士で……んんっ」

「別にいいじゃない。女同士っていうのも、たまにはいいものよ？」
などと言いながら、シオンは鎖骨を甘噛(あまが)みし、ちろちろと舌を這わせた。それからすっと身を引いて、イブキの背後に回る。
「腕が邪魔ね」
シオンが指を鳴らすと触手が蠢き、イブキの腕を上方へと引き上げた。後ろ手から万歳の格好に変えられたかたちだ。
「ふふ。これで好きに触れるわ」
堕ちた退魔師は妖しく笑うと、背後からイブキを抱擁した。そのまま右手で乳房を揉み、左手で股間をもぞもぞと弄(いじ)ってくる。
「……ん、くぅ……っ」
シオンの愛撫は悔しいが達者だった。乳房を揉む手つきは手甲を着けているとは思えないほど繊細で、右胸に心地よい揉捏(じゅうねつ)の刺激がじんわりと染み入ってくる。股間への愛撫も同様だった。手甲の爪で割れ目をなぞったかと思えば、掌を使って股間全体を優しく揉んできたりもする。
「……っ。ん、んんっ。う、く……っ」

神衣越しの執拗な愛撫に、腰がぴくりと反応する。だが、声だけは我慢した。イブキにもプライドというものがある。戦って負けた上に敵の愛撫でいやらしい声を漏らすなど、あってはならないことだった。

「声を我慢してるの？　可愛い抵抗ね。……じゃあ、こういうのはどう？」

愉悦の滲む声で囁きながら、シオンは手甲を外してみせた。細く長い指が姿を見せる。

彼女はその整った指でイブキの太腿を――神衣がレオタード状であるがゆえ、唯一素肌を晒している部分を、くすぐるように撫でた。

白くむちむちとした内腿の上を、褐色の指がもぞもぞと這い回る。すると――

「あふっ、はん、くぅんっ！」

くすぐったさに耐え切れず、イブキは声を漏らしてしまった。笑い声とも喘ぎ声ともつかない曖昧な、しかしどこか甘い声だった。

「あら……思ったよりいい反応ね。くすぐったいのは苦手？」

面白がるように言って、シオンはさらに指を蠢かせた。今度は『くすぐるように』ではなく、完全にくすぐるつもりの指の動きだ。

「んん――っ、んあ、はっ！　くふっ、あ、うぅぅっ」
執拗なくすぐり責めに対し、イブキは口を固く閉ざすことで応じた。が、内腿で膨れ上がる猛烈なくすぐったさはいかんともし難く、食い縛った歯の隙間から息が漏れ出るのは止められなかった。
「本当にいい反応。かなり苦手みたいね。……なら、徹底的にやりましょうか」
イブキの反応に気を良くしたらしいシオンは、またもぱちんと指を鳴らした。それが意味することはもう察しがついている。あれは触手への合図だ。
ぐちゅ、ずるる……っ。
肉の壁が裂け、再び触手が現れる。ただし今度の触手は先ほどの――つまりイブキの腕を拘束しているものとは、形状が違っていた。先端に柔らかそうな毛が無数に生えている。まるで刷毛（はけ）のようだ。
「……っ」
刷毛触手がうぞうぞと近づいてくるのに、イブキは喉の奥を引きつらせた。シンプルに気味が悪いというのもあるが、先端の毛がいかにも『くすぐったそう』なのが、イブキに嫌悪感を抱かせていた。

「……っ。くすぐりなんて子供騙しで、私をどうにかできるとでも？　馬鹿にしないで」
「子供騙しかどうかはこのあとわかるわ。……知ってる？　くすぐりって、昔は拷問にも使われてたらしいわよ」
怖気を払うつもりで強い言葉を使ったが、シオンは涼しい顔で受け流してみせた。そしてそんなやり取りの間にも、触手は淡々とイブキににじり寄っていた。
「う、あ……っ」
刷毛触手はまずイブキの内腿に絡みつき、先端の毛で優しく撫でてきた。するとぞわ……と、イブキの全身が総毛立つ。
刷毛触手の毛は濡れていた。恐らく肉壁や他の触手が纏っているのと同様の粘液だ。それが肌にべったりと張り付く感触は、筆舌に尽くし難いほどにおぞましい。
だが本番はここからだった。粘液を塗りたくられた内腿の上を触手が撫で擦ると、とてつもないくすぐったさがイブキの太腿を蹂躙（じゅうりん）した。
「ひっ……はうっ、くひぃっ。あ、あは……あはははっ」

BEAT VALKYRIE IXBEAL
超昂神騎 エクシール 02
～双翼、魔悦調教～
THE COMIC
いざ、決戦の舞台へ！
いよいよ最終決戦だ ふたりとも覚悟はいいか？
はい
当然
そろそろどちらを妃としてお迎えになるか
お決めになっては如何かと
……くそ ベゼルのアホめ
いらんこと言うから揺らいできたじゃねえか
ったくこれもある意味死亡フラグなんだがな…
？
これが終わったら俺は色々なことに答えを出すつもりでいる
原作／アリスソフト
漫画／SHUKO
原案／峰崎龍之介

たとえば……
ふたりの気持ちに
対してどう報いるか
とかな

それって…

コクッ

だから
勝ってくれ

ふたり揃って
帰って来てくれ

どっちが欠けても
俺は嫌だ

なんなら
泣くかもしれない

ふぅん

センパイの
泣き顔かぁ

ちょっと興味あるね

おい

…でも

…ええ
それがどんな答えであっても私は知りたい
そのためにも必ず生きて帰ります
…そうか
ならいっちょ最後の号令といくか
アゼルは強い
これまでのどんな敵よりもな
だが変わらない俺たちがすべきことは
これまでとなにひとつ変わりはしない
出撃 見敵 誅滅
神騎がすべき戦いをいま一度繰り返せ！
了解！
ホーリーアムド！ヴァルキュリエエクシール！
ホーリーアムド！ヴァルキュリエキリエル！

…来たか
議論の余地はないという顔だな
討つべき敵…堕天使軍団グリゴリが長堕天使王アゼルです
人間から知性を奪って獣同然に貶めるなんてことさせないよ
…ええあなたはもうアズエル様ではない
私たち神騎…ううん『超昂戦士』がいる限りはね！

よかろう

ならば私も余計な能書きは口にしない

——来い

ゴゴゴ

ドーン・パニッシャー！

ゴウッ

アブソリュート・ストライク！

ばッッ
なあああっ
くらいんっ
ニヤッ
ガッ
!!
スチャッ
くっ…

なるほど悪くない

だが渾身の一撃がこの程度では底は知れたな

バシッ

カッ

きゃあっ

ぐあっ

ドッ

ガガガッ

カッ

ゴゴゴゴ

ミシッ

ミシッ

ドゥ
ゴッ
…うぅ
キリエル！

キリエル
しっかりして
安心しろ
死んではいない
だがこれで
わかっただろう
ビクッ
全神騎中最大の聖力と
魔王エイダムの魔力
これらを
兼ね備える
私に対し
お前たちは
エイダムからの
魔力供給のみが頼りだ
元より同じ土俵に
立ってすらいない
この結果は必然だ
はー
ク…
はー
くっ
…まだ……私は
負けて……
ない…
グラ…

ドサ…
あれ…あたしアゼルと戦って…
ここは…？
…
ガチャ
ガチャ
捕まったみたいだね
天井に繋がっている…
魔力も切れている今の私には逃げ出すのは無理か…
ガチャッ

！
シェムール！
おはようキリエル
ガラ
ガラッ
よく眠れたかしら？
ぐぃっ
なんのつもり？
キッ
エクシールは？
あなたに質問する
権利なんてないわ
コツ
コツ
スッ

先日の返礼をさせてもらうわ

顔に傷をつけられた屈辱

万倍にして返してあげる

ご主人様に仇を討ってもらって

動けなくなった相手に復讐ってわけ？

情けないね

ふふ 生意気ね

でも粋がっていられるのはいまのうちだけよ

予言するわ

あなたは私に這いつくばって懇願することになる

ふざけるな

誰がそんな——

ドクンッ

ふふ
あなたが眠っている間に
特製の媚薬を投与しておいたの
はぁ
はぁ
はぁ
ブルルッ
ドクンッ
ドクンッ
おっぱいの中が…脈打ってる…
うあっ!?
あくぅ…
なにこれ身体が…熱い……!
ドクンッ
精々喘ぎ悶えて私を愉しませなさい
ここの程度…どうってことない…!
そう？なら試してあげるわ
たっぷりとね
くちゅ
くちゅ
くちゅ
くちゅん♡

効果のほどは…

どうかしら？

あっ

あっ♥

あっ

あぁぃぃ♥

うそ…ちょっと触られただけなのに

こんなに気持ちいいなんて……！

あらもうこんなに濡らしているのね

ふふもっと辛くしてあげる

うっ
レロ
レロ
やめろ…
ちゅ
ちゅ
ちゅ
触るな
ギュ
あっ！
ひいあ♥
ビクッ
ビクッ
あらつれないことを言うわりには随分と可愛い声で鳴くのね
ビクッ
うるさい 黙れ…！
んふふ まだまだ威勢がいいわね
ズッ
ズッ
あっ

奏でるは背徳のハーモニー！！
甘美なる陶酔の波に、処女は溺れ――

武装聖女 アルトレッタ
～淫らなる浄化～

小説 NOVEL／黒名ユウ（くろな）
挿絵 ILLUSTRATION／PINTA

陽が沈むとグリードシティは禍々(まがまが)しく煙り出す。
夜風に運ばれた霧が享楽の街の至る所に輝くネオンによって、清浄な月光色から毒々しい七色に染められてしまうからだ。
妖しい薄もやは猥雑な熱を孕(はら)み、今宵の不埒な成り行きを期待させる。
落書きだらけの壁を背にして立ち連なる娼婦。そして女たちを品定めしながらのろのろと車を走らせる男たち。ここには誰もが一夜の背徳を求めて集うのだ。
そして、街の中心にあるクラブ『パンプキン』では今夜も若い男女が腰を抱き合い淫らに身体をくねらせて躍り狂っていた。
ミラーボールの乱反射と熱狂を煽る音楽の鳴り響くダンスホールには、暗黙の了解を得た者同士がすぐにでもその先の行為に及ぶための部屋も用意されている。
そんなプレイルームの一室の、締めきられぬまま僅(わず)かに開いた扉の向こうでは薄闇(うすやみ)の中、少女一人に数人の男たちが群がっていた。
「や、やめて……！　私、こんなつもりじゃ……」
「へっ、男漁りに来たんだろうが、え？　エロい格好しやがってよ」
抗(あらが)う少女の服装はホルターネックのノースリーブに超ミニの派手なスカート。

男たちの言う通り大胆に肌を露出させた服装だ。しかし、よくよく見れば化粧の下には、まだあどけなさが残っている。どうやら少し背伸びをしたかっただけの不良少女のようだ。

この街の悪徳の雰囲気に感化されウサを晴らしに足を向けたのか。それとも、ちょっとスリルを味わって友人たちに自慢したかっただけなのかもしれない。

だが、もしそうだとしても、この欲望の街ではルール違反は彼女のほうなのだ。

「嫌ぁっ！　放してぇ……」

「手間とらせんなって、すぐに天国見せてやるからよ……」

男が少女のスカートをたくし上げてショーツをグイと引き上げる。

「ああぅっ……」

「ククッ、嫌がってる割にゃあ、甘ったるい声出すじゃねえか」

握り締められたクロッチ部分が食い込み、下着からいやらしくはみ出る可憐な陰唇。その奥へと這い込んだ指が熱を帯びた淫蜜を掻き零す。

ぬちゅ……ぐちゃ……じゅっぷ……

「駄目ぇ……やっ……ああっ、んはあ……ああぅっ……んっ、んっ……」

抗う力を失い、快感に悶えるその反応に気を良くすると男たちは少女の身体を組み敷き、着ているものを次々と剥(は)ぎだした。

「見ろよこの可愛らしいおっぱい！　ふるふるしちゃってるぜ、たまんねえな！」

「ほらほら、脚を広げろよ、もっと腰を突き出すんだよ！」

そして、次々と突きつけられるペニス。それは信じられないほどの巨根だった。息を呑む少女に男たちがニヤニヤと下卑た笑みを向ける。

「どういうわけだか、ここ最近、チンポがこんなにデカくなっちまってよう！そのせいか、ヤッてもヤッてもヤリ足りねえ。挿(い)れられた女たちもヒーヒー言いやがるからますますやめられねえ、お前も貫かれたらそんな顔じゃいられんぜ？」

「いっ、嫌あああああぁぁあっ！」

ドズウッ！

通常の倍はあろうかという人間離れした肉棒が、濡れた縦筋目掛けて突き立てられようとしたそのとき――

男の胸から鋭利な矢の切っ先が飛び出した。

「貫かれるのはあなたたちよ……」

白目を剥いて倒れた陵辱者の背後に修道服姿の美女が立っていた。
凛とした顔つきは大人びているものの不良少女とさほど変わらぬ年頃。しかし、その身体は十分に成熟している。豊かに膨らんだ胸は清楚な修道服をはち切れんばかりにしており、スカートのスリットから生気に満ちた若々しい太腿が覗く。
彼女の腕にはクロスボウが装着されていた。矢はそこから放たれたのだ。
「てめぇ、何者だ!?」
「我こそは武装聖女アルトレッタ……淫らなる魔を浄化する者」
厳(おごそ)かな名乗りと共に、男たちに向かって武装が突きつけられる。
「悪魔ぁ？　俺たちのどこが……」
「なんかやべぇぞ、この女」
「かっ、かまうもんか、やっちまえ！」
彼女の持つ尋常ならざる空気に一瞬怯(ひる)んだ男たちが気を取り直して襲い掛かる。
しかし、アルトレッタは動じることなくふわりと身を沈めた。金髪が黒い頭巾と共に宙に舞う。
「無駄なことを！」

言い放つなりボウガンから霊気が噴き上がり、無数の矢となって撃ち出された。
自在に飛び交う雷槌の如き閃きに貫かれ、男たちがバタバタ倒れる。叫ぶ暇も与えぬとはこのことだ。そして、彼女の口から小さな祈りの言葉が唱えられると、そこで初めて悲鳴が上がった。
「……浄化！」
「ぐうぎゃあああああぁぁっ！」
一斉にのたうち回る男たちの身体から幽霊のようなものが離脱する。
「姿を現したわね、淫魔ども……とどめよ！」
放たれた矢は肉体ではなく、飛び出して来た幽体のほうに突き刺さっていた。
それが四散爆裂し、悍(おぞ)ましい悲鳴を上げて塵と化す。
静けさが戻ると、彼女は少女の傍らに膝をつき安否を確かめた。
「気絶しているだけみたい。でも、このままにしておけないわね……」
グリードシティから川ひとつ隔てた所にあるオメラスの修道院は神聖で荘厳な雰囲気に満ちており、背徳の街とは対照的だった。

その大聖堂で、帰投したアルトレッタを呼び止めた三人組がいた。
「あなた、グリードシティのふしだら女をここに連れ込んだそうね」
皆、同じ修道服に身を包んでいる。声をかけたのはツインテールにした提髪(さげがみ)を頭巾から覗かせた小柄な少女だった。彼女は剣を手にしており、後ろの二人もそれぞれ斧、そして槍を装備している。
剣の少女は名をラケル、後ろの二人はパラスとユーディットという。三人とも武装聖女と呼ばれる者たちだ。いわばアルトレッタの同僚である。
だが、彼女たちの険しい目つきは仲間のものとは思えぬものだった。
お馴染みの難癖にアルトレッタは内心ため息をつくも表には出さずに答える。
「襲われて気を失っていたのよ。安全な場所で休ませないと。それに手当も……」
「あんな場所に遊びに行くような女を、この神聖な安息所に!? 信じられない!」
呆れたように天を仰いでラケルが言い募る。
「それに、その女が淫魔化していないって保証はあるの?」
色欲が心の中で育って生まれる化け物である淫魔は、やがて宿主の人間の魂を乗っ取り、肉体をも性的に変貌(へんぼう)させていく。

淫魔化した者は異性を誘い、あるいは襲って堕落させ、その犠牲者はまた――と、無限に続くそのループはおよそ人類の歴史と同じだけ続いていた。

淫魔に対抗できるのは武装十字だけだ。

世にあまねく広まるオメラスの教え。その信徒の中でも敬虔（けいけん）さと霊力を備え、純粋な心を持つ少女だけが扱える聖具、武装十字は強制的に人間の魂を浄化する。

先ほどの男たちも、矢に魂を浄化されて、その中に潜むことができなくなった淫魔が肉体から逃げ出したというわけだ。

「今から行ってこの剣で浄化してやろうかしら」

鼻白むラケルのあまりな言いように、アルトレッタが思わず言い返そうとしたそのとき、聖堂の大階段の上からよく通る声がした。

「浄化は劇薬のようなもの。魂が汚れきっていない者に使えば心を壊してしまうこともありますよ」

現れたのは僧衣を纏（まと）った老爺。四人の武装聖女たちは一斉に跪（ひざまず）く。

でっぷりと太った身体を重たそうにして階段の上の祭祀の椅子に座しながらも、優しい微笑みを絶やさない彼こそ、このオメラスの最高位である大僧正（だいそうじょう）であった。

「今夜もご苦労様。皆さんのおかげで正しき人々は安心して夜を過ごせるのです……さあ、聖具を浄化しましょう」

大僧正は階段を下りると、聖堂の中央に置かれた大きな聖杯へと歩み寄った。そして、四人が差し出した武装十字を受け取り、杯の中の聖水に浸して祈祷（きとう）する。すると、黒ずんでいたそれぞれの武器が再びまばゆい輝きを取り戻していく。付着していた淫魔たちの瘴気が清められたのだ。

武装浄化の儀式を済ませると、大僧正はアルトレッタに微笑みかけた。

「心配はいりません、安息所はレジーナに任せてあります。もし本人が望むなら、少しの間ここでオメラスの教えを学べるようにも計らいましょう」

「ありがとうございます！　大僧正様」

アルトレッタは顔を明るくして礼を言い、大僧正を見送った。しかし、ラケルたちは面白くなさそうだ。

「出来損ないのくせに……。だいたい淫魔と戦う者なのに、あのいやらしい身体つきはなんなの？　媚びるみたいに見せびらかして！」

ラケルがクサしているのは胸の大きさのことだ。アルトレッタと同じ十七歳の

彼女だったが、体形のほうはまだまだ未成熟で子供のように見える。
他の二人も同調して意地悪な冗談を口にする。
「あの女の子をここに連れて来たのって、もしかして……だからかしら」
「やだ、じゃあ、二人きりにしたら危ないんじゃない？」
わざとらしく眼鏡をかけ直す仕草でパラスが言えば、コケティッシュな口元に手を添えてユーディットが忍び笑いを隠す。
アルトレッタには彼女たちが小声で何を言い交わしているかはわかっていた。だが、言い返すことはしない。仲間たちにとって自分は異質なのだ。
（それだけじゃない。清く正しいオメラスの教えを守る者にとっても、私は……）
黙して語らぬまま、彼女は地下にある自室へと引き取った。

彼女の部屋は異様であった。灯りは古めかしいランタンだけ、そして、寝台がない。その他の家具もない。
あるのは――壁に沿ってぶら下がる幾本もの鎖だけだ。
寝室というよりは牢獄と言ったほうがふさわしい。

十年前、七つのときに修道院に連れてこられて以来、アルトレッタはこの鎖に身を繋いで夜を過ごしてきた。壁には少女の身長に合わせ枷の位置を徐々に高くしていった取りつけ孔の痕跡が残っていた。

冷たい壁に身を添わせ、一本、また一本と己を拘束していくと優美なくびれや膨らみに絡みつく鎖が成熟した肉体をいっそう艶(なま)めかしく見せる。

「ん……う、ううっ、ああ……駄目……今夜は始まるのが早い……」

伏せた睫毛(まつげ)を切なげに震わせ、目を閉じる彼女の唇から妖しい呻(うめ)き声が漏れる。

出来損ない――ラケルの声が心を抉(えぐ)る。

「ううっ……」

下腹が――女の象徴である、あの部分がねっとりと疼(うず)き始める。

(違う。私は……あ、ああっ、なのに、なのに……)

身の内にくすぶる淫欲。その熱。

否定しようとすればするほど、とめどなく湧き出る悩ましい情動。

「戒めの鎖をいつもより多くしなくては……」

だが、それでも淫熱(いんねつ)はますます高まり、身体は幾度となく痙攣(けいれん)した。

そこへコツコツと石の階段を下りる足音がして扉が開いた。
「ああ、可哀そうに。今夜は鎖の音が外から聞こえるほど……無理をしましたね」
入って来たのはレジーナだった。武装聖女たちの着ている戦闘用とは違って、一般の修道女と同じ、ごく普通の修道服を身に纏っている。歳はアルトレッタの七つ上、二十四歳だ。
若いのと、母性的な優しい顔立ちのせいでとてもそうは見えないが、大僧正の信頼厚き彼女はオメラスの本拠地であるこの聖地を取りまとめる修道院長だ。
「ううっ、レジーナ様、私は本当に武装聖女を名乗っても良いのでしょうか？この身体は何故、このように淫らな反応を……心では決して望んでいないのに、淫魔たちと戦えば戦うほど酷くなるのです……」
甘い疼きに苦しみながら、アルトレッタは胸の内を吐露した。
彼女が弱音を吐くのはレジーナの前だけだった。
だらしないとも恥ずかしいとも思う。どうして自分だけがこうなのか。
それは、もしかすると生い立ちに関係があるのかもしれなかった。
彼女の故郷はすでにない。

都会から離れた山里の隔絶した小村が淫魔によって乗っ取られたのだ。
当時まだ幼かったアルトレッタの記憶は定かではなかったが――彼女を除いたすべての村人が淫魔となり、オメラスの信徒たちによって助け出されたときには、すでに父母までもが娘には目もくれず乱交にふけっている有り様だったという。
天涯孤独となった彼女をこの修道院に迎え入れて親身に世話をしてくれたのがレジーナだ。いつの頃だか――きっと、修道院に来てすぐのことだろう、自分をぎゅっと抱き締めてくれた胸の温もりは今も憶えている。
彼女は唯一の心許せる相手だった。
アルトレッタが何故、淫魔にされずに無事でいられたのかは定かではない。
しかし、この事実がラケルたちから「出来損ない」と侮蔑される原因だった。
その苦しみを感じ取り、若き修道院長が憐(あわ)れみに顔を歪める。
「ああ、オメラスの教えよ……正しき者の守り手である彼女にどうか救いを」
そう言って、手にした油壺から悶える聖女の身体へと聖水を垂らしていく。
聖水はやがて、アルトレッタの修道服にすっかりとしみ込み、身体のラインにぴったりと布地を張りつかせる。

それはとても淫靡な眺めだった。

浮き立つ乳首は尖りきり、裸体よりもいやらしく存在を主張する。臀部の震えまでもが隠れることなく露わとなる。

「んっ、ううっ……あ、あ……レジーナ様の……指ぃ……んああっ！」

服に手を這い込まされて聖水が直に塗られ始めると、喘ぎは抑えがたいものになった。声を漏らしてはいけないと思えば思うほど皮膚は敏感に燃え上がって、囁かれる言葉すらも耳朶を打つ快感となってしまう。

「堪えるのよ……聖水が安らかな心を取り戻してくれるまで」

「ですが、このように肉体が苛まされるのは私だけ。ラケルたちは私を半淫魔の出来損ないに違いないと……く、うっ」

「そのような存在はないわ。淫魔は淫魔、人は人よ。十歳を過ぎてから武装聖女となったのはあなただけ……この苦しみはきっとそれが原因。安心なさいな」

慰めてレジーナが頬を撫でてくれる。が、それもまた魅惑の愛撫に感じられる。

「んああっ……」

「あなたなら必ず克服できるわ。大僧正様も、そう信じていらっしゃるのだから」

今や世界のほとんどの人々が従うオメラスの教えは、かつて聖母から産まれた神の子によって伝えられたものだという。

正しき教えと邪悪との戦いはそれ以来、幾重もの世紀をまたいで続いてきた。ときに受難があり、迫害があった。しかしついに、はびこる悪徳はただの一か所、グリードシティを残すのみにまで迫った。

この最後の戦いの中で、武装聖女の中から新たな聖母が見いだされると教義には伝承されている。

アルトレッタは自分が聖母であるとは思えなかったが、教えを守り正しき世を作るためならこの苦しみに耐え抜く覚悟があった。

自分のように、あの少女のように、人々が姦淫に苦しめられることなき新しい時代のために――

だが、こうして夜になると疼きのせいで心が揺らぐ。

（ああ、レジーナ様……もっと、う、ううっ……もっと奥まで……どうか……）

胸の谷間を撫ぜていくだけの軽い往復、それがもどかしい。

その次は服の上から乳房の下側をゆっくりとなぞるように。

（う……ううっ、もっと、もっと……激しく……！）

切なさが身体の中で暴れ狂い、鎖がじゃらじゃらと音を立てる。

触れて欲しい。この甘い陶酔（とうすい）の先に待つ気持ち良さを教えて欲しい。

欲望を口に出すわけにはいかない。そんなことを口走れば、姉とも母とも慕うレジーナを失望させてしまうだろう。だからいつも、疼き疲れて眠るまで、ただひたすらに耐えるのだった。

だが、今夜は違った。レジーナの指先の通り過ぎたあとがやけに火照る。

行為自体は毎夜と変わらないのにどうしたことか。

「あ、ああっ……だ、駄目です。おかしくなる……敏感に、敏感になっているんです！　凄く熱くて、んぅっ……んはあっ！　こっ、このままじゃ……」

アルトレッタは息を荒らげて懇願の眼差しを送った。

手を止めて欲しいのか続けて欲しいのか、自分でももうわからない。清純なる修道院長には、このように淫らな衝動など想像もつかないだろう。

聖水の行はそのまま進み、残された最後、女の秘所を清浄にすべくショーツを濡らしていく。

「駄目です、レジーナ様っ、ああ、そこはっ……ううっ……そんな風に触れられたら……あああああ、ああっ……私っ、あっ！　くぅぅっ……」

何かが下腹の深くから込み上げる。

「溢(あふ)れるっ……溢れてくる！　何かが、あああっ！　駄目……耐えられない……んあああ、ああっ、ああ。あああぁあああぁぁぁぁ……っ！」

そして、霊力を放つとき以上の肉奥の爆発が起き、頭の中が真っ白になった。

ぽたっ、びちゃびちゃびちゃっ……びしゃあああっ！

だらしなく広げきった両脚のつけ根から足元まで、途切れることなく真っ直ぐ垂れ落ちるのは注がれる聖水なのか。

鳴り響く鎖と共にアルトレッタの身体が波打ち、崩れ折れる。

「眠りなさい……安息はまもなく訪れます」

レジーナは気を失った彼女の額に口づけをすると、哀れな聖女が自分で解いてしまわないよう、最後の手枷に錠をして寝所を後にした。

四人の武装聖女の中から聖母となる者が現れる――

この伝承は人々にとっては希望であったが、候補者とされた者たちにとってはどうだったであろうか？

功名心に足をすくわれたのはラケルだった。

ある夜、異様に強大な淫魔の気配を感じてアルトレッタが駆けつけたときには、すでに彼女は抜き差しならぬ状況に陥っていた。

「この薄汚れた手を放しなさい！　私を誰だと思っているの！」

人気（ひとけ）のない裏通りで首根を掴（つか）まれて高々と持ち上げられたラケルの足元には、彼女の剣が転がっていた。

「くへへへへ、薄汚れたとはご挨拶だな。さすがは街の掃除屋気取りだ。だが、俺たちも馬鹿じゃねえ。大して育ちもしていない仲間たちを無理やり狩りまくりやがって。そのまま宿主の中に留まっていたら危ないって嫌でも気づくぜ」

淫魔がうそぶく。

「だから、集合したのさ……一人一人は弱くても街中の淫魔が集まればこの通り」

普通より一回りも大きな淫魔の巨体にラケルはもがくばかりだ。

「くっ、こんないかがわしい街の住民は片っ端から粛清すべきなのよ！」

「それをしたから俺が生まれたんだがな。まあ、こうなっちまったら武装聖女も形無しだ。一緒にヨガリ狂おうぜぇ」
股間を激しく勃起させて巨体の淫魔が笑う。
「うう……私は正しき教えの守り手……なのよ……誰が悪の仲間になんか……」
「心配するな、快楽こそが正義さ！　それをわからせてやろう！」
「待ちなさい！」
身を潜めて様子を窺っていたアルトレッタは二人の前に姿を現した。
弓には霊気の矢がすでに装填されている。しかし――
「もう一匹お出ましか。歓迎するぞ、パーティは一人でも多いほうが楽しいしな」
戯言には付き合わず、対峙したままジリジリと距離を詰めるその動きは鈍い。
（くっ……やりにくいわ）
こんな相手は初めてだった。そして、なによりラケルの身体が邪魔だ。淫魔は軽口を叩きながらも、前でも後ろでも彼女を盾として振れるよう構えていた。
「何をしてるのよ！　早くこいつを撃ちなさい！」
「おいおい、お前に当たっちまうから撃てないでいるんだろうがよ」

ラケルが喚(わめ)き、逆に淫魔にいなされる。
その通りだ。淫らな心を持たない者に武装十字が命中すれば劇薬にもなり得る。
大僧正の言葉が頭に浮かび、アルトレッタは矢を放てないでいた。
しかし、だからといって見捨てるわけにはいかない。どうすれば？
逡巡(しゅんじゅん)するうちに、淫魔は長い舌をラケルの修道服の中に潜り込ませる。
「こ、このっ、汚らわ……ああっ、んあああっ、ふあっ……なによこれぇっ……」
舌のまさぐりが、行き過ぎた厳格さを持つ少女の肉体から性感を呼び覚ます。
（このままではラケルまで淫魔になってしまう！）
アルトレッタは決断を迫られ、苦渋に眉を歪めて歯を食いしばった。
戦うことができないのならば他の勝機に望みを賭けるしかない。
「彼女を解放しなさい！　そうしたら……」
言いよどむ。しかし、覚悟を決めてその先を続ける。
「……そうしたら、私があなたの望み通りのことをなんでも……するわ」
「ほう？」
淫魔は興味を惹かれたようだった。

より官能的にそそられる行為を好む。それが淫魔の性分だ――アルトレッタはそこに賭けたのだ。

（私なら耐えられる……今までだってずっとそうだったのだから）

そして、ラケルが解放されればパラスとユーディットを呼んで来てくれる。

「なっ、何を言っているの、この恥知らず！　さてはやっぱり……んああっ！」

憤るラケルを黙らせて淫魔が好色な笑みを浮かべる。

「いいだろう……キャンキャン煩いだけのこいつより、お前のほうが遊べそうだ」

取引成立だった。

淫魔は約束を守り、ラケルは解放された。しかし、さすがにその場でどうこうしようとはせず、隠れ家らしき街外れの邸宅へとアルトレッタは連れ去られた。

巨体だった淫魔は、この隠れ家に戻った途端にバラバラに分離し、集合体からそれぞれ元の姿に還った。普通の人間と同じ体格。それに見れば、どれも幽体が薄く、いつも相手にしている淫魔とは比べ物にならない雑魚（ざこ）以下の存在だ。

（こんなハンパな連中までラケルは見境なしに標的にしていたんだわ）

淫魔と呼ぶに値しないような色欲を無理やりに刈り取られた人々はどうなってしまったのだろう？　これらの存在が罪ならば、毎夜身体を疼かせる自分は……。

心揺れるアルトレッタに最初の命令が下される。

「それではまず……お前の美しい髪を見せてもらおうか」

「……わかったわ」

頭巾を外すと流れるような金色（こんじき）の髪が零れ落ち、その周りに淫魔たちが群がる。

武装解除されたアルトレッタには身を守る術（すべ）は残っていない。

どれだけ気丈でいられるか。淫らな心に屈さぬよう自分を強く持たなければ。

「極上の艶だな……それに、いい匂いだ」

「さらさらしてて気持ちいいぜ……お前、なんで修道女なんかやってんだ」

淫魔たちは余裕たっぷりに金色の髪を房にして手触りと香りを楽しみ始めた。

しかし、他愛もないような接触ですら強い快楽を与えられるのが彼らでもある。

「ううっ……」

髪を滑る指先の動きに反応して身体がピクッと震えてしまう。

「どうした？　もう感じているのか？」

（挑発に乗っては駄目……こいつらを喜ばせるだけよ）
「何故、答えない？　なんでも言う事を聞くはずだろ？　くくくっ、まあいい。次は自分で服をはだけろ。そのデカイ胸をじっくり鑑賞させてもらおうか」
「……！」
誰かに見せるために服を脱いだ経験などない。屈辱に身体が熱くなる。
しかし、それだけが原因だろうか。眠るときと同じあの疼きを思い出す。
（心臓までドキドキして……う、ううっ……私はこんなことを望んでいない……これはただの取引。時間稼ぎでしかないのに！）
動揺を気取られまいと毅然とした表情を崩さないように努めながら襟留めを外し、修道服の胸元を開いていく。
（う、ああ……視線が突き刺さるようだわ）
意に沿わぬ脱衣のはずなのに、背筋がゾクゾクと震えだす。
すべすべとした形良い乳房が淫魔たちの前にぷるりと晒される。量感のある、白くて優美な柔肉。そして、その中心ですでに固くしこっている桃色の乳首。
「くっくっく……なんだよ、こりゃあ、あんまり焦らすと可哀そうか？」

（調子に乗って……！）

辱めに対する怒りと恥じらい。だが、それに反して疼きはいっそう昂る。

「もっとよく見せるんだよ。ほれ、こうやって！」

淫魔が背後からアルトレッタの両腕をひとまとめにして高々と吊り上げると、恥ずかしい乙女の膨らみは隠しようがなくなり、羞恥にいよいよ肌が熱くなる。

「このまま腰を落として脚を広げていけ」

「ううっ……く、くだらないことを……」

辱めて嬲るつもりか。だが、それならば時間稼ぎをしたいこちらにも好都合だ。

（い……今はしかたがない。耐えるのよ……負けては駄目）

「く……うぅ……」

のろのろと腰を下ろすアルトレッタ。白のストッキングに包まれた艶めく脚が、両サイドのスリットから下品なガニ股となって徐々に飛び出していく。

そして、脚を広げきった状態になると、淫魔がスカートの前を持ち上げた。

「聖女様はつけてる下着まで神々しいな。好きだぜ、こういうの」

純白のショーツが露出し、恥部に鼻先が突きつけられる。

（こっ、こんな奴ら……なんかに！）
ぶるぶると脚を震わせながら視姦に耐えつつも、火照りはますます酷くなり、身体の奥から何かが溢れ始める。
「お、おい、こいつ……下着にいやらしい染みを広げ始めやがったぞ！」
「ははっ！　マジかよ、さすがにそこまではないと思っていたんだがな！」
（そんなはずないわ！　ハッタリよ。動揺をさせようとしているんだわ）
だが、太腿に伝い落ちる熱い滴の感触は身に覚えのあるものだった。
夜ごと惨めに悶えながら滴らせている快楽の蜜液だ。
「あ……ああっ……！　う、嘘……こんなことで……そんな！」
止めたくても止まらない。それが次々と溢れてくる。
それを合図に淫魔たちが一斉に手を伸ばして身体をまさぐり始めた。
「ああっ！　んあはあっ……い、嫌っ……くうっ……だ、駄目……」
滅茶苦茶に揉みしだかれる乳房。ショーツの上から恥裂をぴらぴらと嬲る幾本もの指。うなじを、唇を、太腿を、這い回る淫魔たちの舌が唾液の筋をつける。
声を出すまいとしても、切ない喘ぎがとめどなく喉奥から溢れてしまう。

気づけばアルトレッタは仰向(あおむき)の状態で、淫魔たちに両手両足を持ち上げられて吊り橋にされてしまっていた。

周りから次々と突き出された肉棒が柔肌の至る所にこすりつけられて、それらは突き立てるほどに硬く、大きく、熱くなっていく。

「んぐうっ……ううっ、け、汚らわしい……」

「それにしてはビショビショに濡らしているじゃないか」

淫魔がペニスの裏筋をクリトリスの上で滑らせると甘い激悦が走った。

「～～～～～～～っ！」

喜悦の絶叫を危うい所で押し殺すも、身体の反応はもう隠せない。

「入口もこんなにぐちゃぐちゃに柔らかくなって挿れて欲しがってるぜ？」

別の淫魔が膣口(ちつこう)を弄(いじ)り陰唇を揉みほぐす。その心地良さは疼きを加速させた。

（うあああああっ……いっ、いやらしい声がっ……もっ、漏れっ）

「そ、そんな……ことはっ、あ……ぅあっ、んあぅ……あぁ、あああぁっ！」

「さあ、お前も自分ばかり気持ち良くなってちゃ申し訳ないだろう？」

悶えるアルトレッタの顔前にはまた別の淫魔の陰茎が突き出される。

「ぐっ……こ、こんなものを……」
「グズグズしていると、もっと申し訳ない気持ちにしてやるぞ」
膣内に突き立てられた指がねちょりと音を立て、掻き混ぜ始める。
「んおおおっ、ふあっ……ああっ、あああっ！」
腰から下が溶けてしまいそうになってアルトレッタは身を弾けさせた。
（だ、駄目っ……こ、こんなことをされたら……ああっ、うっ、お、堕ちる……気持ち良さに……の、呑まれてしまう！）
「わっ……わかった……うああっ……わかった……からあっ！」
叫び声に淫魔たちが手を止め、ようやく狂おしい悦地獄から解放される。だが、彼らが見守る中、約束の行為を果たさなくてはならない。
（く、屈辱……だ……こんなことを……）
アルトレッタはわなわなと震える舌を突き出し——淫棒（いんぼう）の肉先を受け入れた。
ぐぽ……ぬちゅうっ
すぼめた唇と濡れた舌先が肉に触れる。が、淫魔はそれ以上、肉棒を進めてはこない。彼女自身の意志で先をしろということだ。仕えるように舌肉を動かす。

「はむ……ちゅ……ん……ちゅぷ……」

「お、おお……なかなか上手いじゃないか。裏側だけじゃ駄目だぞ。上からも、横からも……それに袋もな。口の中に含んでじっくりとしゃぶってみせろ」

淫らな指示にいっそう恥じらいが掻き立てられる。覚悟は決めていたはずだが、要求をされる内容の淫らさはアルトレッタの想像を超えていた。

仰向けに吊られたままでは首を伸ばさなければ睾丸を口にすることはできない。身を反り返して必死で淫魔の股間に吸いつき、献身的なおしゃぶりを開始する。

「んぐっ……んんっ……お……んぶっ」

美貌を押しつけて、ふっくらした唇を陰嚢の醜い皺に寄り添わせ、縮れた厚い皮を拡げて中の玉を舌で持ち上げて転がしていく。苦しげに、切なく眉根を寄せながらも彼女はしかし、いつしか一心不乱にその作業に没頭していた。

まるで、そう、毎日捧げる祈りのように。これまでずっとしてきたかのように。

（か、身体が変……おかしい。嫌なのに……淫らで邪悪な行為のはずなのに……もっとしたい気持ちに……う、ううっ……どうして!?）

出来損ないの半淫魔――ラケルたちのあざけりが脳裏に甦る。違うと否定した

くても、この悍ましいはずの行為に湧き上がる快感に自信が揺らぐ。
そんな後ろめたさに淫魔の要求が更なる追い打ちをかけた。
「言ってみろ……お前が今していることを、自分で説明しながら続けるんだ」
（……そ、そんなこと！）
「やれ。言い方がわからないのか？　不勉強だぞ、教えてやる……」
一瞬、躊躇（ためら）ったアルトレッタに告げられる無慈悲な言いつけ。
「うう……わ、私は……淫魔のおチンチンを……すっかり全部舐め……今度は、はしたなくキンタマをしゃぶっています……」
教えられた卑猥（ひわい）な言葉を口にすれば、もたらされたのは激しい羞恥と、そして快感だった。
「あっ、あああ～っ……こんな……ああうっ……ふあっ……」
「次はキスをしてもらおうか。できるか？　恋人にするようなやつだぞ」
「こ、恋人なんて……いないわ……」
「フフ、そうかじゃあ、コイツがお前の初めての恋人ってわけだ」
どうすることもできない。震える口を寄せ、亀頭の先に口づけをする。

「いいと言うまでだ、口を離すな」
「うう……」
ああ、どういうことだろう。厭わしいはずのその接吻はアルトレッタの情欲をますます煽り、唇に触れている醜塊な肉を愛おしく感じさせるのだ。
「次はこちらにもな……そう、むっ……なかなか気分が出てきたじゃないか」
当然のように睾丸も押しつけられ、その下でアルトレッタの顔は紅潮しきっていた。恥ずかしさと屈辱と快感とが混沌としたまま押し寄せる。
眉を寄せて耐えるその顔にペニスを乗せられ、陰嚢の裏に献愛のキスを捧げる様子を淫魔たちが嘲笑する。
「凄ぇぞ、こいつ、キンタマにキスしながら乳首を尖らせてやがる！」
聖女の乳首の先端は哀れなほどに勃起していた。摘まれれば更なる快感が身体中を駆け巡る。身体の痙攣はきつい姿勢のためだけではなかった。
むせ返る陰嚢の異臭が心地良く感じられるような錯覚すら覚える。
「よかろう……それではお待ちかねをくれてやろう」
淫魔がアルトレッタの頭部を抱え上げ口の中に肉棒を突き立てた。唇を割って

押し込まれた剛直が舌を滑って喉奥まで満たす。
ごぷうっ！　じゅぷっ！　どしゅっ！　ごぽぽっ！
口腔を犯されながら、大きく広げてしまった両脚もまたガッシリと抱え込まれ、そして、とめどなく愛液を床へと垂れ零す汁穴と化したアルトレッタの秘裂に、別の淫魔のペニスがあてがわれた。
（ああっ……犯されてしまう！）
仲間を救うためと心を決めてはいても、いざとなるとやはり悔しい。勇ましい武装聖女といっても、まだ十七歳なのだ。だが、アルトレッタは自分の中のもう一人の自分が、それを望み、待ち焦がれてすらいるのを薄っすらと感じ取った。
それこそが恐れていたことだった。淫魔との性交に耐えきれなかったら……。
「ま……待て！　私は……ああっ、あああああああぁっ！」
ぬちゅうううっ！
抵抗も虚しく媚肉を一気に貫く巨大な肉棒。
口と性器を塞ぐ挟撃のピストンがアルトレッタの裸身をガクガクと揺さぶり、喉奥、そして子宮に、ペニスの先端が何度も何度もぶつけられる。

「ごっ！　んぅぶっ……んおおっ、んはあっ……んぶうぅっ！」
「締まるぞ、このマンコ！　くはははは！　どうだ、淫魔のチンポは最高だろう！」
（はあんっ……ああっ、気持ちいいっ！　滅茶苦茶にされてるのにっ……ああ、こんなに乱暴にされているのに！　私はどうしてしまったの？　はああんっ！　お腹の中、ズンズンきて……それにお口もぉっ……ああっ、あああんっ！）
「命令だ！　自分で吸い出せっ！」
何を？　だが、言われずとも従っていた。唇が勝手に動き、懸命に吸いたてる。膣は締めつけを増して肉棒を絞り出す。
（どうして⁉　どうして私はこんなことを自然にしてしまうの⁉）
貪る淫棒の逞(たくま)しい肉圧。淫液にぬるつく膣内に満ちる充足と悦(よろこ)び。
自分はこれを望んでいた。これまで誰かと愛を交わしたことなどないのに！
「うおっ……い、いいぞっ！　ふはははっ、これがお前の本性だ！」
（感じている……私のお口で……ああ……）
淫魔たちが自分の肉体で喜んでいる。何故、それがこんなに嬉しく感じるのか、燃え上がるのか？

抑えきれぬ情動のままに舌は泳ぎ、艶めかしく唇をぬめらせてしゃぶりつく。
応えて淫魔たちのペニスもまた躍り狂った。
「ああんっ！　もっと……ああ、もっと激しくっ……んはあああっ！」
ついに、口を割って出る懇願の叫び。今、自分は歓喜している。
そう自覚した瞬間、アルトレッタの脳裏に映像が閃いた。
これとは違う何者かのペニスに奉仕する己の姿――
「はあんっ！　チンポ好きぃっ！　んはああ、太くて硬いのぉ……上のお口でも、下のお口でも、いっぱい、いっぱい、おしゃぶりさせてください！」
フラッシュバックの中の自分と同じ言葉が口を衝く。
それは、忘れていた幼い頃の体験なのか？
故郷の村でも自分はこんな風に淫魔に奉仕をさせられていたのか？
だが、そんなことすらも、もう考えることはできなかった。理性は吹き飛び、自分を犯すこの肉がただひたすらに愛おしい。
「ああっ、欲しい。アレが欲しいです！　いつもの熱いの！　私の中を満たしてくれるネバネバしたやつ……出して！　お口にも、マンコにもぉ、ぜんぶぅ！」

そして、それは発射された。
びゅくっ、どびゅっ……どびゅうううっ！　ぶびゅ……びゅるるるるるうっ！
咽喉と子宮内に熱液が一直線に注がれ、同時にアルトレッタも絶頂する。
「あああ、あぶぅっ……いっ、いぐぅ……いきますっ！　お精子いっぱいぃ……マンコの奥にびゅーびゅー当たるの！　いく、いくっ、いくいくいくいくっ……ああああああ……いぐうぅぅうぅぅぅぅぅぅっ！」
注がれ、そして溢れ出るザーメンの熱と匂い。オーガズムの心地良い引き潮と共に、甦った記憶もまた砂浜に書いた文字のように消えていく。
だが、今のアルトレッタにはそれも、どうでも良いことだった。
「呑み込め……」
口蓋いっぱいの白汁をコクリと嚥下し、唇に垂れ出た分も惜しそうに吸い戻し、そればかりか淫魔たちの突きつけるペニスの先の残り汁まで舐め取る。
床の上に下ろされると、もう命じられずとも自ら舌を差し出し、愛液と精液にまみれた陰茎をきれいに拭った。更には進んで次の相手を求めてしまう。
「ご奉仕いたしますぅ……んおぉ……気に入って頂けるよう上手にしますから、

ママは対魔忍
MAMA WA TAIMANIN
ましょ堕ちる熟くノー
第二話 囚われた二人の対魔忍 刻まれる背徳と被虐快楽
狂いだした日常。
そして現役対魔忍を狙う凌辱の魔手！
前回までのあらすじ
引退し家族と共に平穏な日常を送っていた、元対魔忍の吉沢加奈。しかし加奈の息子の親友である健也が魔族の毒牙にかかり強制発情状態に。健也を鎮めるためその身を差し出す加奈だが、少年の太く逞しいペニスで何度も膣を貫かれ、激しい絶頂を味わってしまう……。
小説 NOVEL／新居佑（あらいゆう）
挿絵 ILLUSTRATION／えれ2エアロ
原作 ORIGINAL／Black Lilith（ブラックリリス）

「……ああ、ぼ、僕はなんてことを……っ」
健也の自宅。
その自室で、健也は数時間前に自分がしでかしたことの重大さを思い出し、強烈な後悔の念に駆られていた。
「加奈おばさんは元対魔忍で……。僕は魔族に……っ。そ、それで僕はオバサンとセ、セックスをして……あ、あぁあぁっっっ」
時間はすでに正午を回っており、照明もつけず、カーテンも閉めっぱなしの中、健也は頭を抱える。
いったい、いつ、どうやって自宅に戻ったのかの記憶は曖昧だ。
対魔忍？　魔族？　そんなものがこの世に存在するなんて、自分でも訳がわからない。
それに憧れの人であった加奈との欲望にまみれたセックスなど……。
ビキンッッ！　ビクビクゥッッ！
しかし下半身に刻まれた圧倒的な牡の快楽の名残が、昨晩の出来事が本物であったことを、なによりも確かに健也の理性に突きつけている。

目が覚めたのも、下半身に滾る、これまで感じたことのないような熱いペニスの猛りによるものだ。

それは今でも続いており、自分でもびっくりするくらい巨大に勃起している肉棒――そこから発せられるジンジンとした、痛く、そしてたまらなく甘い衝動が、夢だと思いたかった、加奈への暴力的なまでのセックスの快感を、健也の五感すべてに再現する。

「はぁ、はぁ……ああっ……オバサン……っ。加奈、おばさん……っ」

加奈とのセックスは、気持ちよくてたまらなかった。

生まれて初めての衝撃、そして快感だった。

普段おとなしく引っ込み思案だと自覚している自分の吐息が、明確な野性味を帯びてきているのは、決して夏の暑さのせいではない。

グッッッ！　シコシコッッ！　シコシコっっっっ！

健也は下半身から迸る牡の劣情本能に導かれるまま、勃起した肉棒を右手で握り、そして激しく上下に扱いた。

「うっ、う、ぁぁうっ……くぅうっっっ！」

シコシコッッッ！　ビクンッッ！　ドビュゥウウッッ！

わずか1分ほど、生まれて初めての自慰をしただけで、健也の頭上にまで届く大量の白濁が、ペニスの鈴口から吐き出される。

「はぁ……はぁ、だ、だめだ……。気持ちいいのに……ああっ、こんなんじゃ足りない……。あ、あのときはもっと……っ。オバサンとのセックスの時は、もっと気持ちよかったのに……っ」

自慰すら知らなかった初心（うぶ）な健也にとって、加奈を思い浮かべてのオナニーは、たしかに気持ちいいものであった。

けれど昨日の深夜から、悟（さとる）たちが起きてくる朝方ギリギリまで犯し抜いていた、加奈の女膣への射精は、自慰とは比べものにならない、圧倒的な快感を健也の脳内に刻み込んでいたのだ。

加奈の熟れた膣壁（ちつへき）が、熱く膨れ上がった剛直の先端から根元まで、ありとあらゆる気持ちいいところを、押しつぶさんばかりにギチギチと締め付けてくる感触。

それだけで、頭が痺（しび）れてしまいそうな快感だったが、加奈のマンコはそれにとどまらず、健也の射精とともに、さらにギュゥウウッッ！　と収縮し、まるでペ

ニスから精液を残さず搾り取ろうとするかのような、貪欲な牝の本能を露わにしてきた。

「も、もう一回、オバサンとセックスしたい……。ああ、でもそんなこと……っ。オバサンは対魔忍だって……っ」

対魔忍という聞きなれない単語の意味はよくわからない。

けれど、いつも凛々しさと正義感に満ち溢(あふ)れる加奈がついていた仕事だ。魔族と呼ばれた男の会話からも、対魔忍が正義を守るために戦うのだということはわかる。

「……あ、ああ。でも正義の対魔忍が、あんなに感じて……。それになんてエッチな服だったんだろう……っ。はぁっ、はぁっ……。正義のヒロインを……。対魔忍が僕のチンポで……。僕が、僕が対魔忍のオバサンを気持ちよく……っ」

触手に囚われながらも、自分を助けようとしてくれた加奈の凛とした表情、そして自分のペニスで、狂ったように乱れた痴態を晒した牝の表情……そのたまらないまでのギャップ。

ビキビキ……ッッ！　ムクムク……ッ。

あまりに淫らな落差を思い浮かべると、射精したばかりのペニスが、再びその硬さと熱さを取り戻してくる。

「……そ、そうだ。それが対魔忍なんだ。あの魔族が言っていた。対魔忍は牝豚だって言葉は本当に……っ。ああ、でもそんないけないこと……っ。くぅっ、加奈おばさん……っ。対魔忍、加奈……ぁっ」

限界だと思っていたペニスが、カァッ！　とさらに熱くなり、内側からはじけ飛ばんばかりに苦しさと、牡の切なさを増していく。

そしてそれは、心優しかった少年の内に秘めていた、抗(あらが)いきれない牡の支配欲を覚醒させていった。

「か、加奈オバサンのマンコで出したい……っ。た、対魔忍の加奈オバサンを……っ。はぁはぁ、対魔忍、犯す……っ。牝豚、あああ、呪いのかかった僕のチンポでぇぇっっ！」

植え付けられた、気づいてしまった自慰では決して癒(い)えない牡の欲求。

強く凛々しい女を牝に躾(しつ)けることへの、何物にも勝る快感の爆発。

「も、もう一度見たいよ……っ。オバサンのエッチな顔、牝の声……っ。魔族を

倒す、かっこよくて強い、正義の対魔忍が、僕のチンポで牝豚穴になるところ……おおっ！」

ふっっふぅっ、と健也の吐息が荒々しさを増していく。

もうオナニーで収まるような欲望ではなかった。

たとえ親友の母親だろうと、正義の味方であろうと……。いや、だからこそ犯したい。人妻である加奈、対魔忍である加奈を犯すことで、もっともっと気持ちよくなれる、絶対的な牡の確証が、健也の脳内を埋め尽くしている。

ゾワゾワァァッッッ！

健也自身は気づいていないが、背筋にゾクリとした背徳の感触が走るたびに、健也がまとう気配が、黒く淫らなものに侵食され、ジワジワと増大していく。

「……くくく、どうやら自分の淫らな欲求、そして才能に気づいたようだな、小僧。いや、健也。それでは私がお前に力を授けてやろう。吉沢加奈を……元対魔忍を調教し、堕とす、淫らな力をなぁ……っ」

いつ現れたのか、いつからそこにいたのか……。

エアコンの効いていない部屋だというのに、暑苦しそうな燕尾服でありながら、

汗一つかかない涼し気な表情を浮かべている淫魔が、眼鏡の奥で瞳をニヤつかせながら、健也に向けて手を差し伸べる。

「い、淫魔……っっ⁉　ち、調教……。対魔忍を、オバサンを僕のチンポで……？　そう、調教してもいいんだ……。したいんだ……っ！　僕は……っ！　力が……欲しい……っ！」

理性を振り切り、湧き上がる性欲が望むままに、男の冷たい掌を取って、立ち上がった健也。その股間には、かつてないほど雄大に勃起した肉棒が、ムワッとした牡の濃い淫気を放っていた。

「……ママ。ママってば……っっ！」

「え、あ……ああっ、ごめんなさい。どうしたの悟？」

「どうしたのって、それ僕のセリフだよ。朝からボ～っとしちゃってさ」

時刻は朝の10時を回った頃。

愛する夫である慎吾（しんご）を会社に送り出し、洗濯、掃除……と、対魔忍を引退し、主婦となった加奈の朝の日課が、ちょうど終わったところだ。

リビングのソファに座り、無意識のうちに眠りかけていたところで、息子の悟に声をかけられたのだ。

「僕、これから、また遊びにいってくるからさ。朝は友達ん家で、涼しくなったら公園でサッカー。帰ってくるのは7時くらいかな」

「あ、そ……そうだったわね。ごめんなさい、ママ、ちょっと寝不足で……。お小遣いは玄関に置いてあるから、お昼はそれで食べなさい」

ソファに座ったままの加奈は、見た目は変わらないように見える。しかし昨日までのようなハツラツとした輝きは見られない。

ニコリと笑顔を作り、表には出さないようにしているが、どこか気だるそうで、心ここにあらずといった雰囲気だ。

「うん、わかったっ！　でさぁ、ママ。昨日の公園でしたトラップ、あれ本当すごかったよっ。ママって、めっっちゃくちゃサッカー上手かったんだね？　友達もみんな、すげぇすげぇって言っててさ。へへ、僕、めちゃくちゃ自慢しちゃったよっ！」

加奈の不調の、本当の理由など知るはずもない悟が、子供らしい純粋な笑みを

浮かべて、はしゃぐように言ってきた。
それは、昨日。公園で悟のシュートミスのボールに、加奈が元対魔忍の超絶運動神経を生かし、プロ顔負けの華麗なトラップを決めたことだ。
悟はもちろん、夫の慎吾にすら、余計な危険が及んではまずいと、黙ってきた加奈の過去。
人知を超えた魔族を誅する対魔忍の力……。
本来の実力を発揮すれば、オリンピックの金メダルなど楽に取れる身体能力を持っているが、世に忍んでこその忍び。
それをひけらかしたことは一度もなく、あくまで一般の主婦として過ごしてきた。
昨日、思わず条件反射的に見せた（一般人からすれば）スーパーテクニックに、悟は鼻高々といった様子で、加奈の隠された実力を、まるで我がことのように胸を張る。
「パパがいつも言ってるけど、ママはやっぱりすごいやっ！　あ、今度みんなにサッカー教えてよっ！　きっとみんなすげぇ喜ぶからさっ、僕の運動神経がいい

のも、ママのおかげかなぁ？　へへ、僕、ママとパパの子供でよかったよっ。じゃ、行ってきま～すっ！」

言って、夏の日差しの中、元気に駆け出していく悟。

天真爛漫で裏表のない悟の性格から出た、加奈を誇りに思うといった内容の言葉は、母親として、本来なら恥ずかしくもあり、そしてうれしくもあるものだ。

だが、今はその言葉が、加奈の心に――そして心と繋がる、その熟れた身体にも、ジワリと突き刺さる。

「ええ、行ってらっしゃい悟……。……う、く……あ、くふぅっっ！」

悟が完全に出かけたのを確認すると、加奈は玄関の壁に身体を預ける。

その艶（なま）めかしい女体をビクンッ！　と弾けさせ、母親と対魔忍……そして一人の女としての間で揺れ動く、切なげな、そしてたまらなく淫靡（いんび）な表情を浮かべてしまう。

（あ、ご……ごめんなさい悟、慎吾さん……っ。はぁはぁ、き……きついぃっ。これが感度３０００倍の快感……っ。き、気を抜いたら一瞬で肉欲に溺れさせられてしまうわ……っ。身体が熱くて、ど……どうにかなってしまいそう……よっ）

加奈は、その凛とした美貌に、夏の暑さのためではない汗を浮かべ、はぁ、と甘く艶やかな吐息を漏らす。

薄いTシャツのわずかな衣擦れだけで、剥き身の勃起クリトリスを愛撫されたかのような快感が、ビクゥウッ！　と脳天にまで突き抜けてしまう。

常人ならとっくに正気を失っているほどの狂気の快楽。

強靭な精神力を持つ元対魔忍の加奈であっても、絶えず精神を集中していなければ、人目をはばからず、絶頂してしまいかねない、淫欲に呪われた肉体へと改造されてしまっているのだ。

「くっっ、だからって快楽に屈するわけにはいかないわ……っ。失踪した元対魔忍のみんな。そして健也君……。悟や慎吾さんのためにも、私は……っ！」

汗で体のラインに、べったりとくっついたシャツに、さらに卑猥なアクセントを加えている発情勃起乳首が、ジンジンと疼く。

ぴっちりとしたホットパンツの内側では、さらさらした下着の触感だけで、子宮がキュンキュンと淫らに悲鳴を上げるほどの快感が渦巻いている。

（くふぅっ、私は元対魔忍なのよ……っ。このくらいの快楽……っ。ああっ、私

は対魔忍なのに、悟の母親なのに……私はなんてことを……っ）

熟れた女体をコトコトと煮込むような肉欲の炎よりも熱く、加奈の心をジンジンと焦がすのは、悟の親友である健也のペニスで激しく悶え、慎吾にも見せたことのない派手なエクスタシーを、無垢な少年に見せつけてしまったことだ。

（いくら肉体を改造されたからって、初心な健也君にあんな姿を……っ。それに彼の初めてをあんな形でなんて……）

本来なら守るべき相手の肉棒で、いったい何度昇天したことだろう。健也のペニスから淫魔の呪いを解くのが目的なのに、感度３０００倍生セックスの想像を絶する快楽に抗いきれず、牝の悦びを露わにしてしまった。

たとえ忍びの術でも、数時間前の、しかもあれほど強烈な記憶を消すことはできない。……心優しく、思いやりがある健也に、親友の母親と交わり、あまつさえ女が快感に本気で悶え泣く、鮮烈で淫靡な体験を刻んでしまった。

加奈の心に残る強い後悔と背徳感。

それは健也に対してだけでなく、何も知らず、自分を慕ってくれる夫の慎吾や、息子の悟に対してもそうだ。

（次は必ず耐えてみせる……っ。健也君に、あんな歪（いびつ）な快感を教えてはいけないわ。対魔忍は決して牝豚なんかじゃない。悟、慎吾さん……っ。私は……ママは、絶対にみんなを守るから……っ！）

そう固く覚悟を決める加奈。

そんな加奈の心情を弄（もてあそ）ぶように、リビングにフッと、昨日の淫魔、そして彼に連れられた健也が現れる。

「――ふふ、小僧の呪いを解くには、まだまだ射精が足らないぞ？　呪いを解くのが先か、お前が牝奴隷に堕ちるのが先か……。さて、どっちかな？　元対魔忍、加奈？」

「っっ、淫魔……っ。調子に乗るのも今のうちよ……っ。思い知らせてあげるわ。対魔忍の真の強さをね……っ！」

加奈が淫魔をキッと睨みつける。

「あ、あぁ。加奈オバサン……。対魔忍……はぁはぁ……っ」

そんな気丈な加奈の姿を、肉棒をすでにバキバキに勃起させて見つめる健也。

「健也君……っ。心配しないで。必ずオバサンが助けてあげるからね……っ」

そう優しく微笑みかけるが、純粋だった彼の瞳の内側に、すでに小さな荒ぶる牡の欲情の炎が灯っていることを、加奈はまだ気づけずにいた。そして――。

ジュクン……ッッ。

「はぅ、んん……はぁ、はぁ……ぁん……っ」

加奈は気づいていなかった。

健也の半ズボンを力強く押し上げる、数時間前に自分の膣穴を貫いた極太ペニスを目にした瞬間に、感度３０００倍とは違う……加奈自身に眠っていた牝の被虐本能が子宮の奥底で、強く、たしかに妖しい胎動を始めていたことを。

「……ここか」

現役対魔忍、杉田夏鈴（すぎたかりん）が立っているのは、加奈が住む街の外れにある、寂れた工業団地跡だった。

新たな都市開発計画の一環により、今ある工業団地を取り壊し、街の中心部に繋がる巨大ショッピングモールが、あと数年以内に開業される予定となっている。

今は無人の廃墟群。

そのうちのひとつの工場内に、夏鈴は地下への怪しい入り口を発見していた。
夏鈴は、その高い忍びとしての技量から、戦闘だけでなく、諜報活動なども単独でこなす対魔忍である。
ここは、その夏鈴がようやく見つけた、元対魔忍失踪事件への重要な手がかり。その最後のピース……すなわち、敵である淫魔のアジトへの入り口なのだ。
ギィィィッッ。古びた金属の扉を開き、地下へ、さらに地下へと進む夏鈴。
そこには数々のブービートラップが仕掛けられていたが、そのすべてを夏鈴は事もなげに、次々と突破。妖気漂う地下深部へと、ピチッとした対魔忍スーツに包まれた、艶やかな女体の歩を進めていく。
歩みを急ぐ夏鈴は、ふと先日再会した加奈のことを思い出す。
加奈が現役時代のとき、まだ今ほど実力のなかった夏鈴は、よく彼女に助けられていた。
戦闘技術だけでなく、闇の者と戦う上での、心構え、対魔忍としての誇りなど、彼女から教わったものは、現在、数多（あまた）の魔族に恐れられる、凄腕対魔忍となった夏鈴の血と肉になっている。

今年で25歳。

瑞々しさと艶やかさが、絶妙に共存している美しい盛り……平穏な日常を得て、幸せな生活へ踏み出すには、ちょうどいい年頃だ。

しかし対魔忍に、強い誇りとやりがいを見出している夏鈴には、まだ対魔忍を引退するという選択肢は思いつかない。

だが、息子とその友達に囲まれ、彼らを守るために、強い力を発揮できる加奈の姿、その優しい笑顔を思い出すと、彼女が暮らす平和な日々を、守り抜きたいと、心から強く思う。

（引退した対魔忍たちの幸福を守る……。それが現役対魔忍である私の使命だ。だからこそ今回でヤツを倒す……っ！）

今回の事件の首謀者である淫魔と、加奈とともに公園で戦ったのが、一週間ほど前のこと。

これまで何度も男の尻尾を掴(つか)みかけてはいたが、ずる賢そうな淫魔は、その見た目通り、卑劣かつ周到なやり口で、夏鈴の追っ手から逃れ続けていた。

しかし、今度で確実に終わりにする――。

それが現役で対魔忍を務める夏鈴が、引退した対魔忍たちへできる、最善の生き様だと、強く胸に刻んでいる。

トラップや魔物を排除しながら、1時間あまり地下へと潜っただろうか。

そこには地上の廃墟とはまるで違う雰囲気の、異様な光景が広がっていた。

まるでマッドサイエンティストの実験室だ。

数か所ある部屋のどれもに、人がすっぽり収まるほどのカプセルや、無数のチューブが繋がったデジタル機器などが置かれている。

それらすべてに電源が入っており、このフロアがなにか非人道的なことのために、今も使われているのは明らかだ。

「どうやら、ここで間違いなさそうだな。あとは囚われた元対魔忍たちを救出しなくては……。それにしても、くっ……っ」

マスクに隠された夏鈴の口元が、嫌悪感で歪む。

床に散らばった無数の注射器や、べとついた溶液の水たまり。それは囚われた対魔忍たちが、ここで卑劣な調教を受けていたことを雄弁に物語っている。

「あの淫魔め……。絶対に許さんぞ……っ」

夏鈴自身は幸いなことに、対魔忍に付き物の、その手の凌辱を受けたことは一度もない。

いや、まだ若い頃、ミスをしてオークに処女を奪われたことがあったが、本格的に犯される前に、加奈に助けられ、凌辱を免れたのだ。

そのときの痛み、そして女としての屈辱は、今でもはっきりと覚えている。

それゆえに、女を欲望の捌け口にする淫らな調教の類に、猛烈な嫌悪感を抱いてしまう。

「対魔忍は、悪を誅する忍び……。ゲスな連中の快楽の道具などではない……っ」

その強い意志の言葉は、自分に対し、そして捕まった元対魔忍たちへ向けられたものだ。

対魔忍への強い自負が、夏鈴の歩を、フロアのさらに奥へと進ませようとした、その瞬間……。

「あ、本当だ。おじさんが、そろそろココを突き止めるだろうって言ってたけど……。へぇ、さすが現役の対魔忍のお姉さんだ。優秀だなぁ」

「なっ、キミは……っ!?」

夏鈴の目の前にいきなり現れたのは、まったく予想していなかった人物だった。
（……っ。たしか健也君、だったな。加奈の子供の親友がなぜこんなところに……っ⁉）
わずか数メートルほど先に立っているのは、私服姿の健也だった。
護衛対象である加奈の身辺調査報告書。そして先日、公園で一度見知っている少年の突然の出現に、地下に潜入してからずっと保ってきた夏鈴の緊張が、ほんのわずかだけ途切れる。
だがそれは時間にして1秒あまりのこと。
現役の優秀な対魔忍である夏鈴は、すぐさま集中のレベルを引き上げると、目の前に立つ、少年を冷静に見つめる。
そしてすぐに気づく。
おとなしい風貌の少年には、まるで似つかわしくない濃い魔性の淫気が、健也の股間を中心として、身体から漏れ出ていることに。
「……健也君。なぜ一般人の、しかも子供のキミがここにいる⁉　事と次第によっては、たとえ加奈と知り合いだろうと……っ！」

数多の危機を乗り越えてきた対魔忍の勘に従い、表情を変えぬまま、ジャキッ、と健也の額に銃口を向ける夏鈴。

「ははっ、見た目通りクールだね、夏鈴さん？　優しい加奈オバサンとは大違いだ。……まっ、夏鈴さんも対魔忍なんだから、結局はチンポに負けちゃう牝豚なんだろうけど……ふふふっ」

無邪気に笑う健也の身体から、ブワッと噴き上がった魔の気配が、凄腕の対魔忍である夏鈴の背筋をゾワリッと震わせる。

「くっ、健也君っ……っ。キミは……、お前は何者だっ！　加奈をどうしたっ!?」

今の健也の雰囲気は、夏鈴が調べた気弱な健也のモノではない。対魔忍である自分を見下し、牝豚と言ってのけるその態度は、まるで魔族そのものだ。

理由はわからないが、たとえ子供であろうと、魔性の者のニオイがすれば、容赦はしない。

夏鈴は、グッと引き金にかけた指に力を込める。

「怖い怖い……っ。けどね夏鈴さん。ちょっと見てもらいたい映像があるんだよ

ねぇ」
夏鈴を嘲(あざけ)るように、健也の言葉に合わせ、夏鈴の右側の壁に、ブンっとモニターが浮かび上がる。
撮影用のカメラで撮ったものなのだろう。
その画面に記された日付は、夏鈴が淫魔と公園で戦った次の日の昼。
そしてその内容は、夏鈴が想像もしていない衝撃的なものだった。

「ふっ、ぐっっ！　はぅうっっ！　はぁはぁ……ふっ、ぎぃぃぃぃんっっ！」
「はぁ、はぁっっ！　ああっ、やっぱり加奈オバサンのマンコ気持ちいいっ！　僕のチンポをギチギチ締め付けて……っ。オバサンのマンコも、悦んでくれてる……ぅっ！　対魔忍はやっぱり、牝豚なんだねっ。そうなんですよね、加奈オバサンっ!?」
場所は、加奈の家のリビング。
昨晩と同じように、対魔忍スーツ姿のまま、触手に拘束されている加奈は、床に両手両足をつけた、恥辱の後背位姿勢を強要されていた。

豊満な女体のラインを妖艶に強調するように、ピッチリとボディに張り付いた戦闘スーツは股間、そして胸の部分が切り取られた状態だ。

そして隠すもののなくなった、熟したメロンのような二つの乳房は、背後に立つ健也によって、ムニムニと揉みこまれている。

同時に、愛する夫に操を誓った人妻の膣穴には、再び健也の怒張がズブゥウッッ！　と女芯の奥深くまで挿入されており、ピッチリスーツに身を包んだ熟女を、大人顔負けの巨根を持つ少年がバックで責める姿は、異様なまでの背徳感とエロティックさを醸し出している。

「牝豚なんて……っ。くふぅ、そんなこと言ってはダメよ、健也君っ。これは身体を改造されたから……。私とあなたがセックスしているのも、健也君のおチンチンが呪われているからなのよ……っ。わ、私は悦んでなんか……。淫魔の誘惑に乗せられてはいけないわ。呪いを解くために、ただ射精することだけを考えるの……んっふひぃいっっ！」

ゴチュンッッ！　ズボッズボッッ！　ズブチュンッッ！　パンパンッッ！

加奈が、その成熟した大人の女の身体をビクビクっと震えさせながらも、対魔

忍としての信念の言葉を紡ぎきるより前に、健也の腰が思いきり尻に叩きつけられる。
肌と肌とが弾け合う音と同時に、思いきり突き入れられた肉棒が、加奈の牝子宮の入り口に激しくぶつかる。
（お、おほぉぉぉ、ぉぉぉぉっっ！　ふ、深い……ぃぃっ。健也君のチンポ、ああ……慎吾さんが届かないところを軽々と……っ。し、子宮をチンポで突かれるのが、こんなにクルなんて……っ。だ、ダメよ悦んじゃ……っ。私が快楽に溺れるわけには……いかな、いわぁっ）
魔族に連れられた健也と、再びセックスをすることになって、十数分……。
魔族の方は、捕らえた他の引退対魔忍たちの調教があるからと、挑発めいたセリフを残し、いずこかへ消えてしまった。
しかし残された健也の強い性欲の発露の前に、加奈は若い剛直の突きこみから逃る、痺れるような快感に、必死に牝の声を押し殺していた。
「だ、だってオバサンっ。そんなこと言っても、くぅっ。オバサンのマンコがすごいんだよ……っ！　マンコの中のツブツブが、ものすごい勢いでうねって……

っ。チンポに絡みついてくるんだ……っ。マンコからチンポを抜き差しするたびにね、すっごい熱くてベタベタした蜜がくっついてくるんだっ。ほら、聞こえるでしょ、オバサンっ！」

グチュングチュンッッ！　ギュプギュプッッ！

健也が、その一見華奢（きゃしゃ）に見える腰を、漲（みなぎ）る牡の肉欲によって、大きく激しく前後させる。

カーテンを閉じた真夏のリビングに、決して聞こえるはずのない、淫靡な水と肉の音が響き渡る。

（んひぃいいいっっ！　あ、あぁ……なんていやらしい音を、私……いっ。くぅっ、でもこれは全部、肉体改造のせい……っ。私が快楽に屈しなければ、健也君の暴走を抑えられるはず。淫魔の思うようにはさせない……っ。早くみんなを助けないと！　健也君の呪いを解くまでは、耐えてみせ……んおっっ、ふぅぅぉおっっ！）

健也を淫魔の眷属に貶めないためには、射精させると同時に、健也の暴走している牡欲を鎮め、女が……対魔忍が決して快楽などには屈服しないという、強い

意志と結果を、少年に見せなければならない。だというのに――。

ジュルジュルッッ！

「ふぅぅぉおっっ、んおおおっっ！　しょ、触手……ひぎっ、くぅ、んんっっっ！　はぁはぁ、だ……ダメよ、健也君……っ。淫魔の力を使っては……あふっ、ひぃいっ……お、おぉぉぉぉぉぉんんっっ！」

加奈を捕らえ、そして今まさにジュルジュルと女体を這いずり回り、身悶えるような快楽を突きつけてくる触手たちを操っているのは、魔族ではなく、健也自身だ。

昨日、淫魔は健也に淫らな才能があると言っていたが、まさかこんな年端もいかない少年に、己の力を分け与えるなど思いもしなかった。

だからこそ、淫魔は健也だけを残したのだ。

それ以上に驚いたのは、健也が、このセックスの間のうちに、淫魔の力を使いこなし始めていることだ。

ギチュギチュッッ、ジュボジュボッッ！　ジュズゥウッッッ！

太い触手の先端についた、イソギンチャクのような無数の触手による乳首、そ

世界を闇に覆わんとする魔王を倒すため

——そして

魔王に囚われた姫を救うため

冒険の旅に出た勇者——と私

秘めた想いが行き着く先は!?

なんと救われた姫も勇者の資質を秘めていたのでした

私たちは共に戦うことに

勇者と姫はとても相性が良くて

旅を続けるうちに——

二人の仲が深まるのは

当然なわけでして——

かたや魔王の恐れる封印の力を受け継ぐ
見目麗しき聖王国の姿 リーシャ様
イイ…
かたや幾多の試練を乗り越え聖剣を手にし
魔王の手先を次々と屠った勇者 ジオ様
お二人は実に絵になりますね〜〜〜♡
そんな二人にお仕えできて
私はなんと幸運な司祭でしょうか
いなくても問題ない気しますケド
宿屋
堕天司祭エリエ
女の性に敗れた信仰
ははは ありがとう
でもこれまで戦えたのは君の助けがあったからさ
俺には君も大切な人だ エリエ
えっ
あわっ
勿体ない…お言葉です

そそっ
それでは
そのっ…

おやすみ
なさい!!

お二人は
ごゆっくり

ん…

こん

オレには
エリエが
必要だ
仲間でなく
一人の女と
して——

いけません
私は——

って何
これ——!?

奪え…

勇者を好いて
おるのだろ?

奪え…

体が…
動かない
これは…
夢——!?

わ 私は
二人を応援
するっ
立場です
…のにっ

こんなこと
望んでは…
——

一つに
——

手に入れ
たいのだろ?

違う…勇者様は私なんか
これは…偽者！
左様
魔王!? どうして
勇者は今頃姫と愛し合っておるぞ
だめ…甘言に騙されては…
邪魔な姫を
恨め
なのに貴様は一人で魔の手に堕ちるのだ
この世を憎め
理不尽であろう
悔しいであろう
恨め
貴様にも幸せになる権利がある
薄情な勇者を
恨め
姫さえいなければ
助けに来てくれるのに
自らの欲する物を
求めよ
ビッ
ビッ
ビッ

エリエ！無事か!!
今の気配は一体…!?
アア…勇者様…
リーシャ…様ア
と
オ
オ
オ
オ
オ

貴女さえ
居なければ……！
ガッ
危ない!!
ドガ!!
くっ
エリエに反撃するわけには
おのれ！また
見せつけるかァァァ!!

ジオ!!

んふふ〜〜♡
こ・れ・で
勇者様は私のモノ♡
エ…エリエ――!?
もう私自分の気持ち我慢するのはやめました
私だってジオ様を好きなのだから
う
やっ
愛し合う権利あるんです♡
ちょ
こっこれは君が魔法で――
ああん♡ジオ様ぁ
もうこんなにしちゃって♡光栄です
正気に戻れ！やめ…てくれ

やめませんよ〜〜♪
いつも姫様と仲睦まじい姿見せつけてくれた罰です
ほら♡私の手で気持ち良くなって♡
すまない
君のっ気持ちに気付か…
で…もなくて
こんなことは間違って…
間違って
自信あるんですよぉ♡
私いおっぱいだけは
いませんよッッ！

これに耐えれる男の人はいないって
あの方が教えてくれました♡
く…うぅ あの方!?
はうッ
あはは♡ 私のおっぱい気持ち良いですかぁ?
ッッ
勇者様も男ですねぇ おっぱいには勝てませんか
くッ
たぷたぷ——♡
そっ
ああ
ほーら出しちゃぇ むにむに——♡
うぁ…あ 待…

くああ
なん…だこれは
抜…け…んンッ
すっ吸うな！
うわぁ…カ…が
濃い…いン…ぷぁ
さすがは勇者様の精液♡
あは♡出したのにビンビン♡
何連発でもイケそうね

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/